

文部科学省

令和5年度国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業
国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究業務【タイプB】

令和5（2023）年度成果報告書

研究代表者 藤田 晃之
（筑波大学人間系・教授）

2024年3月31日

令和5（2023）年度成果報告書

目次

第一部	1
1－1. 業務の概要	1
1) 業務の目的	1
2) 業務の内容	1
3) 研究組織の概要	1
1－2. 進捗状況	2
1) 事務局の立ち上げ	2
2) 打ち合わせの開催	3
1－3. 今後の見通し	3
1) 研究員等の雇用	3
2) 専門家会議の開催	3
第二部	6
2－1. 生徒調査	6
1) 調査の概要	6
2) 進捗報告	7
3) 今後の見通し	9
2－2. 教員調査	10
1) 調査の概要	10
2) 進捗報告	10
3) 今後の見通し	27
2－3. 大学調査	29
1) 調査の概要	29
2) 進捗報告	31
3) 考察（中間報告）	50
4) 今後の見通し	53
2－4. 基礎調査（学校調査）	55
1) 調査の概要	55
2) 進捗報告	55
3) 今後の見通し	55
2－5. 基礎調査（大学調査）	56
1) 調査の概要	56
2) 進捗報告	56
3) 今後の見通し	56
巻末資料	58

第一部

1-1. 業務の概要

1) 業務の目的

本業務の目的は、日本における国際バカロレア（以下、IB）の教育効果等に関する調査研究を行うことである。IB 認定校（以下、IB 校）における実態を把握しつつ、その教育効果等を分析し、調査結果を広く共有することで、日本における IB のさらなる導入や活用に資することを目指す。

2) 業務の内容

本研究では、「(1) 生徒調査」「(2) 教員調査」「(3) 大学調査」という3つの調査枠組みを設定し、それぞれの枠組みにおいて①及び②の調査内容を実施することを計画した。

(1) IB 校及び生徒を対象とした調査（生徒調査）

- ①IB 校調査…日本の IB 校（一条校）に対する実態調査を行う。
- ②在学生調査…IB 校在学中の生徒の教育効果を明らかにする。

(2) 教員を対象とした調査（教員調査）

- ①教員調査…IB 校における教員の学びを明らかにする。
- ②英語開講（English-Medium Instruction: EMI）科目調査
…IB 校において英語で開講されている科目の授業実践の特徴を明らかにする。

(3) 大学及び修了生を対象とした調査（大学調査）

- ①大学調査…日本の大学での IB を活用した入試に関する実態調査を行う。
- ②修了生調査…IB 校卒業後の大学での学びやその後の進路を明らかにする。

このうち、「(1) ①IB 校調査／日本の IB 校（一条校）に対する実態調査」、及び「(3) ①大学調査／日本の大学での IB を活用した入試に関する実態調査」の質問紙調査による部分については、前者を「基礎調査（学校調査）」、後者を「基礎調査（大学調査）」として位置づけ直した。

本報告書では、生徒調査、教員調査、大学調査の進捗について述べたのち、「基礎調査（学校調査）」、「基礎調査（大学調査）」について報告を行う。

3) 研究組織の概要

本研究は、「生徒調査」を担う生徒調査班、「教員調査」を担う教員調査班、「大学調査」を担う大学調査班からなる。これら3つの調査班に分かれて調査を行うが、必要に応じて相互に連携する。また、基礎調査（学校調査）については、生徒調査班と教員調査班が、基礎調査（大学調査）については、大学調査班と株式会社トモノカイが主に担う。

<研究代表者>

藤田晃之（筑波大学）

<調査班統括>

生徒調査・大学調査：浜田博文（筑波大学）

教員調査：井田仁康（筑波大学）

<全体コーディネーター>

菊地かおり（筑波大学）、梅津静子（筑波大学）

<IB 機構との連絡調整>

キャロル・犬飼ディクソン（筑波大学）

<各調査班のメンバー>

生徒調査	御手洗明佳（淑徳大学）、齊藤貴浩（大阪大学）、松本暢平（千葉大学）、菅井篤（静岡福祉大学）、菊地かおり
教員調査	赤塚祐哉（相模女子大学）、木村光宏（岡山理科大学）、渋谷真樹（日本赤十字看護大学）、原和久（都留文科大学）、佐々木恵美子（サニーサイドインターナショナルスクール）、梅津静子
大学調査	花井渉（九州大学）、島田康行（筑波大学）、江幡知佳（大学入試センター）、岩渕和祥（東京大学）

<研究補助者（大学院生）>

教員調査：阿部透冴（広島大学大学院）、小澤志織（筑波大学大学院）、駒走聡俊（筑波大学大学院）、キャサリン・フェイス（筑波大学大学院）、原田群士（筑波大学大学院）

大学調査：駒走聡俊

<事務補佐員>

相馬未央（筑波大学）、池田亜都沙（筑波大学）

※所属は 2024 年 3 月 31 日現在。

1-2. 進捗状況

1) 事務局の立ち上げ

- ・本事業の事務局を筑波大学人間系学系 B 棟 421（IB 教育調査室）に設置した。
- ・11 月 21 日付で事務補佐員 1 名を雇用した。
- ・事務局メールアドレス（ibkk@un.tsukuba.ac.jp）を取得した。

2) 打ち合わせの開催

3つの調査班全体での打ち合わせ（コアメンバー会議）を計7回実施した。

	日時・開催方法	検討事項・内容
第1回	9月19日（火）17:00～18:00 対面+オンライン（ハイブリッド）	・キックオフミーティング ・自己紹介 ・事業計画案の説明
第2回	10月17日（火）17:00～18:00 オンライン	・基礎調査（学校調査）の調査項目の検討 ・基礎調査（大学調査）の調査項目の確認
第3回	11月14日（火）16:00～17:00 オンライン	・基礎調査へのフィードバックの共有 ・専門家会議の設置について ・各調査からの報告
第4回	12月11日（月）16:00～17:00 オンライン	・各調査からの報告 ・専門家会議のメンバーについて
第5回	1月19日（金）15:30～16:30 オンライン	・各調査からの報告
第6回	2月8日（木）12:00～13:00 オンライン	・各調査からの報告 ・報告書の作成にむけて ・シンポジウムに向けての準備
第7回	3月7日（木）12:00～13:00 オンライン	・各調査からの報告 ・報告書の作成にむけて ・シンポジウムに向けての準備 ・専門家会議の開催について

1-3. 今後の見通し

1) 研究員等の雇用

2023年度は年度途中からの事業開始により、研究員の確保が困難であった。2024年度は、常勤研究員1名、非常勤研究員1名、事務補佐員2名を雇用予定である。

2) 専門家会議の開催

本事業に対する第三者からの助言を得るため、2024年3月に第1回専門家会議を開催した。2023年度の専門家会議のメンバーは以下の通りである。

石田真理子（仙台育英学園高等学校・秀光コース教頭／国際バカロレアディプロマプログラム IB チーフコーディネーター） 勤務校：私立IB校（DP）
--

加藤崇英（茨城大学大学院教育学研究科・教授） 専門分野：学校経営・教育行政
関田晃（さいたま市立大宮国際中等教育学校・校長） 勤務校：公立 IB 校（MYP・DP）
松下佳代（京都大学大学院教育学研究科・教授） 専門分野：カリキュラム・学習評価
吉田文（早稲田大学教育・総合科学学術院・教授） 専門分野：教育社会学（計量分析）

※50 音順／敬称略

全員がそろそろ日程がなかったため、以下の 2 回の日程に分けて開催した。

日 時：2024 年 3 月 26 日（火）10:00～11:00 開催方法：オンライン（Zoom） 出席者： 専門家会議メンバー：加藤、関田、松下、吉田 調査研究チーム：藤田、浜田、井田、御手洗、齊藤、梅津、菊地
日 時：2024 年 3 月 27 日（水）15:00～16:00 開催方法：オンライン（Zoom） 出席者： 専門家会議メンバー：石田 調査研究チーム：浜田、御手洗、佐々木、梅津、菊地

※50 音順／敬称略

専門家会議にて出された主要な質問・コメント等は下記の通り。

<p>[生徒調査]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・MYP と DP の両方を実施している学校と、DP のみを実施している学校がある。それぞれの生徒の学びの状況は異なるため、分析の際には留意する必要がある。 ・IB 校に入る生徒のももとの資質・能力の特徴は何か。この点が分からないと、生徒の成長を捉えることができないため、この点を踏まえた分析を行う必要がある。 ・量的調査（質問紙調査）だけでなく、質的調査（生徒や修了生へのインタビュー調査）を行うことで、より分析を深めることができるのではないか。 <p>[教員調査]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・IB 教員はさまざまなネットワークに参加している。日本国際バカロレア校連盟（IB Association of Japan: IBAJ）やコンソーシアム等でのつながりもある。 ・一条校に勤務する英語話者の教員が参加できるコミュニティがあるとよい。 <p>[大学調査]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学入試で IB 生の選択肢が限られていることがネックになっている。 ・大学教員の IB 入試に対する理解が足りていないと感じる。DP 生のスキルを測る入試になっ
--

ていないのではないかと。大学調査での分析の際にもこのような視点を含めてほしい。

- 大学調査の出願資格に IB 科目修了証明書（サーティフィケート）の調査項目を追加したことは有意義であると思われる。IB ディプロマ（フルディプロマ）だけではなく、IB サーティフィケートの活用がもっと広まるとよい。
- IB 特別入試ではなく、総合型選抜等で志望大学に合格する生徒もいる。
- 海外大学の選択は奨学金が得られないと難しいと感じる。海外大学調査の際に、奨学金の情報があるとよい。

[全体]

- IB 導入を国レベルで支援するという構図をどのように捉えたらよいか。
- 学校によっては、IB コースとそれ以外のコースで学費が異なる場合がある。

これらの質問・コメント等を参考に、今後の調査計画に可能な範囲で反映させていく。

第二部

2-1. 生徒調査

生徒調査（IB校及び生徒を対象とした調査）では、「①IB校調査」及び「②在学学生調査」を行う。なお、「1-1. 業務の概要」の「2）業務の内容」で述べた通り、「①IB校調査」については、「基礎調査（学校調査）」として位置づけ直したため、「2-4. 基礎調査（学校調査）」において詳述する。

◆生徒調査（IB校及び生徒を対象とした調査）

- ①IB校調査…日本のIB校（一条校）に対する実態調査を行う。
 - i) 基本情報の継続的な調査
 - ii) 各プログラムの実態調査実施に向けた質問項目の検討及び質問紙の開発
 - iii) 外国人教員の雇用実態に関する調査
- ②在学学生調査…IB校在学中の生徒の教育効果を明らかにする。
 - i) DP生の高校入学時点でのコンピテンシー等に対する認識
 - ii) DP生のDP履修によるコンピテンシー等に対する認識の変化とその要因

1) 調査の概要

2020～2022年度に筑波大学が中心となって実施した「IBの教育効果に関する調査研究事業」において、ディプロマプログラム（以下、DP）を実施する学校に在籍する生徒に対して質問紙調査を行った。本事業では、当該事業における調査の課題を踏まえ、調査の実施方法や質問項目の見直し等を行い、IBの教育効果について、生徒の成長・変化をより詳細に明らかにすることを目的とする。

上述の事業における質問紙調査は、年度ごとに実施された。これまで、口頭発表、論文、シンポジウム報告等を通じ、DPを履修する生徒（DP生）と履修していない生徒（non-DP生）とを比較し、コンピテンシーの習得状況（自己評価）、高校の授業での学習経験、放課後の学習時間、進路等の変数について検討を行ってきた。

この調査は、DP生及びnon-DP生が年度ごとにどのように変化していったのかを追跡できる（パネル・データを構築し、分析できる）よう設計された。しかしながら、調査対象となるDP生の人数の少なさが分析上の大きなハードルとなり、クロス・セクショナル・データの分析にとどまった点が課題として残った。また、DP以外の課程の効果を検討することができていない点も課題となった。

以上を踏まえ、本事業における研究では、調査対象校の数を増やし、DP以外の課程も含めたIBの効果について、パネル・データをもとに分析することを企図し、以下のように調査の実施方法や質問項目の見直しを行い、IBの教育効果の測定を行うこととする。

2) 進捗報告

在学生調査について、2023年度は主に、(1) 全体の調査デザインの再検討、(2) 質問紙の見直し及び開発、(3) 研究倫理審査申請の3点を中心に実施した。

(1) 全体の調査デザインの再検討 (5か年計画)

在学生調査の目的は、ディプロマプログラム (DP) を履修する生徒に焦点をあてて、IB校在学中の生徒の教育効果を明らかにすることであった。当初は、高校1年生調査 (高校入学時点/高校1年生・4月)、高校2年生調査 (DP開始時点/高校2年生・4月)、高校3年生調査 (DP終了時点/高校3年生・9月) を計画していたが、より意味のある調査データの収集及び分析という観点から再検討した結果、高校1年生に対する調査は実施せず、代わりに、高校卒業後、大学生になったDP生の追跡調査を行うこととした。

調査デザインを再検討した結果は、以下の【表1】の通りである。高校生調査、DP修了生調査 (追跡調査/国内・海外)、年度末の報告書の内容と主な分析の視点について整理した。なお、★1~5は、高校2年生から大学3年生までの個人の成長を追跡することを想定して付している。

【表1】在学生調査 (修了生調査を含む) の計画 (2023~2027年度)

	高校生調査	DP修了生調査 (追跡)	①主な報告書内容・②分析
1年目 2023年度	2023年12月：質問紙検討, 1~2月：倫理審査申請		①全体の調査デザイン等
2年目 2024年度	2024年4月：高2生調査★2 2024年9月：高3生調査★1	4月-8月：質問紙作成, 9月：倫理審査・パイロット調査 (トモノカイ)	①高2・3集計結果 ②基礎調査の分析
3年目 2025年度	2025年4月：高2生調査★3 2025年9月：高3生調査★2	2025年10-12月：大学1年生調査★1	①大学1年集計結果 ②高2・3生調査の分析
4年目 2026年度	2025年4月：高2生調査★4 2025年9月：高3生調査★3	2026年10-12月：大学1年生調査★2 ：大学2年生調査★1 2027年2-3月：海外大学生調査	①高大接続 (高2~大1) ②大学1・2年生調査の分析
5年目 2027年度	2025年4月：高2生調査★5 2025年9月：高3生調査★4	2027年10-12月：大学1年生調査★3 ：大学2年生調査★2 ：大学3年生調査★1 2028年2-3月：海外大学生調査	①国際比較集計 (国内/海外) ②高2~大2生の変容と成果の分析

初年度である2023年度は、文部科学省IB教育推進コンソーシアム「IBの教育効果に関する調査研究事業」(代表：井田仁康/筑波大学、2021・2022年)で開発した「高校での学習・経験に関する実態調査」の見直し(詳細は後述)と、新たに作成した質問紙の倫理審査申請を行う。

2年目の2024年度の調査課題は2点である。1点目は、初回の高校生調査(第1波)のため、今後の修了生(追跡)調査を見越して、より多くの学校に調査協力をお願いすることである。2点目は修了生調査の質問紙開発とパイロット調査の実施である。高校生調査(第1波)は、4月に高校2年生調査(DP生・non-DP、以下、同様)、9月以降に高校3年生調査をする。修了生調査は、4~8月中に質問紙を作成し、9月に倫理審査の申請、10~12月に株式会社トモノカイへの協力を依頼して、パイロット調査を実施する。2024年度の目標は、2023年度実施の基礎調査(学校調査)の結果を精査することと、高校生調査(第1波)の集計結果を整理することである。

3年目の2025年度は、2024年同様に高校生調査（第2波：高校2年生／高校3年生対象）を実施するとともに、初回の修了生調査（第1波：大学1年生対象）を実施する。修了生調査は、2024年度の高中生調査（第1波：高3生調査★1）の回答者が主な調査対象となるため、2024年度中からのネットワーク作りが重要となる。2025年度の目標は、高校生調査（第2波）及び修了生調査（第1波）の集計結果を整理することと、高校生調査（第1波）の結果を分析し、高校種別や文理傾向、進路傾向について傾向をつかむことである。

4年目の2026年度は、2・3年目同様に高校生調査（第3波：高校2年生／高校3年生対象）を実施する。また、前年度同様に、修了生調査（第2波：大学1年生／大学2年生対象）を実施する。4年目以降は、DP取得後に日本の大学に進学した学生と海外の大学に進学した学生との比較分析を行う予定である。回答者数が少なくなることが予想されるため、高校生調査の段階から調査協力者に声をかけることはもちろんであるが、DP生を多く受け入れている大学への調査協力要請も検討している。2026年度の目標は、高校生調査（第3波）及び修了生調査（第2波）の集計結果を整理することと、高校生調査（第1波）と修了生調査（第1波）のデータの接合を行い、★1の調査対象者の高校から大学への変容や成長について分析を行うことである。

最終年度の2027年度は、これまで同様に高校生調査（第4波：高校2年生／高校3年生対象）と修了生調査（第3波：大学1年生／大学2年生／大学3年生対象）を予定している。また、4年目の経験を踏まえて、海外大学に進学した学生へのインタビュー調査（海外大学生調査／DP修了生含む）を計画している。海外大学生調査を加えることにより、国内大学の学びの文脈と海外大学の学びの文脈を考慮して、DP修了生の学修の特徴を検討することを想定している。2027年度の目標は、高校生調査（第4波）及び修了生調査（第3波）の集計結果を整理することと、①高校～大学への移行、②国内／海外大学という分析枠組みを設定し、DP生の教育効果にどのような違いがあるのかをデータを用いて実証的に明らかにすることである。

（2）質問紙の見直し及び開発

前述の通り、「高校での学習・経験に関する実態調査」で用いた質問紙の見直しを行なった。具体的に見直しを行なった内容は以下の通りである。

①成績（学力）に関する客観的指標の挿入

2021・2022年度の「高校での学習・経験に関する実態調査」では、生徒の能力指標の一つとして、より客観的な指標を入れることが課題となってきた。そこで、新たに開発した質問紙では、調査対象生徒に対する成績（学力）についてより客観的な指標を挿入した。具体的には、以下の2項目である。

- ◆「あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。」（1. 下のほう／2. まんなか／3. 上のほう）
- ◆「あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。」（1. 英検（実用英語技能検定）（級： ）／2. TOEFL（スコア： ）／3. TOEIC（スコア： ）／4. IELTS アカデミック・モジュール（スコア： ）／5. その他（具体的に： ）（スコア等： ）／6. 資格は取得していない）

②生徒の周囲の環境に関する項目

生徒の周囲の環境に関する質問項目も追加した。家庭の教育に対する価値観や経済的な豊かさ、国際的な経験に関する以下の項目である。

- ◆「あなたの周囲の環境についておたずねします。」((1)本やインターネット環境など家で学ぶ環境が十分にある／(2)親や兄姉などの家族は普段からよく勉強を教えてくれる／(3)普段から家族が本や新聞を読んでいるのをよく見る／(4)親や保護者は自分の勉強のために必要なものを買ってくれる／(5)勉強のためであれば親や保護者は積極的に援助してくれる／(6)普段の生活の中でお金に困っていると感じることもある／(7)親や保護者はあなたのやりたいことを応援してくれる／(8)親や保護者は学校生活について相談に乗ってくれる／(9)周りの同級生は授業に熱心に取り組んでいる／(10)周りの同級生は普段からよく勉強を教えてくれる／(11)家族とよく海外の経験や国際的な時事問題を話したりする／(12)親や保護者が仕事などで英語などの外国語を使っている／(13)友達とよく海外の話題(SNS、音楽など)を話したりする)(4件法／1. まったくあてはまらない～4. よく当てはまる)

生徒の家庭の状況に関する質問項目は取り扱いの難しいものであるが、教育社会学分野では生徒の学力や価値観に差を生み出しているかもしれない背景要因(性差・社会階層差等)は重要な指標とされているため追加している。例えば、PISA調査(OECD)やドイツのIQB教育トレンド調査(ナショナルテスト)でも上記の視点を踏まえた質問紙調査を実施している。

③志望する専門分野に関する設問の追加と希望の入試形態に関する設問の削除

志望する専門分野に関する質問を追加した。専門分野の項目を加えたことで、生徒が進学後にどのような分野で学ぶことを期待しているのか、生徒の傾向を知ることが意図している。

(3) 研究倫理審査申請

生徒調査(在学生調査)の実施計画について、筑波大学人間系に設置されている研究倫理審査委員会に審査を申請し、2024年2月15日付で承認された。

3) 今後の見通し

上述の「(1)全体の調査デザインの再検討(5か年計画)」に基づき、今後の調査を実施していく。年々調査数やデータの整理・分析が煩雑になっていくことが予想されるため、新たに雇用される研究員を含め、生徒調査班のメンバーを拡充し、各自の役割を明確化していく。

また、教員調査班、大学調査班とコアメンバー会議等を利用して、情報交換・連携をしていく。特に、大学調査班の「修了生調査」との調査デザインの整理・検討を進める。

2-2. 教員調査

教員調査（教員を対象とした調査）では、「①教員調査」及び「②英語開講（EMI）科目調査」を行う。

◆教員を対象とした調査（教員調査）

- ①教員調査...IB校における教員の学びを明らかにする。
 - i) DP教科グループごとの教員の協働的な学び
 - ii) MYP・PYP教員の協働的な学び
 - iii) 3つのプログラムの協働的な学び
 - iv) IB教員・non-IB教員に向けた好事例の発信
- ②英語開講（English-Medium Instruction: EMI）科目調査
 - ...IB校において英語で開講されている科目の授業実践の特徴を明らかにする。
 - i) EMI科目の実態調査
 - ii) 日本語DPにおいてEMI科目を担当する教員の協働的な学び

1) 調査の概要

教員調査は、2023年度を2024年度以降の本格調査に向けた準備年と位置づけ、各地の学校を訪問し、プレ調査を行った。具体的には、学校の管理職やその他の教員に実態や課題に関するインタビュー調査及び授業見学等を行った。調査の過程で、教員調査班の役割は、主に（1）教員に着目したIBの教育効果のエビデンスを示すこと、（2）教員の学びの場を創出することであることを再確認した。調査後、（1）と（2）で着目すべき観点の検討を行った。

2) 進捗報告

2024年1～2月にかけて、全国各地のIB校を訪問し、授業の視察ならびに管理職・コーディネーター・その他の教員や教育委員会での聞き取りを行った。教員同士の打ち合わせや校内研修に参加した訪問も含まれる。また、計7回のオンラインならびに対面での打ち合わせを行っている。

【表2】調査訪問先一覧

日時	訪問先	実施プログラム
1月24・25日	S校(①)	DP
1月29・30日	T校(②)	MYP・DP
	U教育委員会(③)	
	V校(④)	PYP
2月5日	W校(⑤)	PYP・MYP
2月6日	X校(⑥)	DP
2月6・7日	Y校(⑦)	MYP
2月14日	Z校(⑧)	MYP・DP

以下、各調査の概要である。

① S校 (DP)

日 時：1月24日(水)、25日(木)

訪 問 者：梅津静子(筑波大学)、木村光宏(岡山理科大学)、小澤志織(筑波大学大学院)、阿部透冴(広島大学大学院)

調査内容：教員へのインタビュー、授業観察、教員ミーティングの参与観察

調査対象：DPコーディネーター、IB推進を中心に担う教員

○S校のIB導入の背景とDP生の状況

S校は地方にある公立高校である。S校では、学習指導要領の改訂を踏まえて、学校としても探究に舵を切って行かないといけないという課題意識を感じており、管理職と教員が相談していたところ、IBの検討が始まった。IB検討の初期段階では、予算もなかったが、ワークショップなどに参加し、IBの実際の授業の様子を学び、その魅力を改めて感じたようである。IB導入に対しては、知事も関心を持ち、理解を示してくれたこともIB導入に繋がったといえる。現在、DP1期生は進学について検討しており、国内進学と海外進学の両方について検討をしているという。数学と英語を英語で行い、その他の科目は日本語で実施するという内容になっている。

○S校における授業の参与観察

S校において行なった授業観察の概要について以下に示す。

まず、「言語と文化」の授業については、生徒の思考をうまく促す問いが、生徒同士のコミュニケーションや活発な議論につながっていた。全体的に、楽しく探究が行われているような雰囲気がみられた。

次に、「公共」の授業では、「情報を読む時は突っ込んで読むこと」や「常に疑って情報収集をすること」が強調されていた。このように批判的思考が授業の中で重視されるような授業であった。さらに経済に関連するグラフの提示などがあり、グラフの読み取りについて考えさせるような展開で授業が行われていた。

最後に「科学と人間生活」の授業では、個人・グループ作業を生徒自身が選び、生徒自身が選んだ特定の場所の変化を調査するような授業が行われた。テクノロジーを活用して地図上の情報から変化やパターンなどの概念を捉える授業が行われた。

S校ではIBの導入にあたって、さまざまな外部の有識者を招聘し、IBの手法に関わる研修を行なっている。観察した授業では、生徒の実情を踏まえながら、IBの手法が各所に取り入れられている状況がみられた。

○教員同士の学び合い

教員の学びの機会について、外部の有識者による学びの機会を持っている。例えば、DP生の研究活動をサポートするために、近隣の大学の教員によるDP生向けに行うリサーチスキルのワークショップに先立って、教員と外部の大学教員の打ち合わせの中で様々なリサーチスキルについて

て情報交換が行われた。IBにおける探究では、授業内だけでなく、授業外で論文を書いていくような活動も行われ、指導の担当になった教員は適切な指導をすることが求められる。具体的な指示は DP ではできないことになっているので、教員は研究について知っていることだけでなく、どのように指導をするかについて知る必要があると考えられる。

また、知の理論 (Theory of Knowledge: TOK) についても全教員を対象に校内研修を実施したり、non-IB の生徒にも TOK 展示を踏まえた内容で探究を行うことで DP 生だけでなく、広く IB の特徴的な学びを全校的に経験することで、IB を担当する部署に任せ過ぎにならないように工夫をしていた。

探究に重点を置くという方針については、共通理解を図ることについて課題意識を感じており、また、テストの回数の多さや、旧来型の学力以外の能力が評価されていないなどの課題が挙げられ、探究に関連する事項についても、授業で扱うだけではなく、評価とどのように繋げていくかについては検討が必要であることが示唆として得られた。

○まとめ

S 校における IB 導入は現場の教員や校長の考えから始まり、知事や教育委員会にも説明し、理解を得ながらうまく導入に繋がっている事例といえる。参与観察では IB の指導を踏まえた授業が行われていた。

また、IB のクラスを担当する教員だけでなく、IB を担当していない教員や IB を履修していない生徒も IB 認定校としていかに IB を踏まえた探究を行うかについてさまざまな実践が行われている事例がみられた。

今後は教員の認識についてより詳細な聞き取りを行うなど、IB についての研修などがどのように教師の学びに繋がっているかについて明らかにすることが求められる。

② T 校 (MYP・DP)

日 時：1月29日(月)

訪問者：赤塚祐哉(相模女子大学)、梅津静子、木村光宏、原和久(都留文科大学)

阿部透冴

調査内容：教員へのインタビュー、授業観察

調査対象：校長、DP コーディネーター

○T 校をとりまく地域の現状

T 校は地方の中高一貫の公立校である。T 校では、教員の育成にあたり、国立大附属校の IB 認定校に教員を派遣したり、教職大学院で IB 教員養成を目的とするコースに派遣したりするなどし、教員による学びの成果を T 校の教育活動に還元している。T 校における IB プログラム導入決定の契機は、教育再生実行会議で IB 認定校の数を増加させることが示されたことである。T 校が所在する地域は少子高齢化が課題となっており、インバウンドで観光客を呼び込むことなどを目標としている。そのため、T 校が所在する地域の産品を直接売り出すなど、自分で企画立案していけるような人材育成が期待されている地域でもある。T 校卒業後の進路として、海外大学へ

の進学を念頭にしているものの、費用面で現実的では生徒もいる。仮に海外や大都市圏に進学・就職した場合であっても、関係者人口を増やしたいという思いがある。都市圏の大学への合格者数も一定数存在する。

○授業における指導方法の変化

調査対象者である3名がIB教育に関わる中で、IB教員自身が、指導方法を変化させていったことが語られた。以下はDPコーディネーター自身が授業における指導方法をどのように変化させたのか、についての語りの一部である。

①教員が先回りせずに、じっと待つようになった。

IB教育に関わる以前は、教師主導型で授業を牽引していた。一方、IB教育に関わって以降、生徒が内に秘めているやりたい気持ちや学び取りたいという気持ちを大事にするようになり、授業の進め方を変えるようになった。

②学習の振り返りをさせるようになった。

IB教育に関わる以前は、授業で網羅すべき指導事項を学習させることに注力していた。一方、IB教育に関わって以降、生徒らの学習における到達度をこれまで以上に把握することに努めるようになった。具体的には評価指標（ルーブリック）に基づいた評価の実施や、授業中の振り返り（リフレクション）を重視するようになった点である。

③生徒らに身に付けさせようとする「知識」の種類が変わった。

IB教育に関わる以前は、特に高校3年次段階の指導において、受験に必要な演習問題を解かせたり、暗記させたりといった指導形態を採用することもあった。一方、IB教育に関わって以降、学習者同士の共同による学習を意識して、学習者同士で対話させたり、考えたことをその場で表出させたり、という指導方法を積極的に採用するようになった。一方、T校においては、いわゆる進学に特化した学校から異動してくる教員も一定数おり、対話を軸とした探究型の学びの有用性について、共通理解を図ることの難しさも感じている。

④生徒の興味・関心にもとづき、個別最適化された学習を実施するようになった。

生徒らに授業での学びの内容プレゼンテーションをさせる際、一見すると生徒自身らの趣味の世界、と呼べるようなテーマも散見される。ただし、1つ1つのプレゼンテーションを観察すると、生徒なりに論理立てて発表し、根拠に基づき結論を出そうと試みるなど、論理的思考力の育成に結びついていると感じている。発表の様子を他の生徒や下級生が見ているため、他の生徒や下級生らの「自分たちも興味があることを深掘りしてみたい」という気持ちにつながり、学習の好循環が発生している。

○生徒の学習姿勢の変化

IB教育を体験した生徒と、そうではない生徒の差異として、DPコーディネーター及びMYPコーディネーターらから、以下の点が語られた。

①発言への意欲

外部講師による講演後の質疑応答の場面において、IB教育を体験したことがない生徒らからはほとんど積極的な発言はなかった。一方、IB教育を体験した生徒らは積極的に質疑に参加し、学びの場への参加意欲が高いことを実感した。

②社会貢献に対する意欲

教員が思っている以上に、生徒自身が社会に関わろうとする意欲が旺盛であり、積極的に社会課題の解決に関わろうとするようになった。

③失敗を恐れない姿勢

授業での学ぶ姿勢で、とりわけ失敗への恐れをしなくなった。具体的には、たとえ発言内容が間違いと思われるような内容であっても、自分が考えを表現することが大事であり、「私にはこのような考え方がある」と主張するようになった。そして、クラス全体が教員に誘導される形ではあるが、「このような考え方もある。では、それも含めて、どう判断するのか」という雰囲気に変化していった。例えば「総合的な探究の時間」において、これまで以上に他の生徒の発表を真剣に見合うようになった。

○教員同士の学び合い

T校では、教員同士の学び合いを深めるため、以下の取組を実施している。

①年に1回の校内授業研究会の実施

公開授業を全8クラスほどで実施している。研究テーマを設定し、IBプログラムが設置されていない普通科も含めて、全校の取組としてIBの「学習の方法 (Approaches to learning: ATL)」への理解を深める研究を実施している。具体的には、ATLの各スキルを日頃の授業でどのように実施しているのか、教員同士で情報共有するなどである。

②月に1回の校内教員研修の実施

「MYP ミーティング」、「DP ミーティング」と名付けられた研修を月1回実施している。具体的には、IB機構が主催するワークショップで各教員が学んできた内容についての共有や、生徒の課題を話し合い、学際的な単元の取り扱いについての議論、年間指導計画 (Subject Outline)、単元の指導計画の共有、評価の実施時期等について議論している。

③週に1回の教員研修の実施

週に1回「プロフェッショナル・ディベロップメント」と名付けた研修を実施している。授業時間割にも組み込み、DP教員の持ちコマ数を軽減する措置を講じている。具体的には、週あたりの授業コマ数13または14コマ(1単位時間50分)として、教員同士の協働による授業準備、打ち合わせ、評価付けの統一方法等を行っている。例えば、2人の教員で評価指標(ルーブリック)に基づき、生徒のパフォーマンス課題を評価したり、評価のズレ等を検証したりしている。

○教育プログラムの質保証

3名の調査対象者からは、次のように、教育の質保証の観点からIB教育が語られた。

①探究型の学びの持続可能性

通常であれば、公立学校は人事異動があり、探究型の学びを推進したくても、力のある教員が異動したり、校長が異動したりしてしまう等、組織として探究型の学びの実現が維持しづらい、という課題がこれまではあった。一方、IBプログラムの場合、IB機構による訪問調査の実施が必須であることから、IBの教育理念が実現できているのかを確認するプロセスが踏まれる。結果として、T校で実施している学びについて、軌道修正がなされ、探究型学習の質を担保する利点がある。

②評価の妥当性・信頼性

IB プログラムでは、評価の基準が明確である。パフォーマンス評価の仕方等が具体的なため、たとえ教員が異動して入れ替わっていく中でも、評価方法の質保証がされやすい。IB プログラムは「指導と評価の一体化」の理想形であると感じる。具体的には、学習の到達目標がまず始めにあり、到達目標から逆向きに総括的評価・形成的評価を練ることが求められている。結果として、生徒らが自分で自分の学習を評価できるようになっていく点に魅力を感じる。

③実生活・実社会につながる学習の保証

これまでの学習指導では、学びを実社会の課題に結びつけることに難しさを感じていた。具体的には、IB 導入前までは、当該教科の力がどの程度身についたのか、というところまでは教員は確認していた。一方、教科での学習をどのように社会につなげるのか、という観点にまでは踏み込み切れていなかった。一方、IB プログラムではカリキュラムの中に奉仕的な活動や、パーソナルプロジェクトと呼ばれる実社会と関わる活動が意図的に組み込まれている。結果として、教員らが実社会のつながりを意識しながら授業ができるし、生徒達がどの程度社会とつながれているのか、確認ができる。生徒自身が思春期で多感な時期であるからこそ、恥ずかしさのような意識を乗り越えて、社会の一員として生きていることが実感できるプログラムであると感じている。

③ U 教育委員会

日 時：1月29日（月）

訪 問 者：赤塚祐哉、梅津静子、木村光宏、原和久、阿部透冴

調査内容：教育委員会職員へのインタビュー

今回、訪問した学校（V校）は、教育委員会と密に連携してIB教育の取り組みを進めているため、教育委員会がどのような観点からIBを設置校に導入したのか知りたく、V校訪問前日にU教育委員会で推進の中心となった職員にインタビューを行った。

公教育におけるIB教育の在り方について学ぶことが多い調査訪問となったが、ここでは紙幅の都合上、インタビューの概要を「教育委員会職員としての学び（IB導入の経緯）」、「IB教員の学び」、「教員同士の協働的な学び」、「課題」の4点からまとめる。

○教育委員会職員としての学び（IB導入の経緯）

調査対象校が位置するK市は、林業と農業が盛んな地方に位置し、生涯にわたって「探究を軸とした町づくり」を進めている。約10年前、市のビジョンを実現するため、義務教育においても「探究的な学び」を推進していたが、具体的な子供の姿で、「探究」について学校の教職員と共有することが難しかった。そういった中、探究的な学びについて理解を深めるためIBのワークショップに参加する機会があり、それがIB教育を知るきっかけとなった。

その後、オーストラリアのIB認定校を見学する機会に恵まれたが、各授業で探究テーマを設定しながらも、子どもたちが個々に、自主的に自分の学びを深め学習を進めている姿に衝撃を受けた。帰国後、教育長やV校の校長と再度訪問したが、彼らもまた感銘を受け、IBの市内学校への導入を本格的に検討することとなった。IBのグローバルな視点を導入することで、自分たちの故

郷をより深く理解することができ、これまでとりくんできた生活科や総合的な学習の時間を核とした、郷土学習や食育学習を更に充実させることにつながると考えている。公立である限り、異動は避けられない。その中で、「この先生だからできる IB 教育」ではなく、「しっかり根付く IB 教育」にするためには、「IB もどき」ではなく正式に認定を受けたほうがいいと判断し、教育長が導入を決断した。IB 教育を受けた児童が中学校に進学しているが、小学校でしっかりと探究学習を行うことで、中学校入学後の生徒の学力や非認知スキルも向上してきていることが実感されてきた。日々の実践の中で、IB 教育は地域に根差した公教育でこそ実現できると感じている。

○IB 教員の学び

教員の IB の理解のレベルは様々であるが、導入期の IB コーディネーターが一定の土台をつくってくれたと思う。例えば、探究プログラム (Programme of Inquiry: POI) づくりにおいては、コーディネーターが全教科の学習指導要領の指導内容との整合性や本校での教育内容をテーブルに乗せ、すでに IB 認定校になっている学校の教員にアドバイスをもらいながら POI を作成した。そのたたき台をもとに、校内研修を行い、教員に IB についての理解を深めてもらい授業を実践してもらった。教員は、最初は分からないなりに取り組んだが、だんだんと分かるようになっていったように感じる。「ひと単元やってみると、こういうことなのかっていうのが、ぼんやりと分かってきました…」と述べた教員もいた。

中でも「学級経営力」や「指導力」のある教員は、だいたい 2 学期になると、IB 教育のやり方を掴めるようになるようである。また、「IB って、そんなに大きく違うものではなくて、目指すべき方向性にある教育なんだな」ということに気付く教員もいる。1 年目の教員も、だいぶ表情がよくなってきたように思う。

また、「先生がルールを敷いて、その上に子どもを乗せていくという授業」から、「先生も、共に探究者である」というふうに意識が変わってきたように思われる。以前は、(探究学習は) 児童にどんな質問をされるか分からない、それにどう答えたらいいのか分からないという不安が教員にみられた。しかし、今は分からないことを恐れず「共に探究していくんだよ」という姿勢が見られるように思う。

ある教員は「今、自分のこれまでの他校との実践を比べたときに、いかに、自分はこれまでの授業というのは、教師主導でやってきたのかっていうことがよく分かります」と述べた。子どもに委ねながら、子どもの主体性を大事に授業を作っていくことができていると、教員は (IB をやるのが) 面白くなってきているように感じる。

○教員同士の協働的な学び

IB はチーム協働というところを非常に大事にする教育なので、職員室の中で、授業のことがよく話題になる。「きょう、こうやって、やってみたけど、うまくいかなかったんやけど、これはどうしてかな」とか。「今、やってるユニットに、昨日やったたニュースでこういうことがあったので、それを取り入れてみようかな」とか。そういったことを通して、教員同士の横の連携が、非常に良くなったように感じている。

○課題について

公立の学校である以上、教職員について定数が決められているため、日本の制度にはない IB コーディネーターを、その中で何とか配置しないといけないところが大変である。コーディネーターは、本来であれば、数時間の授業を持ちながらも、全体をしっかりとリードできる体制であるべきだが、定数にコーディネーター枠はないため、現状では担任がコーディネーターを兼務している。私立学校や県立学校とは違い、市町村立の学校は、そこが難しいところである。地域や市議会も理解はしているが、解決策が見つからず一番大きな課題となっている。

また、人事異動に伴う課題として、従来の教育のやり方を身に付けた教員が 4 月に着任してすぐに、新しい環境にもまだ慣れない中、PYP 特有の教育方法（プランナーづくり、ATL、概念学習…）などを学び、IB（PYP）を実践しなければならないことがある。IB や PYP について大変詳しい保護者もあり、着任した教員の中には大変大きなプレッシャーを感じるものものいるようだ。新しく着任した教員の成長をどのように支えるか、今後の課題である。

④ V 校 (PYP)

日 時：1月30日（火）
訪 問 者：梅津静子、木村光宏、原和久、阿部透冴
調査内容：校長へのインタビュー及び授業観察

PYP における「教員の学び」について理解を深め、今後行う予定の本格調査への準備として、V 校にて事前調査を行った。V 校は公立学校であり地域全体の地域創生も視野に PYP を導入しており、様々な観点で学ぶ点があったが、ここでは、「学校概要」、「管理職の学び (IB 導入の経緯)」、「IB 教員の学び」、「教員の協働的な学び」、「課題」の 4 点について校長への聞き取りの概要をまとめた。全体として、先に聞き取りを行った U 教育委員会職員の認識や考えと多くが一致しており、学校と教育委員会が密に連携しながら IB 教育を推進している様子うかがえた。

○学校概要

V 校は、児童数 150 人程度の小規模公立学校であり、林業や農業の盛んな地域に位置している。地域の中学校とともに中学校区をなし、学校運営協議会、地域学校協働本部、学校の三つの組織が一体となって児童の育成に取り組んでいる。保護者や地域の方々の IB に対する関心も高く、学校運営や探究学習への積極的な関与や支援がみられた。

○管理職の学びについて (IB 導入の経緯)

2020 年に教育委員会の職員、教育長と共にオーストラリアの IB 認定校を訪問する機会があり、児童が主体的に学びを深めている姿に大変衝撃を受けた。実際に、IB 認定校の姿を見て、同行していた教育長も「IB 風ではなく IB でいこう」と導入を決めたようだ。PYP を導入する過程で、いろいろとやり方を変えて失敗したこともたくさんある。トライアンドエラーでやってきた。まずは、児童が学ぶ環境から変えていこうということで、教室の机の配置を変えたりした。しかし、教員の学級経営力や指導力がしっかりしていないとうまく行かないことも分かった。

今年度、学級担任 10 名の内、6 名は人事異動で新しく着任した教員である。これらの教員は 4

月に来てすぐに（ほとんど IB の知識がないままに）PYP をやらなくてはならない。1 年目の教員は、新しい学校にも適応せねばならず、同時に IB にも適応しなければならない難しさがある。そのような状況下、管理職として、新しい教員を迎えても、安心してなんとか PYP をやっているように支援体制を整えなければと考えている。

○IB 教員の学びについて

教員の経験の度合いによっても変わってくるが、他の国内外の IB 認定校の授業を見学したり、IB 教員同士のつながりを深めたりする中で、教え方が変わってきたように思われる。例えば、今年初めてコーディネーターをお願いした O 教諭などは、対話を重視した授業を展開している。他の IB 教員や他校の IB 教員とのやりとりを通して、教え方や考え方が変わってきているように思われる。

○教員の協働的な学びについて

火曜日と木曜日の放課後に IB ミーティングの時間を確保している。また、金曜日の放課後はワークショップをやっている。IB の理論について研修したり、IB のやり方をどのように授業に取り入れたかや、児童の姿がどう変わったかなどを教員同士で共有し意見交流したりしており、大変良いことだと思っている。研修などでは、若い教員がベテランの教員から学んでいる様子が見られる。養護教諭や栄養教諭もミーティングに参加し、ユニットを作成するようにしている。また、研修には他の学校に教員が参加することもある。

IB では、授業そのもののスタイルを変えなければならないと認識している。教科横断型の探究学習（Unit of Inquiry: UOI）での学びは授業スタイルが変わってきたが、他の一般的な教科はまだそうになっていないところもあり課題だと思っている。（MYP を導入した）中学校の IB の授業を見学すると、授業のなかで IB の学びがどう展開されているかを学ぶことができる。教科と探究学習の往還が大切だと感じる。ただし、それらはすぐに変わるものでもないし、ある程度時間がかかるものである。

「私たちが校内研修などでやっていることは、まだ誰も経験したことがない学びであって、それに対してのチャレンジ精神をもってやっている」と言う自負が教員の支えになっている部分がある。そこは IB 教育をやるメリットだと思っている。

○課題について

小中で授業を見学しあっているが、近年は「小学校と中学校の学びが繋がってきたな…」と感じており、これまでの地道な積み上げが成果となっていると考えている。ただ、IB 教育をやりながら、IB 教育の枠組みの中で、どう家庭環境が厳しい児童の学力や不登校の問題を解決していくかが課題である。

また、新しい教員へのサポートについては、コーディネーターの存在が大きい。IB を始めた当初は、県の加配措置がありコーディネーターが加配され、授業は持たずに校時表の中でミーティングができた。しかし、だんだんそれがなくなり、コーディネーターは特別支援学級と掛け持ちということとなった。しかし、それもできず、現在は 2 年の担任を兼任している。しかし、担任と兼任では、コーディネーターの仕事ができないので、教頭が、週に 5 時間、2 限目に算数の授

業を受け持つことで、担任が IB の準備や研修などコーディネーターの業務を掛け持ちできるようにしている。現在は、どこも人出不足で、若い教員の産休などもあるので（教員の確保が）大変である。どのようにして教員がしっかり IB の研修を受けたうえで、授業に臨める体制をつくるか、ということが大きな課題となっている。

⑤ W 校 (PYP・MYP)

日 時：2月5日（月）

訪 問 者：梅津静子、木村光宏、松本暢平（千葉大学）、駒走聡俊（筑波大学大学院）、キャサリン・フェイス（筑波大学大学院）、原田群士（筑波大学大学院）

調査内容：管理職へのインタビュー、授業観察

○W 校をとりまく地域の現状

W 校は地方の学校で、いわゆる一条校ではなく、各種学校として運営されている。校長を対象としてインタビュー調査を行い、複数の PYP 授業について参与観察を実施した。W 校の立地は市街地からバスで 30 分程度の離れたところにあり、多くの児童・生徒はバスで W 校に通っているようである。学校の規模はあまり大きくないため、情報の共有などに多くの時間を割くよりは、日々の指導に関する相談について時間をかけて考えることができるのが、学校の良さであると語っていた。

かつては英語の指導を中心とした学校だったが、PYP における探究に舵を切り、一部の英語で行っていた授業を母語によってより深い学びに繋げようとするように改革が行われた経緯がある。とはいえ、英語の授業の時間は十分に取られ、さまざまな手法を取り入れながら、ネイティブ教師等により質の高い英語授業を提供するように工夫や準備をしている状況がみられた。

また、特殊な学校であることから、転勤してくる教員は自己研鑽を目標としてきている部分も大きいと校長は感じている。

○PYP における探究について

日本の PYP で行っている学際的な学びについて校長は、本来は W 校のように全ての授業を教科横断的なテーマ（セントラルアイデア）をもとにつなぎ合った探究プログラム（Programme of Inquiry: POI）の手法で行うべきと考えている。しかし、実際は教科で明確に分断して授業を行っている学校も散見されるということを指摘している。教科ごとに分かれている部分も工夫次第で学際的な学びにできるはずだが、教員や学校のマインドがシフトしていないという部分もあると考えられる。

○教員同士の学び合い

W 校では学校のリーダー的なポジションの教員が IB のワークショップなどの IB 機構の中心的な業務にも携わっており、特段に研修という場を設けなくても、IB の教育手法や重要な理念については日々の会話の中でインフォーマルに共有されていると校長は考えている。また、教員の希望による校長のコンサルテーション（一人の教員につき、月 1～2 回程度）が常時行われてお

り、それによって、個々の教員は POI を指導する力をつけていると考えられる。

W 校では研修時間を設けて、全員を集めるようなフォーマルな研修はほとんど行われていないが、外部での研修についても教員がさまざまなテーマで行われているものを見つけ、学んだことを日々の会話の中で共有するということが日常的に行われているようである。

また、校長自身もできるだけ、教員の学びにつながるような話が出る場作りを心がけており、自分が一番勉強しなければいけないと、自身の研鑽の姿勢を見せることの大切さについて語っていた。

校長は、「教員は職人のようなものである」と語り、腕を磨いて、その技術を買ってもらえるくらいの気持ちで生涯学習としてやってほしいと伝えるなど、教員の自己研鑽を後押ししている様子が見受けられた。

○時間をどのように捻出するか

自己研鑽を行う上で、時間の捻出が課題となることがしばしばあるが、一般的な学校について、校長は「毎週、ある時間に同じメンバーの会議をすとかそういう発想ではなく、1ヶ月をまとめてやったりして、必要な分だけ設定すると良い」とし、教員の協働設計によるコラボレーションで研修のような役割も果たしていると述べている。W 校が小規模で時間があるというわけでもなく、一般的な学校にも負けないくらい時間は足りない状況ではあるが、自己研鑽に前向きな教員が多いので、教員達が時間を捻出しながらよく準備をしてくれていると認識していた。

○まとめ

W 校には IB の探究や質の高い英語授業に魅力を感じて入学した生徒や保護者の多い学校であると考えられる。また、この学校で勤務する教員についても、職人として自身の教授法などについて学ぶ機会に恵まれ、自身の教師としての能力を高められる場であるという認識を持っている教員がいると考えられる。これらの教員が実際にどのように学びの機会にアクセスし、また授業でどのような学びをしているかについて聞き取りによって分析する必要があると考えられる。

また、研修の日を決めてやるというよりは、集まった時に担当するクラスの課題等について共有して、より良い指導を模索するような、学びの方法がとられていることが語りからみられた。今後は、実際にどのような教員の学びに繋がっているか、どのような話題が出て学びに繋がっているか、教員の学びの内実を描写していく必要があると考えられる。

⑥ X 校 (DP)

日 時：2月6日（火）

訪 問 者：渋谷真樹（日本赤十字看護大学）

調査内容：教員へのインタビュー、授業観察

○X 校の概要

X 校は、開校 5 年目である。公立であるが、運営は委託された民間団体が行う、公設民営の中学校・高等学校である。授業料は他の公立校と同様で、IB を選択しても追加料金はない。学校運

営費は自治体から支出され、その使い方は学校の裁量である。地方公務員としてでなく、教員を独自採用しているため、柔軟で機動的な採用が可能である。給与を自由に設定できるので、他校との奪い合いになりやすい外国人教員を雇いやすくなるメリットがある。

X 校の近隣には公営住宅が立ち並び、かつては小中学生が多かったが、今は高齢化している。閉校した小学校跡に X 校ができたことで、まちの活性化にも貢献している。新校舎は、協働学習のための Co-Lab Space やガラス張りのカフェテリアなど、インターナショナルスクールを彷彿とさせるような、オープンで明るい印象である。

探究型の学習や数学・理科を英語で学ぶことなどが特長である。高校 2 年への進学時に、文系、理系、IB に分岐する。IB は、英語力や教科の成績および IB への適性から 20 数名を選抜する。IB 以外の一般生も全員、英語 B (SL) と TOK を受ける。海外研修として、高校 2 年生ではマレーシアに 9 割ほどが行く。縦割りクラスで SDGs について探究したり、CAS (Creativity, Activity, Service) に似た生徒主体の課外活動を行ったりしている。体育は、IB 生と一般生がいっしょに行っている。服装や髪形などは、生徒の判断に委ねられている範囲が広い。

約半数の生徒は推薦や総合選抜などの新しい入試方法を利用する。進路指導室に複数教員が常駐し、留学希望者にも対応する。経済的理由で欧米からアジア、日本へと希望を変える生徒もいて、海外進学には奨学金が必要である。

来年度が完成年度で、中学・高校を合わせた生徒数は 720 人になる。入試倍率の高い人気校である。帰国生や国内のインターナショナルスクールから入学する生徒や外国籍者もいるが、ほとんどが日本の教育を受け、日本語を第一言語にしている。学力の高い学校の常で家庭の経済・文化的背景は平均より高めだが、私立校やインターナショナルスクールほどではない。

教員数は約 60 人で、うち外国人は約 3 割である。校長は、民間企業で勤務した経験がある。教員は学校の独自採用で、全国から集まっている。

○教師の学び

①IB ワークショップへの参加

教師はまず、IB に関する公式な研修会で学んでいる。X 校に着任する前から、他校の IB 立ち上げに関わって IB について学んでいた教師や、他の IB 校で教鞭を取り、研修を受けてきた教師もいるが、少数派である。多くは、X 校で初めて IB 教育に取り組む。授業担当者には、原則として前年には IB ワークショップを受けてもらう。研修費は毎年しっかり確保するようにしている。コロナ禍であったこともあり、オンラインでワークショップを受けた教員が多い。TOK など、校内でワークショップも行った場合もある。コロナ感染状況が落ち着いた現在は、国内なら旅費・宿泊費を出して対面での研修に参加している。対面でのワークショップではネットワークができるのでよい、とコーディネーターは考えている。

②IB のカリキュラムからの学び

ある教員は、自分が担当する教科の IB の最終試験を研究し、生徒がそれに対応できるように授業を計画する中で、より文章力や資料分析力、批判的な思考力を育成する方向に自身の授業を変えていった。日本の入試では、自由記述よりも模範解答がある問題が多いので、授業は、正解とされる知識を伝授する講義型になりやすい。一方、IB では、最終試験で複数の資料を比較して共

通点や相違点を述べたり、その資料から分かることと自分がもっている知識を統合したりする論述問題が出る。そのため、普段から、複数の資料を提示して分析、比較、議論する授業を行っている。その際には、資料の内容だけでなく、出典や目的にも着目させるようにしている。数人ずつのグループで課題について議論し、考えをまとめていく授業が、複数のクラスで行われている。英語のテキストを自分たちで読み、スライドをつくって発表し、議論することもある。過去の最終試験問題に取り組み、評価基準を示して、生徒自身に評価させることもある。このように、IBの評価方法を含んだカリキュラム自体に刺激されて、教師は新しい授業の方法を学んでいる。その結果、当初は教師が正解を教えてくれるのを待っていた生徒たちも、次第に変わっていくという。

別の教員は、以前は一般の学校で教員だったが、自主的に夜間の大学に行き直して、現在は別の教科で教員免許を取り直し、IBを教えている。IBでは、理系も文系も教養・学問として芸術系の科目を学ぶ。日本では、芸術的な能力が高い教員が主観的に教えている印象があるが、IBでは評価のための課題が統一しており、完成した作品よりも意図や過程が重視されている。そのため、授業でもポートフォリオを作成するなどして、学習者が省察しつつ、自らの学びをすすめていけるように工夫している。これも、IBのカリキュラムによって教師が学んでいる例である。

③教員歴の異なる教員間の学び

X校では、教員歴の長い優秀者を雇うには人件費が高くなるという事情もあり、できるだけ校内で教員の力量を高めるようにしている。その一例として、同じ教科のHL (Higher Level) とSL (Standard Level) を分担しているベテラン教員と若手教員間の学びについて述べる。このベテラン教員は、IBという、自分が経験していない教育プログラムを実践するには、授業を見学したり、ベテラン教員と相談したりすることがぜひ必要だと考えている。IB開始当初はベテラン教員が学習領域の設定や年間学習計画の作成を行い、若手教員はベテラン教員の授業を見学していた。3年目の今は、若手教員も自立して授業に取り組んでいるが、チームティーチングでベテラン教員の授業をみることもある。二人は、年間を通して授業の進め方などを相談し合っている。若手教員は、参考書籍の選定や授業の進め方などをベテラン教員から学んでいる。

ただし、教科によっては若手ばかりでベテランが存在しないこともある。一般の公立校であれば学校内の人員配置が考慮されるが、ミドルリーダーが少ない教科については、教員間の学びあいには限界があるため、積極的に他のIB校教員と関係を持つ機会をつくっている。

④文化的背景の異なる教員間の学び

X校では、IB生は少ないので、IBの授業だけを担当している教員はいない。外国人教員でも、学習指導要領に則った教育を学び、担当している。担当授業数は、IBを1.3倍で計算していたが、外国人にとっては、一般授業の方が学習指導要領の理解や40人というクラスサイズの多さで負担に感じることもあるので、再検討している。

また、外国人教員も校務分掌を担うことを契約時に明示している。X校では担任・副担任制を取っており、外国人教員を1学年に1人以上配置している。職員室は日本人と外国人がいっしょである。基本的に、こうした学校の特質を理解した上で入職する教員たちなので、大きな摩擦はない。しかし、通常のコースでは、文部科学省や自治体の書類の理解など日本語力が求められる

ので、外国人教員には IBの方が働きやすいことが多い。

日本人教員にとっても、X校では新しい教師のあり方を学ぶ必要がある。IBはもちろん、生徒指導についてもX校は独自である。X校では、日本の学校文化は通じないという。たとえば、校歌は生徒有志が作詞し、校則は生徒と教員が話し合って決める。部活などの課外活動は、生徒が申請し、生徒会（中高合同）と教員が審査して承認される。CASに近いが、一般生も行っている。こうした学校のあり方を、X校では教員が実践しつつ、学んでいる。

⑤ 自主研修

X校では、近隣のIB校と共同で、教員らが自主的に job-alike 研修会を行っている。前述のベテラン教員は若手教員らを誘い、DPコーディネーターを通した上で、他校と連携して自主的な研修を実施している。IBにおいては生徒の最終評価は絶対評価であり、全員が満点を取ることも理論上可能なので、互いの学校をライバル視はしていない、と言う。

自主研修では、お互いの授業を見学したり、他の教員と議論したりして、さまざまなヒントを得ている。たとえば、パワーポイントを利用した生徒の発表や議論を行っていた教師が、パソコンを使用しない授業を見学し、IBの最終試験が長時間の筆記試験であることも加味して、手書きの授業を始めた例もある。

筑波大学が受託したIBコンソーシアムでの教科ごとの教員間の学び合いも、よい機会になっている。探究好きな教員が実際に一堂に会して学び合えるような機会や費用があるとよい、という意見があった。

⑦ Y校 (MYP)

日時：2月6日（火）、7日（水）

訪問者：梅津静子、木村光宏、松本暢平、原田群士

調査内容：教員インタビュー、MYPの授業観察、探究発表の見学

調査対象：校長、教頭、MYPコーディネーター、教員3名（数学、社会科、美術）

○Y校の概要

Y校は地方の私立中高一貫校である。経営的な背景のみならず、探究的な学びやICT教育等のこれまでの様々な教育改革を、枠組みをもって実施していけるプログラムとしてIBの導入が検討された。DPは様々な制約があると捉え、そしてMYPにこそIB教育の本質があると考え、MYPを導入した。IBの導入前から、探究活動を活かして総合型選抜を用いた進路選択をする生徒が多くいた。そのため、MYPを経たのち、そこでの活動を生かして総合型選抜で大学に入るという生徒の進路選択に抵抗感をもつ教員はいない。

○管理職・MYPコーディネーターの工夫

Y校の管理職やMYPコーディネーターはIB導入に際して様々な工夫をしている。Y校は、IB導入と同時期にコロナに直面した。コロナの直面は、当然厳しいことではあったが、IBを推進する契機にもなった。なぜならコロナのような答えの無い課題を経験したことで、教員がIB教育の

必要性を再認識できるようになったからである。また、コロナによって様々な教育活動が制限されたため、そこで生まれた時間を IB の研修に使う等の工夫をすることができた。Y 校は、コロナという危機を教員の学びの良い機会にできた学校であるといえる。

地域の方にも IB 教育を理解していただくためにシンポジウムを開催している。IB の仕組みを詳しく説明しても、かえって複雑で、住民を困惑させてしまう可能性があるため、学習指導要領の文脈等、伝わる表現で説明するように心がけている。保護者向けには、コーディネーターが毎週通信を出すなどの情報発信をしている。

あまり迅速に改革を進めるのではなく、時間をかけながら改革を進めている。IB を軸にもちつつも、自分達の学校に合ったやり方を模索するように心がけている。例えば、IB の用語をそのまま使用するというよりも、相手に伝わる表現で伝えることを心掛けている。IB の用語を相手に伝わるように翻訳できる人を IB のチームに入れる等をしている。IB を楽しめる教員と、ついていくことに難しさを抱える教員と二分しないようにしていくことが課題である。

○教員の学びと成長

①若手教員 A の学び

若手教員 A は美術の担当である。Y 校への赴任をきっかけに IB についてゼロから学ぶようになった。大学院時代に non-IB 校で非常勤講師をしていたため、学習指導要領に基づく授業のストックはあったものの、IB については知らなかったため当初戸惑いがあった。IB について学んでもらおうという管理職の意図もあり、1 年目から IB のリーダー会議に出席した。はじめは聞きなれない IB の単語が多く登場し困惑していた。しかし 2 年目にコーディネーターと同じ学年担当になったため、分からないことがあると質問し、教えてもらうことができた。2 年目にだんだんと理解ができるようになり、3 年目になってようやく授業内容も固まってきたといえる。最初の数年は IB 機構に提出する書類づくりと授業準備で自転車操業状態であったが、3・4 年目は副担任にしてもらったこともあり、授業準備に集中できるようになった。他の科目は、担当者が複数人いる場合が多いが、美術は担当が一人であり、すべて一人で進めていかなくてはいけないため大変さがあった。4 年目の現在は、これまで作成してきた授業で扱うワークシートを修正する段階に入り、だいぶ落ち着いてきたといえる。初めて IB の手引書を読んだ時は、分かりづらく困惑した。1・2 年目は手引書を読むこと自体が辛かった。3 年目からは解読できるようになり、現在は理解することが出来ている。

若手教員 A は IB の良さとして、評価の到達度が明確に示されていることを挙げていた。特に美術は、教員の主観で成績をつけてしまいそうなことがある（例、活動を頑張っている生徒には高めの成績をつけたい等）が、IB の評価では、その軸が明記されており、生徒に成績の根拠を客観的に示すことができる。また、IB で示されている学びのサイクルは、実はこれまでの日本の美術の授業がやってきたことに当てはまるものであり、中身はとても似ている。ただ、手引書が読みづらかったため、当初は困惑してしまったといえる。

現在抱えている課題としては、IB の評価をいかに簡略化し、業務上まわせるようにするかである。一学年 100 人程の人数を評価することは時間がかかる作業である。評価の作業は、まとまった時間を確保することが求められるため、評価に集中する日を一日設ける、等できたら良いと感じている。

②ベテラン教員 B、教員 C の学び

ベテラン教員 B は、Y 校で 30 年以上働く社会科の教員である。ベテラン教員 C は公立学校で 40 年近く勤務した後、別の教育関係の仕事を経て、Y 校に赴任した数学科の教員である。Y 校は 5 年目になる。

B 教諭は、当初、「歴史的事実を知ることからしか概念的な理解も生じないのではないか」と考え、概念的な理解を最初から中心に据えるやり方には抵抗があった。しかし実際に総括課題などで概念を使った課題を生徒たちに与えてみると、「概念を使って歴史を考えたり、論じたり（場合によっては、歴史上の人物についての脚本を書いたり）することができるようになる」ことが分かってきた。どのような概念を中心に据えて生徒たちに考えさせるのか、という点で教員の側の責任は重くなる可能性はあるが、概念的な理解を重視する点で MYP の学習は非常に生産的になりうると感じている。概念的な理解を授業の中に取り入れる過程では、概念を扱いつつ授業内容を網羅することに苦労し、講義の時間を速くする等試行錯誤した。しかしだんだんと、講義で全て網羅しようとするのではなく、生徒に予習等を課すやり方が合理的であることに気づき、授業のスタイルを変化させてきた。IB の評価は「泣きそうになるくらい」大変であり、今後作業に工夫が必要になると感じている。IB に限らず、学習指導要領も思考を重視した内容に変わってきていると感じており、生徒から本質的な問いがでてくることもある。概念的な理解の授業を通して、授業に取り組むことが各段に面白くなってきたと感じている。

C 教諭は、最初 IB と出会った際に、「今までの自分のスタイルは全部捨てるぐらいの覚悟」で取り組もうと感じたという。IB の数学は、身の回りの問題から身近に無い問題まで、広く視野に入れた学習内容を目指していると受け止めている。大変さもあるが、教材開発が上手くいった時や、生徒が活動していく姿をみれた時はとても嬉しい気持ちになる。「今までの自分のスタイルは全部捨てるぐらい覚悟」と述べたものの、教員 C にはこれまで蓄積してきた教材研究の引き出しがあるため、それらが自然と IB の授業でも活かされているようである。C 教諭は現在取り組んでいる数学のプリントを示しながら、楽しそうに取り組む内容を調査者に紹介してくれた。新しいことに取り組んでいけることの喜びを感じているという。

⑧ Z 校 (MYP・DP)

日 時：2月14日（水）

訪問者：梅津静子、松本暢平、阿部透冨

調査内容：授業観察、IB 研修（全教員参加）の参与観察

○Z 校の概要

Z 校は首都圏に位置する公立の中高一貫校である。中学 1 年生から高校 1 年生までの全校生徒が MYP 生である。高校 2 年生からは DP やその他のコースが用意されている。見学は 1 日かけて行われた。楽しく英語を使う朝の活動の見学にはじまり、その後自由に校内の授業の見学をした。社会科の教科会の様子を見学する機会もあった。授業時間終了後には全教員を対象にした IB 研修の参与観察をした。

○教員の協働的な学びについて

社会科の教科会の様子を参与観察した。教科会の途中から参与観察を行ったが、教員達はユニットプランの探究ステートメント (Statement of Inquiry) について話し合っていた。特に、探究ステートメントとしてふさわしい文言はどのようなものであるかを話し合っていた。探究ステートメントの解釈の幅について、話題にする教員がおり、その幅の度合いについて議論があった。その後、探究ステートメントの普遍性のあり方について疑問点や意見の交換があった。また、授業のワークシートをどの程度作りこむか、といった議論もあった。この議論は教員の足場架けの議論であると言えそうである。また、生徒のリサーチスキルに関しては、検索の手段だけでなく、資料集の活用の仕方も身に着けられたら良いといった意見もあった。また、教科書の意味を読み込めていない生徒がいる場合もあるので、時には教科書の輪読といった手法を用いることも効果的であるといった話も挙がっていた。最新のツールから古風な手法まで、バランスのよい視点で指導方法を検討している教員の姿が印象的であった。

放課後には、教員の全体研修があった。今回の研修は、10月、11月に行われた研修につづき3回目の研修である。DPコーディネーターによると、この研修の目的は、教員ひとりひとりのアカウントビリティを高めることにあるという。これまでの2回の研修で、教科内でポリシーやユニットプランの作成がされてきた。この3回目の研修では、教科の異なる教員で構成されたグループ内で、互いに教科ポリシーやユニットプランを説明するものだった。そうすることで、来年度新しく入る教員に対して、説明できる立場になってもらうことが意図されている。異動のある公立学校である以上、働く教員に依ってカリキュラムが変わる仕組みではなく、学校の基準を保つための工夫が大切である。研修中も、DPコーディネーターは「〇〇 (Z校のある地域名) の学校であること」、「IB World School であること」の2点において、担当者が変わっても質保証されることが期待されていると述べていた。研修に参加していた教員は4人程度のグループで活発に自身の教科の取り組みの紹介、意見交換を行っていた。

また、研修後、若手教員3名と話す機会があった。若手教員は、学校という職場に慣れるだけでなく、IBのことも学ばなくてはいけないため、大変であると述べていた。ある教員は、IBの探究スタイルをやるだけでは、基礎知識がついていないようにも感じ、現在高校2年生を対象に基礎知識の獲得に向けた指導を行っているという。受験を控える生徒の保護者からは、一般受験対策もして欲しいという声もあり、それに応えようとすると大変になる。一方で、授業の合間に言葉を交わしたある教員は、学習指導要領とIBは親和性が高く、むしろ文部科学省の先進的なアイデアを取り入れる方法としてIBの枠組みが有効である点を強調していた。IBカリキュラムと学習指導要領との親和性の度合いは科目によって強弱がある可能性が示唆されたといえる。

○Z校の時間の使い方の工夫

研修では全教員が「課題を授業内で終わるように設定するように」と呼びかけられていた。生徒が課題を授業内で終わらし、放課後は別の活動をする設計を目指しているという。生徒のウェルビーイングを考慮した考えである。また、Z校の特徴の一つとして、授業が100分であることがある。ある教員によると、100分授業によって、時間の効率化も測ることができるのみならず、パフォーマンス課題の可能性も広がるという。このように、Z校は時間の使い方の独自の工夫が

みられた。

3) 今後の見通し

上記のプレ調査の結果を踏まえ、現時点で検討している今後の調査の見通しは以下の通りである。

①教育効果の一環として教員の学びに着目した研究の継続

今回のプレ調査を通じて、課題に直面し、思考錯誤しつつも、学び続ける教員の声を多く聴くことができた。そこで、2024年度以降に着目したいのが、IB導入に伴う教員の学びである。現在検討している観点としては、教員のアンラーニング、エージェンシー、教員の協働（学際的な協働、教員と地域市民の協働、他校の教員との協働、公立校で異動するIB経験教員の協働、国外で経験をもつ教員との協働等）、教員の学びの変容（ATTが教員にもたらす学び方の変容、IBの理念がもたらす指導の変容、認証機関が入ることによる意識の変容等）、教員のこれまでの経験とIBとの関連（学習指導要領とIBの教科ガイドの融合による効果、日本の学級経営的な視点とIB教育の融合による効果、特別活動とIBのサービス、SA、CASの指導）等である。

調査方法は主に、教員を対象としたインタビュー調査であり、その語りに着目するものであるが、それらの語り実践の場（授業）でどのように具現化されているのか、ユニットプランナー等の収集に加え、授業や研修の参与観察も複数回行い、多面的に分析することとする。これを実現するため、2024年度は、事例を3校に絞り、複数回の学校訪問ならびに参与観察、様々な立場の教員へのインタビューを行うことを検討している。これらの研究成果を学術的に示すのみならず、学校教員向けにイベント等で発信することも検討している。

また、2025年度に向けたプレ調査として、複数のPYP校・MYP校への訪問を検討している。加えて、事業計画書にそってEMIの質問紙開発を行う。特に注目するのが、DPにおける英語による教科学習である。英語だけではなく、歴史、物理、数学、芸術などの教科・科目での実施や、それぞれの授業において英語で学習する意義を検討し、教える教員の育成や教える際の課題についての調査を計画している。日本語DPを採用している学校を中心に調査し、今後、さまざまな学校で教授言語に英語を採用する科目が増えた際に、役に立つような先行的な事例を抽出することを検討している。

②教員の学びの場の創出

主な取り組みとしては、DP教科グループごとの学びを実施する。「IBの教育効果に関する調査研究事業」で実施したものと同様に、DP教科グループごとに参加教員を募り、互いの取り組みから学び合う場を、オンラインを中心に展開する。

また、学際的な学びの在り方をめぐって、試行錯誤する教員の声も多く聴かれたことから、「学際的（cross-disciplinary）な学び」をテーマにしたイベントを開催する。これは、2025年の全体プログラムの学び合いのプレ調査も兼ねたものであり、プログラム関係なく開かれたイベントにすることを検討している。

①と②の発信やプラットフォームについては、コンソーシアム運営業務を担当する株式会社ア

オバインターナショナルエデュケイショナルシステムズと連携しながら取り組む。

2-3. 大学調査

大学調査（大学及び修了生を対象とした調査）では、「①大学調査」及び「②修了生調査」を行う。なお、「1-1. 業務の概要」の「2）業務の内容」で述べた通り、「①大学調査」の質問紙調査による部分については、「基礎調査（大学調査）」として位置づけ直したため、「2-5. 基礎調査（大学調査）」において詳述する。

◆大学及び修了生を対象とした調査（大学調査）

- ①大学調査…日本の大学での IB を活用した入試に関する実態調査を行う。
 - i) IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査
 - ii) IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査
 - iii) IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査
- ②修了生調査…IB 校卒業後の大学での学びやその後の進路を明らかにする。
 - i) IB 修了生の大学入学後の学びの実態
 - ii) IB 修了生の大学卒業後の進路

1) 調査の概要

(1) 調査の目的

本調査の目的は、今日の日本における国際バカロレア（以下、IB）を活用した入試の現状と課題、そして IB 修了生の大学入学後及び卒業後の進路状況を明らかにすることである。それにより、今後 IB を活用した入試の導入を検討している大学や現在実施している大学での入試のさらなる改善への示唆を得ることができる。また、IB 修了生の大学入学後の学習パフォーマンス及び卒業後の進路等を明らかにすることで、日本における IB 教育の効果を検証するための基礎的なデータを示すことができるといえる。

(2) 問題の所在

文部科学省と IB 教育推進コンソーシアムは、2023 年 3 月 28 日に IB 認定校等が 207 校（2023 年 3 月 14 日時点）になったことを発表している。これにより、政府が掲げていた「2022 年度までに 200 校以上」という目標を達成したのである。これは、現在（2024 年 2 月）のイギリスにおける 137 校、ドイツにおける 81 校、スイスにおける 55 校やフランスにおける 22 校等、欧州の主要国と比較しても、非常に多くの認定校数を有していることが分かる。

このように、日本国内における IB 認定校数の拡大に伴い、問題となってくるのが、これらの IB 認定校を卒業し、国内の大学進学を希望する IB 修了生の大学入学者選抜である。従来、IB は国境を越えて提供されてきた国際教育資格及び大学入学資格であったものの、近年の日本における状況を含め、世界各国においても国内の IB 認定校を卒業し、国内の大学に進学するという「国境を越えない IB 修了生」が増加傾向にある。日本においても、これまで IB 資格は、海外からの帰国生が取得する資格として、帰国生入試等で取り扱われてきた。しかし、先述のように、国内における IB 認定校数の拡大に伴い、今後これらの学校を卒業した IB 修了生の選抜や受け入れ体制の整備は、国内大学にとっては喫緊の課題であるといえる。2023 年 1 月現在、日本国内において

IB 資格を活用した入試を実施している大学は、77 大学であり、まだまだ少ない状況である（なお、2024 年 1 月現在では 78 大学となり、1 大学増加した）。

そこで、本研究では、国内における IB を活用した入試を実施している大学での実施状況、導入背景やプロセス、選抜方法、課題等について明らかにすることで、今後 IB を活用した入試を導入する際の示唆を得たいと考えている。

また、IB 資格を取得した生徒の大学入学後の学習パフォーマンスやその後の進路を含めた、IB 修了生調査を実施することで、IB の効果を検証するための一つの指標を得ることができると考えている。

（3）研究課題

以上の点を踏まえ、本調査研究では、以下の 2 つの研究課題を設定した。

研究課題①：大学調査

- i) IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査
- ii) IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査
- iii) IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

研究課題②：修了生調査

- i) IB 修了生の大学入学後の学びの実態
- ii) IB 修了生の大学卒業後の進路

（4）調査方法

本研究では、主に半構造化インタビュー調査（今年度はすべてオンライン実施）を通じて、IB を活用した入試を実施している大学における当該入試の導入背景、プロセス、選抜方法や課題等を明らかにする。

（5）調査スケジュール

2023 年度は、主に大学調査を中心に実施した。まず、はじめに 4 大学に対して、半構造化インタビューを実施した。なお、修了生調査については、2025 年度以降に準備を進める予定である。

（6）インタビュー調査項目

本調査研究では、インタビュー調査の項目として、以下の項目を設定した。

調査項目

- ・ IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？
- ・ 導入にあたって苦労したこと
- ・ 現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

i) IB を活用した入学者選抜の形態・方法に関する調査

- ・入試名称と実施区分（総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか？）
- ・対象学部・学科について
- ・選抜方法（小論、面接、書類等）について
- ・IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行なっているのか？
- ・学部・学科ごとに選抜方法の違いはあるか？
- ・募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準
- ・どこの国・地域の修了生が多いのか？
- ・入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？
- ・選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

ii) IB を活用した入学者選抜の要件に関する調査

- ・出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？
- ・その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？
- ・出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？
- ・IB サーフティフィケートの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サーティフィケートも認めているのか？）
- ・IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取扱い
- ・出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した／している課題はあるか？

iii) IB を活用した入学者選抜の出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査

- ・出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？
- ・出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？海外からの出願は想定されているか？

iv) 入学後の追跡調査及び学生サポートについて

- ・入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？
- ・IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？
- ・入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について
- ・入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について
- ・IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行なっているのか？
- ・その他、IB 入試に関連して何か課題に感じていることはあるか？

（花井）

2) 進捗報告

2024 年 1~2 月にかけて、【表 3】の 4 大学に対して、半構造化インタビューを実施した。以

下、調査結果の概要を述べる。

【表3】調査対象大学

日時	大学名
1月23日(火) 20:00~21:00	国立A大学(①)
1月30日(火) 14:00~15:00	私立B大学(②)
1月29日(月) 16:00~17:00	国立C大学(③)
2月9日(金) 11:00~12:00	公立D大学(④)

①国立A大学

日時：1月23日(火) 20:00~21:00
対応者：国立A大学アドミッション担当教員1名
調査者：花井渉(九州大学)、江幡知佳(大学入試センター)、岩渕和祥(東京大学)

IB入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

IB入試の導入背景としては、学長の強力なリーダーシップによって検討が始められたという説明があった。必ずしも自発的にIB入試の導入を検討したというわけではなく、また、大学入試における記述式試験の導入や英語外部試験の活用など、あくまでも様々な入試改革の導入の検討を進める一環でIB入試の検討も始まった。

IB入試の検討時期に関しては、IB入試の検討を始めてから、実際に開始されるまで1年ほどの期間しかなかった。ただ、この大学では開学当初から約25年近く推薦入試が続けられており、総合型選抜(前AO入試)に関してもその時点で十数年続けられていたため、新しい入試を導入することに関しては、また一つ一般入試以外の新しい入試形態を導入するのだという程度で、学内ではそれほど大きな違和感は無かったということだった。

AO入試も、開始してから十数年という時間が経過し、安定的に実施をしていたため、個別入試などとは全く別な観点からの入試にはなるが、その当時はAO入試の方法を援用するようなかたちでできるのではないかと考え、実際にそれと近いかたちで検討を進めた。実際にIB入試の検討をしていたのは、教育担当の副学長を長とする入試改革のタスクフォースであり、そのタスクフォースで固まった案を少しずつ大きな組織に照会・修正をしていくという状況であった。

また、IB入試に関して、初めはほとんど理解が無かったという説明があった。その後、何年かIB入試を続けていくと、教員のなかにIBプログラムで学んだという者が何人か見付き、彼らと話しをしていくうちに少しずつIBについて理解が深まっていったということだった。

導入にあたって苦労したこと

IB入試を始めようとなった時に、IB機構の方に大学へ来ていただいて、IBの概要について講演していただいた。その際に、IB入試の導入に関して数多くの助言をいただいた。その後、IB入試に関する広報イベントや、東京でもシンポジウムなども開催し、IB入試について多くの人に知ってもらおうと努力したが、実際に話をしている大学側の人間も当時はあまりIB入試について

理解が深まっていなかったため、広報を担当した人間は苦勞していたとのことだった。

また、実際に IB 入試の導入を始める前に IB 機構ともやり取りをしていたが、実際に始めてみると課題が浮かび上がる場面があった。例えば、それまで実施していた AO 入試が、高校生が主体的に行った研究活動を評価するものであったため、IB 入試においても、DP の一環で生徒が取り組む課題論文 (Extended Essay: EE) を、選抜の資料として活用しようと検討した際に、当初は IB 機構から EE は生徒自身の進学後の将来の学びと結びつくような内容について書くため、そのように活用されることはよいことであるというような好意的な意見をもらっていた。しかし、入試を始めてみると、一部の IB 認定校から、EE というのはすでに IB 機構が評価したもので、それを大学側が改めて評価することはおかしいというような反応があったことである。上記のような評価の観点を設ける理由としては、生徒を選抜する段階で本人が IB で何を学んだのかしつかりと吟味・検討したいためであるとのことだった。

その他にも IB 入試は秋口に行う入試であるため、国内の IB 認定校が出す見込みスコアと IB 機構が出す最終的なスコアの間どの程度乖離があるのか不安があった。その点に関しても IB 機構に相談した際は、IB 認定校に請求すれば、見込みスコアと最終スコアとの対照表を受け取ることができるという回答をもらっていたが、実際にはこれに関しても IB 認定校からはさまざまな反応があった。

現在の実施体制 (何名で IB 入試を実施しているのか?)、実施体制について課題と考えている点は何か?

IB 入試は基本的にアドミッションセンターがコントロールしながら行う入試であり、現在は専任の教員が 4 人いるとのことだった。また、他の大学でいう学科に相当する教育組織が 25 個あり、IB 入試は全学で実施しているため、各教育組織の教員とアドミッションセンターの 4 人の教員が協力している。具体的には、各教育組織から 2 名以上の担当者に加えてアドミッションセンターの教員 1 名の 3 名で教育組織の入試を行っている。出願がなかった教育組織については上記のような体制は作らないが、仮に 25 の教育組織の全てに出願者があった場合、25 の選抜組織を作ることになり、各教育組織からそれぞれ 2 名の担当者の計 50 名とアドミッションセンターの 4 人の教員、合計 54 人で IB 生の選抜を行うことになるとのことだった。また、アドミッションセンターに所属している 4 人の教員は IB 入試を実施しながら IB について学んでいる状況であるとのことだった。アドミッションセンターに所属する 4 人の教員の専門分野はそれぞれ異なり、誰一人 IB を専門にしているわけではないため、頻繁に更新される IB の教科内容に追いついていくのが困難であるとの回答を得た。

入試名称と実施区分 (総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか?) / 対象学部・学科について

国際バカロレア特別入試というかたちで IB 入試を実施しているとのことだった。また、3 年ほど前入試から、7 月募集と 10 月募集の 2 回に分けて国際バカロレア特別入試を行っている。それまでの国際バカロレア特別入試は、10 月もしくは 11 月ごろに行っていた 1 回のみの実施であった。しかし、秋口で実施される 1 回のみ入試の場合、日本の一条校で IB を学び、見込みスコアで出願した生徒と、海外の学校で IB を学び、既に IB ディプロマを取得した生徒のスコアを並

べて比べることが困難であると判断されたため、現在は7月募集と10月募集の2回、国際バカロレア特別入試を実施している。7月募集ではIBディプロマを取得している生徒、つまり確定スコアが判明している生徒のみ出願でき、10月募集では見込みスコアと確定スコア両方で出願できることから、主に日本の一条校の生徒が10月募集の枠に出願するため、そこで見込みスコアと確定スコアの志願者の棲み分けを図っているとのことだった。

選抜方法（小論文、面接、書類等）について／IBの最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？ 別途小論文や面接試験等を行っているのか？／学部、学科ごとに選抜方法の違いはあるか？

当初、国際バカロレア特別入試を実施した際は書類と面接のみの実施であったとのことであった。しかし、入試を7月と10月の2回に分けた際に選抜方法に変更点を加えた。確定スコアを持っている生徒のみが出願できる7月募集に関しては従来通り書類と面接のみの実施にしたが、日本の一条校の生徒が対象となる10月募集に関しては、書類選考に加えて小論文なども課すようにした。実際には、教育組織によって生徒に何を課すのかに関して若干の違いがあるため、入試のつくりとしては「小論文など」に加えて面接を実施するとのことであった。

小論文を課すようになった経緯は、受験者をどのように評価すればよいのか不明な点が多いという長年の課題から来るものであった。10月募集のみに小論文を課した理由としては、この大学では同じ時期に推薦入試を実施しており、そこでは面接に加えて小論文を課していることから、国際バカロレア特別入試に出願した生徒にも同じように小論文を課すことで、推薦に出願した高校生との違いを大まかに把握することができるためとのことだった。ただ、これに関しても教育組織によって生徒に課す内容が全く異なるため、書類選考の部分はアドミッションセンターが担当し、小論文や面接などの部分は教育組織の方で実施するような形をとっている。また、書類選考に関してもIBの最終試験のスコアのみで判断しているのではなく、他にもいくつかの観点で評価しているとのことだった。

募集人員、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景、基準

募集人員については、定員を設けているのは医学系の教育組織のみになるとのことだった。医学系の教育組織は現在3名の定員を設けている。これは、7月募集と10月募集を合わせて3名であるとのことだった。そのため、7月募集の際に1人合格者を出した場合、10月募集の際に合格できるのは残り2名とのことだった。また、3名の定員があるが必ずその数字を満たさなければならないということではなく、出願した生徒が合格基準に達しなかった場合は、必ずしも3人合格者を出さなくてもよいことになっている。医学系以外の教育組織には定員はなく、全て若干名の募集とのことであった。

どこの国、地域の修了生が多いのか？

特に何か傾向があるというわけではないとのことだった。当初の予想では、中国からの出願が多いと予想していたが、実際には中国の他のアジア諸国、オーストラリアやニュージーランド、北米、中南米、ヨーロッパからも出願がある。そのため、どこの国からが多いということではなく、各国・各地域から満遍なく出願がある状況とのことだった。また、国際バカロレア特別入試を通じて受験者層の多様化を実現することが期待されたが、そう言えるほど実際の入学者も多くないという

現状があるという回答を得た。

入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？

確定スコアで出願した生徒と、見込みスコアで出願した生徒を比較する難しさに関する課題については、入試の時期を2つに分けることで解決しようとしている状況。時期を2つに分けた入試を実施してから、まだ3年ほどしか経過しておらず、その間志願者がまだ1人も出ていない教育組織も存在するため、選抜方法に関して何か具体的な課題を現時点では感じていない。また想定よりも入試時期を2つに分けたことに関してメリットを感じているとのことだった。具体的には、特に10月募集に関しては同時期に推薦入試も実施しているため、IBを経験した生徒と日本の生徒を比べることができることから、IB生のポテンシャルの高さを実感することができ、合格者は増える傾向にある。そのため、このまま現状の選抜方法を継続していこうと考えているとのことだった。その一方で、教育組織によっては出願者が一人も出ていない状況を踏まえると、国際バカロレア特別入試の広報の方法については検討の余地があるという回答も得た。また、IBのカリキュラムの中身が少しずつ変化していくことにキャッチアップしていくことについては常に困難を感じているとのことだった。

選抜形態、方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

学内において、アドミッションセンターが入試コンサルタント的な役割を担っているため、IB入試に関わらず入試全般について日常的に対話を行っているとのことだった。

出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？

出願要件としては、教育組織ごと出願に必要な履修科目を設定しているとのことだった。例として、文系の教育組織であれば歴史か地理か哲学、いずれか一つをHLで履修していることや、理工系の組織については数学HL必修、物理なども必修のような形で入学要件を定めているとのことだった。しかし、体育系と芸術系の教育組織に関しては特に履修科目の設定はしていないとのことだった。その他に最終試験で36～38点以上の取得を入学要件として定めている教育組織があるとの回答を得た。また、必修科目の設定については各教育組織の一般入試（前期）の科目を参考にしているとのことだった。最終試験のスコアについては、当初からボーダーラインが定められていたわけではなく経験的に割り出されたということだった。

出願要件の見直しなどは行われているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行っているのか？

基本的には毎年全体について見直しを行っているため、必要に応じて随時見直しをしているとの回答を得た。今後、合格者や入学者が増加すれば各教育組織で出願要件の設定なども検討されるとのことだった。

IBサーティフィケートの取り扱いについて（ディプロマのみ認めているのか？サーティフィケートも認めているのか？）

サーティフィケートは認めておらず、ディプロマ取得者のみの出願を認めているとのことだった。

た。IB入試は、ディプロマ取得者のための入試という位置づけのため、サーティフィケートのみの取得者に関しては総合型選抜など他の入試形態で出願してほしいとのことだった。

IBデュアルランゲージプログラムの出願資格としての取り扱いについて

取り扱いに関して、英語 DP にて取得したディプロマとの区別はないとの回答を得た。

出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した／している課題はあるか？

出願要件として履修科目の設定を行い、数学や物理などそれぞれの科目で HL を履修しているとはいえ、各学生が各々通っていた高校で学んでいた範囲は科目によって異なる。そのため、主に理系の教育組織に入学する IB 生が対象だが、合格が決まってから出願者と連絡を取り、それぞれの高校で学んできた範囲を確認することで、入学した後に授業で必要になるであろう知識について高校段階で学んでいないことが判明した場合は、入学前に事前に勉強してほしい旨を伝えているとのことだった。しかし、合格発表後から入学までの期間は短いため、対象となる学生が学んでほしい内容を全てカバーできるのかについては不安が残るため、入学前の時点で丁寧な支援を行わなければならないという課題を感じているとのことだった。

出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

10 月募集の方は、当初から全学で実施するというので始めたものが現在にまで引き継がれており、7 月募集の方は新しく加わった入試形態ということで、現時点では医学系の教育組織など 5 つの希望する教育組織のみで実施している状況であるとの回答を得た。

出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？海外からの出願は想定されているか？

海外からの出願も想定していて、7 月と 10 月の募集の両方の時期で出願できるよう対応している。また、競合する他大学との先後関係についても注意しているが、現時点では入試事務の負担の点から上記の 2 つの時期でのみ IB 入試を実施している。しかし、大学側が合格を出しても他大学との競合に負けて入学辞退をされてしまう状況は継続してあるため、IB 入試の実施時期については今後とも検討する必要があるとのことだった。一人の合格者を出すために教育組織から 2～3 人もの教員が担当し、丁寧に選考を行ったのにも関わらず、海外の大学はもちろん、他の国内の大学にも競合面において負けてしまうということになると、年々 IB 入試に対する教員からのモチベーションも減少してしまうことが課題として挙げられるとのことだった。

入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？／IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？／入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

基本的に GPA のみだが追跡は行っているとのことだった。全ての学生の成績について追跡調査を一か所で行うとともに、調査結果を各教育組織にフィードバックできる仕組みがある。アドミッションセンターとしては、その結果をもとに各教育組織が入試ごとの定員、割り振りについて検討をしてほしいと考えているが、追跡調査の結果をどのように教育組織で活用できているのか

否かについてはアドミッションセンター側では把握できないとのことだった。

入学後のサポートに関しても、基本的には教育組織が管轄しており、アドミッションセンターとしてはサポートがしにくいとのことだった。そのため、追跡調査は行っているもの、入学後の具体的な勉強のサポートについては行えていないとのことだった。

入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

全ての入試区分について追跡調査を行っているとのことだった。

IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行っているのか？

現時点で他大学と連携する機会はあまりないが、国立大学のアドミッションセンターの教員同士の横のつながりがあり、アドミッションセンター連絡協議会というものを通じて情報交換をすることはあるとの回答であった。

その他、IB 入試に関連して何か課題に感じていることはあるか？

IB の最終試験において、どの程度のスコアを取得した学生がどの程度の学力の持ち主なのかを見極めることについては、過去も現在も変わらず難しいとのことであった。また、一条校で実施されている IB 教育の充実度についても不明な点があり、国内の IB 認定校と連携を深めていく必要があるのではないかということであった。

(島田)

②私立 B 大学

日 時：1月30日（火）14:00～15:00

対 応 者：私立 B 大学アドミッション担当職員 1 名

調 査 者：島田康行（筑波大学）、花井渉、江幡知佳、岩渕和祥、駒走聡俊（筑波大学大学院）

IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

IB 入試の導入の背景・目的としては、B 大学が入学者の多様性を重視しているため、その多様性を広げる選択肢の一つとして、IB 入試の導入を決めた。そのため、他のカリキュラムと比較して IB が優れている点も考慮しているが、それだけで、IB 入試の導入を決めたわけではないとのことだった。

IB を活用した入学者選抜は、2011 年度の国際系の学部の入学試験から導入されているが、あくまでもそれは SAT や ACT などのグローバル指標になるスコアを活用した大学入学者選抜における他の選択肢の一つとして IB のスコアが活用されていたのに留まっており、IB 修了生のみを対象とした大学入学者選抜は 2016 年度から開始されたとの回答を得た。

IB 入試の導入形態に関しては、第 1 期募集と第 2 期募集のように募集の時期を 2 回に分けており、それぞれの対象者を区別しているとのことだった。第 1 期募集では国内外のインターナショナルスクールや海外の IB 認定校を卒業（最終試験が 11 月の海外学校のみ、見込も可）している

IB 修了生を対象とし、第 2 期募集では日本の一条校の IB 認定校を卒業した IB 修了生のみを対象としている。その理由としては、北半球と南半球をベースとして最終試験の実施時期が異なるため、できる限り各学校に所属する全ての IB 修了生の最終スコアが確定してから選考を行いたいためであるとのことだった。

またもう一つの意図として、第 2 期募集の対象となる IB 修了生はある程度の日本語の学習レベルが保障されているが、第 1 期募集に出願する IB 修了生の中には日本語に不得手な生徒もいるため、第 1 期募集においては書類審査の段階で日本語のレベルを厳格に審査したり、必要に応じて面接審査を行ったりするフローを組む必要があるためであるとの回答を得た。

募集時期を 2 回に分ける形態については、B 大学が IB 入試を導入することを決めた当初から決定されていたという回答を得た。その理由として、B 大学が IB 入試を導入したタイミングが、日本国内で IB 認定校を増加させようとしていた動きが活発化していた時期と被っていたためであるとのことだった。そのため、既に IB を導入している学校から、どのような時期で IB 入試を設置することが適切なのかヒアリングをし、日本語能力の測定など面接が必要な出願者（海外の IB 生）は第 1 期募集に出願してもらい、面接の必要性が低い出願者（日本の IB 生）には第 2 期募集に出願してもらおうという結論に至ったとの回答を得た。（第 2 期募集に面接を課さない理由として、第 2 期募集の 1 月は大学側で期末試験があるため、第 2 期募集でも IB 入試の面接を行った場合、大学の教員側も負担が大きいという背景も存在したとのことだった。）

導入にあたって苦労したこと

IB 入試の導入にあたって苦労したことは、IB 入試を導入するまでに様々な IB 認定校や、既に IB 入試を適切に導入していた大学にヒアリングを実施したり、IB フォーラムへの参加などを通じて、IB に関する情報収集をしたりしながら出願書類における出願要件の選定したことであるとのことだった。

また、私立大学は国立大学と異なり、入試自体の作成を大学の職員が行わなければならないため、当初は IB の知識が不足している中、IB 入試の内容を考案したことも苦労の一つであったという回答を得た。

上記の点に加えて、特に苦労した点は次の二つであったとのことだった。一つ目は、書類選考型をベースとしつつも、出願者を適切に評価するために出願書類の内容としてどのような項目を求めるべきなのかについてかなり注意深く調整したこと。二つ目は、実際に出願があった場合に、IB について理解不足である多くの大学教員にどのような目線で・何に焦点を置いて選考すべきなのかについて学内で浸透させていったことが大変であったという回答を得た。選考のポイントを学内に浸透させていく作業は現在も行っているとのことであり、実際に B 大学のアドミッションセンター主催の IB 入試に関する勉強会を通じて、入試結果と IB スコア、入学後の GPA などの関連性を基に大学としての基本方針としてこのような目線で選考してほしいという旨を伝えているとのことだった。現状、第 1 期募集のみで 40 人弱の出願者がいるが、B 大学は学科数が多いため、学科によっては 3、4 年に 1 人の出願があるのみ、もしくは 2016 年に IB 入試を立ち上げてから一度も出願がない学科もあるため、学科単位で IB 入試に関するノウハウが蓄積されることが難しいことから、入試制度全体として IB 入試のノウハウを降ろしていくことを意識しているとのことだった。

現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

専任の職員、有期雇用の職員、アルバイトを合わせて計 20 名程度でアドミッションセンターを運営している。組織の構造としては、組織の長に事務長、その下にチームリーダーとよばれる役職の人間が 3 人おり、その下に他の職員が連なるといった構造になっているとのことだった。チームリーダーの役割分担として、①学部入試担当、②英語系学位プログラム担当、③日本語系の大学院担当の 3 つに分担されている。教員との関わりも 2 名ほどいるとのことだった。また、実施体制について課題と考えている点としては、アドミッションセンターが IB 入試や帰国生入試、一般選抜、大学院入試など全ての入試をカバーしていることであるとの回答を得た。

入試名称と実施区分（総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか？）

各学科によって、IB を冠した入試と、そうではない入試があるとのことだった。

対象学部・学科について

第 1 期の募集に関しては、基本的に全学部が対象になっているが、第 2 期の募集に関しては面接を選考上必要としている学科は募集を行っていないとのことだった。しかしその場合、第 2 期の募集の対象となっている一条校出身の IB 生が、希望する学科に IB を使って受験する権利が剥奪されてしまう可能性があるため、IB のディプロマ取得見込みの出願者に関しては、評定や検定試験の一切を問わず、全ての学部で実施している学校推薦型選抜（公募制推薦入試）の出願資格を満たすという考えを導入している。

選抜方法（小論、面接、書類等）について／IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行なっているのか？／学部・学科ごとに選抜方法の違いはあるか？

IB の最終スコアと、志望理由書、EE の日本語の要約とオリジナルのコピー、TOK・CAS に関する活動レポートを全体的に評価しているとのことだった。しかし、IB の最終スコアの成績が一番大きい比重を占めているとの回答を得た。

また、TOK や CAS に関する活動レポートは選抜資料として非常に有効であるとのことだった。なぜなら、TOK や CAS に関する活動レポートの質は出願者によって大きく異なり、それらの資料から志望度や入学後の学習意欲の高さを判断できるためであるとのことだった。実際に、合格者の中には IB スコアだけなら不合格の判定になっていたであろう出願者も、活動レポートなどの資料の質が高いために合格したというケースも存在するとのことだった。

また、TOK に関するレポートに関しては、「TOK で学んだことを A4、5 枚以内にまとめなさい」というようなテーマ設定にあえてしているとのことだった。そのような自由度の高いテーマを設定することで、実際の出願書類の内容を見てみると、高校時代に TOK で書いたレポートをそのまま添付する出願者もいれば、TOK の考え方をベースに大学入学後の学びの展望について発展的に記載する出願者もいるため、同じ出願者でも選考する際に差別化することができるとのことだった。

募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準

全ての学部で若干名であるとのことだった。

どこの国・地域の修了生が多いのか？

第1期の募集では、ドイツからの出願が毎回多く、シンガポールやイギリス、オランダ、ベトナム、中国からも出願があるとのことだった。IB入試を立ち上げた当初は、海外のインターナショナルスクールを対象としている第1期募集には一定数外国籍のIB生も出願してくるであろうと予想していたが、IB入試を導入してから7~8年経った現在まで、外国籍のIB生の出願はほとんどおらず、基本的に帰国子女のIB生からの出願が大半であるという回答を得た。しかし、国際系の学部のように主な教授言語が英語の学部にはIBを活用して出願する外国籍の生徒も多数いるということであった。

ドイツからの出願者が多い背景として、前提としてデュッセルドルフやフランクフルトのインターナショナルスクールの中でB大学への進学志望者が多いというのが挙げられた。またその理由として、それらのインターナショナルスクールで勤務されている日本人の教員が、日本に帰国した際にB大学に足を運び、大学の教職員と情報交換をする機会が多いためではないかということだった。そのため、日本の高校と大学が普段のコミュニケーションで繋がっているような感覚で接点があるという回答を得た。

入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？／選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

全ての学部学科の教員が入試の選考を行うのではなく、アドミッションオフィサーが入試を集約して選考していく体制を作ることができないかという課題を学内で検討している段階であるとの回答だった。

出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？／その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？／出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？

第1期の募集では、日本語能力を測る上で日本語A、もしくはBで一定の基準点を設けている。また、理工学部などの理系の学部では、必ず数学HLで5点以上の取得などの要件を定めている。基本的にどの科目でも基準点を設ける際は「5点」をボーダーラインにしているとのことだった。出願に必要な科目を決める際には、IBOから受け取ったIB科目のリストを参考にしつつ、IB認定校の教員からの要望を聞きながら生徒がB大学に出願する際に必要な履修科目の種類を広げているとの回答を得た。

例として、B大学のドイツ語系学科では、選択必修で歴史、経済、地理、ビジネスと経営が定められているが、日本の高校にビジネスと経営のカリキュラムが無いために、IB入試を導入した3年目までは、選択必修の枠に「ビジネスと経営」の選択肢がなかった。しかし、海外のIB校の教員と連絡をとった際に、なぜ歴史と経済などの選択肢はあるのにも関わらず、ビジネスと経営は選択肢に含まれていないのかという要望を受けて、入試の年度ごとにそれらの声を反映し、選択必修の科目数を増やしているとのことだった。しかし、上記のような科目数の増加は学科の教

員から声が上がることはあまりなく、アドミッションセンターが主導して出願要件の見直しを行っている。

また、理工学部で定める選択必修の一つである数学に関しては、IBにおける2種類の数学の内、HLを履修していればどちらを選択しても問題はないということだった。その理由として、IBのカリキュラムは年々変わるため、細かく数学の種類まで出願要件に定めてしまうと、アドミッションセンター側も毎年その内容を完璧に把握することが難しいため、数学の種類は問わず「数学HL」というレベルのみでボーダーラインを定めているとのことだった。

IBサーティフィケートの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サーティフィケートも認めているのか？）

原則、どの学部でもディプロマ取得者からの出願のみを認めているが、理工系学部の英語コースのみサーティフィケートも認めているとのことだった。サーティフィケートで出願する場合は、サーティフィケートに加えてSATのスコアの出願も求められているという回答を得た。

IBデュアルランゲージプログラムの出願資格としての取扱いについて

二つの区別はしていないとのことだった。

出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した／している課題はあるか？

特にコロナ禍の際に、最終試験のスコアの正確性に疑問を感じているとのことだった。そのため、出願者の最終スコアの平均点が例年と比べて低い場合や、最終スコアのリマークをIBO側に求める割合が多い場合は、その都度IBOに問い合わせながら慎重に選考しているとのことだった。上記のような確認をその都度行っていくことは、アドミッションセンターとして負担になるが、現在の日本の大学で、IBを活用した入学者選抜を行っている規模感が、B大学が一番大きいという自負を持っているため、上記のような選考の正確性に関わる点については使命感をもって取り組んでいるとのことだった。

出願時期について、どのように設定しているか？DP最終試験と重ならないよう意識しているか？

／出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？

海外からの出願は想定されているか？

海外のIB生と一条校のIB生それぞれが出願しやすい時期をIB認定校からのヒアリングなどを通じて設定しているとの回答を得た。また、主に海外からのIB生を対象としている第1期募集の合格者の方が、日本の一条校からのIB生を対象としている第2期募集の合格者より多い理由については、第1期募集の方が出願者が多いことに加えて、第1期募集で出願するIB生の最終スコアの方が、第2期募集で出願するIB生の最終スコアよりも高い傾向があるということが挙げられた。実際に、第1期募集で出願するIB生のスコアの平均が35点以上であり、出願者の中には40点以上を取得した生徒も多くいる一方で、第2期募集になると、最終スコアの平均が丁度30点もしくは、良くて32点に留まるということだった。そのような状況が生まれる仮説として、B大学に出願する海外のIB校の多くが伝統的なIB校であり、学校のカリキュラム上、生徒に高い最終スコアの取得のさせ方を熟知しているからではないか、とのことだった。

その一方で、日本の一条校の IB 校に関しては、実際に高校の教員と話していても、この生徒であればこれくらいのスコアが取得できるであろうという肌感がまだまだ無いという声があるとのことだった。そのため、第 2 期募集に出願してくる生徒の質も年々向上しているのを感じるが、日本の高校現場において高得点を獲得するためのナレッジが蓄積できていないという考えをアドミッションセンター側は持っているとのことだった。

入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？

毎年、入試区分ごとの GPA 調査を行っている。IB を活用して入学した学生の GPA は他の入試と比べて高いとのことだった。そのため、学内でも IB 生にもっと入学してほしいという声も上がっているとのことだった。

IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？／入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

入学前・入学後を通じて何か IB 生だからといって特別なサポートはしていない。しかし、理工系学部や経済学部など入学後に高いレベルで理数系科目の学力が求められる学部に関しては、一般の学生と IB 生に対して一律に入学前課題を課しているとの回答を得た。

入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

8～9 年ほど前に IR の推進室を立ち上げ、年間のサイクルの中で入試を軸とした成績分析や入学者の学力分析を IR 部門と共同してデータ分析を行い、学内の委員会などで発表し、そこで出てきた課題を入学者選抜に活かしているとのことだった。

IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行なっているのか？

入試として他大学と連携していることは無いが、情報交換などはしているとのことだった。

その他、IB 入試に関連して何か課題に感じていることはあるか？

おそらく多くの大学が手探りの状態で IB 入試を実施していることから、各大学によって出願の時期や選考方法が異なっていたり、現在でも IB 入試に関する情報収集がしにくかったりする。受験者の負担軽減を考慮すると、上記のような課題解決を行わなければならないと考えているとの回答を得た。

(駒走・花井)

③国立 C 大学

日 時：1 月 29 日（月）16:00～17:00

対 応 者：国立 C 大学アドミッション担当教員 1 名

調 査 者：島田康行、江幡知佳、岩渕和祥、駒走聡俊

IB入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？

IB入試を導入したのは、平成28年度が初年度であり、過去7回実施している。IB入試を導入した背景としては、当時国内からの学生の受け入れというよりも、海外からの受け入れ、特に日本人学校に通う生徒を受け入れる取り組みを行いたいという考えがあったとのことだった。また、上記に加えて、SGU構想のアクティビティを高めることで、国際的な取り組みをしているという対外的・社会的なアピールの意図があったという回答を得た。

導入にあたって苦労したこと

特に理工系学部の教員の間で、カリキュラムにおける高大接続を巡る不安があるとのことだった。つまり、IBと日本のカリキュラムの違いについて、前者で教えていない内容があるのではないか、そしてその場合は入学後に大学教員がIB生に何か特別なケアをしなければならないのではないかと懸念があったという回答を得た。しかし、IB入試を実施した過去7年間の内、これまでの入学者は6名と少人数のため、どのようなサポートをするのかの具体的な施策は実施できていないとのことだった。

現在の実施体制（何名でIB入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

IB入試を含め、総合型選抜や学校推薦などの入試は学部ごとに行っているため、C大学の入試・アドミッションを管轄するセンターとしては、関与していないとのことだった。センター内部にIBに詳しい担当者が存在しないことも上記の要因の一つかもしれないという回答を得た。実施における課題としては、選考や面接の中でIB生の学力をどのように測るのかという点について挙げていた。現時点では、評価基準は別途設けるものの、IB入試に出願した生徒にも他の入試と同じ筆記試験を受けさせるなどして、IB生と一般の生徒の回答状況を比較しているが、そもそもIB生に対してどのような内容を問うのが効果的なのか思案しているとのことだった。

入試名称と実施区分（総合型選抜の一環かIB特別入試を実施しているのか？）

「総合型選抜」、総合型の一類型としてのIB入試により、IBを活用しているとのことだった。入試名称については大学名の特定を避けるために省略する。

対象学部・学科について

一学部を除いて全学部でIBを活用した入試を実施しているとのことだった。しかし、各学部によって学部数が異なり、実情としては各学部の希望するコースのみIBを活用した入試を実施しているとの回答を得た。

選抜方法（小論、面接、書類等）について

理系の学部に関しては、筆記試験や口頭試問などを出願者に課しているとのことだった。その一方で人文社会系のA学部では、出願者が将来教員として適切なパフォーマンスを発揮できる見込みがあるのかを審査するために、面接試験ではなくプレゼンテーションを課しているとのことだった。具体的には、このプレゼンテーションでは単に質問の受け答えを見るだけでなく、自

ら何かを作り出していく能力、つまり授業を一から作り出していけるようなパフォーマンスができるのかを審査しているとの回答を得た。ただ、上記のようなプレゼンテーション審査は、IB 入試だけではなく、A 学部においては総合型選抜でも導入されている試験形態のため、IB 入試のためだけに前述したプレゼンテーション審査を実施しているわけではないとのことだった。

IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行なっているのか？／学部・学科ごとに選抜方法の違いはあるか？

出願の要件に IB の最終成績（スコア）を求めている学科は、別途筆記試験や面接などを出願者に課しているが、IB の最終成績（スコア）を出願要件に定めている学科は筆記試験などを課していないケースもあるとのことだった。つまり大学側としては、用意した問題を解いてもらって学力を見るか、それとも出願要件の部分で出願者をふるいにかけるかのどちらかで IB 入試を実施しているとの回答を得た。

募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準

理系 B 学部のみ 5 名の定員を設けているとのことだった。しかし、他の学部に関しては全て若干名の募集に留まっているとのことだった。その背景には、これまでの入学実績が人文社会系 C・D 学部と理系 B 学部のみで少ないため、定員を設定できないとのことだった。その一方で、理系 B 学部に関しては、当初は他の学部と同じように、若干名のみの募集であったが、年々受け入れをしていく中で、IB 生の評価が理系 B 学部の教員の中で高まっていき、最終的には定員を設定するに至ったとの回答を得た。

どこの国・地域の修了生が多いのか？

これまでに入学した学生は、海外から 2 人、国内から毎年 1~3 人程度ということだった。海外からはイタリアやシンガポール、イギリスの IB 生が出願したケースもあるとのことだった。そのため国内外問わず、毎年出願者がいないというわけではないが、現在の C 大学の IB 入試では専願の条件を設けていないため、8 人合格者を出したものの 2 人だけ入学した年や、5 人合格者を出したものの誰も入学しなかった年もあるとの回答を得た。

入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？

IB 入試の出願時期と実施時期について再考の余地があるとの回答を得た。現在 C 大学では 10 月下旬と 11 月下旬に IB 入試を実施しているため、5 月に IB の最終試験がある海外の IB 生は 10 月・11 月の IB 入試に向けて十分な準備期間を確保できるが、多くの日本の IB 校では 11 月に IB の最終試験があるため、日本の IB 生にとっては現行の入試スケジュールは不適切ではないかという懸念がある。また大学入学後の IB 生のパフォーマンスについても把握したいと考えているが、入学者が少ないため検証することが難しいとのことだった。

選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

選抜形態や方法に関しては、全学の入試委員会で議論を行うとのことだったが、IB 入試のみのための検討委員会はないという回答を得た。入学者がある理系 B 学部や人文社会系 C 学部に関し

ては、実際に入学者に入学後の状況の聞き取りを行っているとのことだった。またセンターの教職員や学部の教職員、入試の担当職員で出願時期や入試の実施時期、定員の設定について話し合いを行っているとのことだった。

出願（入学）要件（entry requirement）として、どのような要件を設定しているか？／その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

IB ディプロマ取得済み（または見込み）を出願要件にしていたり、ディプロマに加えてその最終スコアのボーダーラインを設定していたりと、学部やコースによって要件が異なるとの回答を得た。実際に理系 B 学部のある学科では 38 点以上、理系 C 学部では 32 点以上という要件が設定されており、それらの基準は他大学が設定している IB 入試における出願要件を参考にして決めているとのことだった。

出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？

理系 B 学部のある学科に関しては、IB 入試を導入した当初は 39 点以上というような出願要件を定めていたが、他大学との比較や学内での議論を通じて現行の 38 点以上というボーダーラインに変更になったということだった。

IB サーティフィケートの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サーティフィケートも認めているのか？）

そもそも、ディプロマを取得した学生のパフォーマンスについても十分に検討が行われていないこともあり、IB サーティフィケートの出願に関しては認めていないという回答を得た。

IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取扱いについて

特に特別な取り扱いは行っていないとのことだった。

出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した／している課題はあるか？

項目に該当する回答なし。

出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

IB 入試の実施時期が 10 月や 11 月のため、IB の最終試験が 11 月に実施されるような学校の生徒には負担となっている可能性があるが、大学教員の入試負担の軽減や、どこまで入試にコストをかけられるのかなどの問題を鑑み、他の入学者選抜と同じ時期に設定しているとのことだった。

出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？海外からの出願は想定されているか？

項目に該当する回答なし。

入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？

GPA の追跡や、入学時での段階で学業面だけではなく、生活面や授業面に関するインタビューなどを行っているとのことだった。しかし、IB 入試で入学した学生が少ないことから、今後も C 大学に在学している IB 修了生がどのようなパフォーマンスを発揮しているのかは随時把握していきたいとの回答を得た。

IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？

特にいないという回答を得た。現時点では、何か問題などが生じれば入学センターが対応することになっている。今後は、もし IB のカリキュラムに精通している教員がいれば、入学センターとは別に担当者を決めて、IB 生に対してある程度のケアをしていきたいと考えているとのことだった。

入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

特にないとのことだった。

入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

GPA などの定量データのみ IR 部門と共有し、インタビューなどについては各学部の教員や入試担当の教員に共有を行っているとのことだった。

IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行っているのか？

他大学から出願状況を共有してもらったり、他大学の担当者に講演に来てもらうなどの交流・連携を実施しているとのことだった。また、他の大学のアドミッションを担当している教員たちと、IB 入試に関する課題について共有、ディスカッションを行うこともあるという回答を得た。

その他、IB 入試に関連して何か課題に感じていることはあるか？

県内では、公立学校で IB を導入している学校が存在しているため、今後は私立学校出身の IB 生だけではなく、公立学校出身の IB 生の受け入れも行っていきたいと考えているとのことだった。また、日本の学校制度の中で、今後ディプロマ資格のみの取得を目指す学校が増えるのか、それともディプロマ資格に加えて日本の高卒資格も取得できる学校が増えていくのか、これから注視していきたいということだった。

また、入学者が増えない中で IB 入試を継続していくモチベーションについては、各学部や各コースによっては、IB 入試を継続していくモチベーションは非常に高いという回答を得た。また全学の方針としても、入学者の多様性を高めるためにも IB 入試を継続していくことは重要だと考えているという回答を得た。

(岩淵)

④公立 D 大学

日 時：2月9日（金）11:00～12:00

対 応 者：公立 D 大学職員（アドミッション専門職）1 名

調 査 者：島田康行、岩渕和祥、江幡知佳

IB 入試の導入背景、目的、いつ頃から検討を始めて、どのように導入されたのか？／導入にあたって苦労したこと

従来、海外帰国生、外国人留学生、社会人を対象とした特別選抜を実施しており、そこに 4 つ目のカテゴリーとして、一般選抜では受け入れにくい国内一条校出身の IB 修了生を組み込むことにしたということだった。既存の特別選抜に組み込むかたちであったため、IB 入試の開始に関して、学内で合意を得やすかったという回答を得た。

現在の実施体制（何名で IB 入試を実施しているのか？）、実施体制について課題と考えている点は何か？

IB 入試を実施する上で、全学共通の観点のようなものではなく、基本的に IB 入試の制度設計をした後に関しては、各学部・学科に実施を任せているとのことだった。しかし、医学部医学科のみ、アドミッション専門職であるインタビューイーの教員が面接に参画しているとのことだった。同教員は、看護学科においても、面接自体には関わらないものの、面接の評価を振り返る判定会議に助言者として参加しているとのことだった。

入試名称と実施区分（総合型選抜の一環か IB 特別入試を実施しているのか？）

以前は、「国際バカロレア特別入試」という入試名称だった。しかし、4 年ほど前に文部科学省の選抜要項が、「入試」→「選抜」に切り替えたこともあり、現在の名称は「国際バカロレア特別選抜」であるとのことだった。

また、上記の入試は IB 修了生のみを対象に実施しているが、選抜方法や実施時期等は、海外帰国生や外国人留学生、社会人等を対象とした他の特別選抜に準ずるかたちとなっているという回答を得た。

対象学部・学科について

IB 入試開始当初は、一つの学部・学科のみで実施していたが、その後拡大し、現在は全学部・学科で実施しているとのことだった。

選抜方法（小論文、面接、書類等）について／IB の最終成績（スコア）のみで選抜しているのか？別途小論文や面接試験等を行なっているのか？／学部・学科ごとに選抜方法の違いはあるか？

医学部看護学科では面接。医学部医学科では、第 1 次選考（書類審査：IB 資格の成績＋英語スコア）＋第 2 次選考（面接）＋第 3 次選考（IB 資格の成績と面接の成績の合計点に基づく合格者の決定）。その他の学部では、筆記試験（小論文もしくは総合問題）＋面接。なお、面接は全て対面で実施しているとのことだった。

また、IB の最終成績（スコア）は、合否判定に大きく影響しないということだった。実際に面接評価者の資料には受験者の IB スコアが分かる一覧表が載っているが、あえてその点数を気に

して評価してほしいとは伝えていない。そのため、基本的には筆記試験と面接で合格者が決定されるということだった。

医学科の面接に関しては、元々日本の高校生を対象とした推薦入試の枠組みで実施しており、それを医学科のIB入試にも転用したということだった。また、同面接の成績に関しては、日本の高校生に比べてIB生の成績の方が良いという傾向がある。しかし、実際に入学して2年生になり、専門科目の暗記が始まると、それらの暗記学習に苦勞するIB生も多いとのことだった。そのため、現在はIBスコアが40点以上でないといけない方が良いのではないかという方針になりつつあるが、IBスコアよりも筆記試験や面接のスコアを変わらず重要視しているとのことだった。

募集人数、定員を設けているのか？若干名なのか？人数の設定の背景・基準

定員管理が厳格であるため医学部医学科のみ定員を設定している。一方、その他の学部は合格者を出したとしても、実際に入学する数が少ないこともあり、明確な数字を掲げた入試の運用が難しいため、若干名の募集であるとのことだった。

どこの国・地域の修了生が多いのか？

国内の一条校出身者からの出願が多い(7~8割程度)とのことだった。外国の場合、様々な国・地域から満遍なく出願があるとのことだった。D大学では、単身留学でも海外帰国生として認めていることもあり、出願者のプロフィールの傾向としてはオーストラリアとニュージーランドからは単身留学者がいるとのことだった。また、ドイツのデュッセルドルフや、バンコク、アラビア諸国、南アフリカからも出願があるとの回答を得た。

入学者選抜の形態や選抜方法に関連して、感じている課題などはあるか？

IBスコアにおける「リマーク」の取り扱いが難しいということだった。そのため、特に医学部医学科以外の学部・学科に関しては、IBのスコアと合否判定をあまり直接関連させていないとのことだった。医学部看護学科に関しても、IBスコアよりも面接の出来次第で合格を決めている。実際に、医学部でない学部ではIBスコアの見込み点でD大学に合格し、その後最終試験でディプロマが取得できなかったとしても入学を認めている。その背景としては、IBディプロマは日本の通常の高卒資格よりも高い質のクオリフィケーションであるという認識があるという。

選抜形態・方法に関して、学内で議論する機会はあるか？

医学部の中で医学科と看護学科は完全に独立しているため、医学科、看護学科それぞれに独立した入試委員会が存在している。その他の学部については、それらを一括りにした入試委員会が存在しており、そこでの決定事項を教授会で承認する流れがあるという回答を得た。

出願(入学)要件(entry requirement)として、どのような要件を設定しているか？

医学科以外の学部・学科では、「IB資格を授与された者もしくは授与される見込みの者、またはこれに準ずる者」という要件の他、英語スコアの要件を設定しているとのことだった。また、「見込みの者」が結果としてIB資格を取得できなくとも、合格が取り消されることはない。特徴

的な点として、履修科目の要件を定めていない（受験しやすい）点が挙げられる。例えば、文系履修の IB 修了生であっても、医学部看護学科を受験可能となっている。このことが、IB 入試開始から現在に至るまでに受験者等が増加してきた要因になっている。また、出願の際に「CAS や TOK での成果を何千字で書け」といった煩雑な書類の提出を課していないことも特徴的である。そうした書類の提出は IB 修了生にとって負担となると考えられている。医学部医学科では、その他の学部で設定されている要件に加えて、①日本語スコア（IB における言語 A または B で一定以上の成績を取めていること、あるいは日本語能力試験 N1 または日本語検定 3 級以上の資格を有すること）、②IB の物理、化学、生物から 2 科目および数学の 3 科目を履修し、うち 1 科目は HL 成績評価 5 以上、他の 2 科目は SL 成績評価 6 以上または HL 成績評価 5 以上であること、③IB の全体の成績評価が 40 以上であることが定められている。また、医学部医学科のみ、第 3 次選考の段階で専願義務を課しているという回答を得た。

その出願（入学）要件は、どのように、何を基準に設定されたのか？

当初、「IB は 12 年の学校教育という基準を超えたレベルにある」という認識のもと、細かな履修科目の要件を定めないこととした。医学部医学科の場合には、岡山大学の事例を参照したとのことだった。医学部看護学科に関しては、以前から指定校生に対する推薦入試（面接のみ）を実施しており、元々その面接内容が非常に細かく生徒を審査する内容であったため、IB 入試に関しても面接のみを実施している。

出願（入学）要件の見直しなどは行なわれているのか？行われている場合、どの程度の間隔で見直しを行なっているのか？

医学部医学科の場合、IB の全体成績に関わる基準を、歩留まり率や入学後の成績などを基に、毎年調整している（39/全体成績に関わる基準なし/40 と設定してきた経緯あり）とのことだった。

IB サーティフィケートの取扱いについて（ディプロマのみを認めているのか？サーティフィケートも認めているのか？）

サーティフィケートは認めていないとの回答を得た。

IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取扱いについて

IB デュアルランゲージプログラムを特別に扱うことはないとのことだった。

出願（入学）要件を設定する上で、意識したこと、直面した／している課題はあるか？

IB 機構から、英語スコア（TOEFL）の提出の必要性について意見が寄せられることがあるが、デュアルランゲージではなくフルに英語で DP を受けた生徒であっても、生徒ごとに TOEFL や IELTS の点数に差があるため、変わらず TOEFL などの英語スコアは選抜のために必要という考えのもとで提出を課しているという回答を得た。

出願時期について、どのように設定しているか？DP 最終試験と重ならないよう意識しているか？

／出願時期について、海外からの志願者（帰国生または留学生）のニーズには対応しているか？
海外からの出願は想定されているか？

他の特別選抜と揃えた時期設定になっている。学内リソースを踏まえると、IB入試のみ異なる時期に実施することは難しいという回答を得た。

入学後の IB 修了生の学習パフォーマンスなどは追跡されているのか？／入試区分ごとの追跡調査（IR 部門との連携を通じて）の有無について

入試区分ごとの成績（GPA、単位数、必修の英語科目の単位取得状況）の追跡をし、それらを会議体でのエビデンスとして利用しているとのことだった。必修の英語科目では TOEFL のペーパー版で 500 点以上取得しなければ単位が取れず 3 年生に進級できないというものだが、IB 生は入学した時点で必修の英語の授業が免除になるようなレベルのため、英語科目に関しては苦労している様子があまり見受けられないということだった。

IB の入学者の選抜と入学後のサポートなどを担当する方がいるか？／入学前教育、カウンセリング等を含む特別なケアの有無について

6 年前に学内の IB 修了生を対象としたインタビュー調査を悉皆で実施した。また、2 年前より IB 修了生である入学者同士での交流会を実施している（3 月）。具体的には、「IB で何が面白かったか」に関するプレゼンテーションを披露しあう機会を設けている。

IB 入試に関連して、他大学と連携することなどはあるのか？ある場合、どのような連携を行なっているのか？

広報上の連携をしているとのことだった。具体的には、他大学との合同大学説明会（IB 修了生向け）をハイブリッド形式で実施したことがあるという回答を得た。

その他、IB 入試に関連して何か課題に感じていることはあるか？

個人的には大きな課題は感じていないとのことだった。理由としては、IB がよく練られたカリキュラム設計で成績評価も体系化されているのと、IB 自体が国を挙げて積極的に導入を進めているカリキュラムであることから既存の入試に組み込みやすく、学内での説得がしやすいためであるという回答を得た。

しかし、TOEFL などの外部の英語試験への単位認定は認められているのにも関わらず、IB の HL 科目への単位認定は認められていないということについては、疑問に思うとのことだった。それにより、D 大学で実際的な問題が生じることはないが、留学生マーケットを狙っている大学は困る（結果的に単位認定を認めている米国やカナダの大学などに逃げられる）のではないかという回答を得た。

（江幡）

3) 考察（中間報告）

以上、4 大学における IB を活用した入試の現状と課題についてインタビュー調査を通じて明らかにした。そこでいくつかの項目について比較分析を行ない、その特徴を示したい。

【表 4】IB を活用した入試の現状と課題に関する比較分析表

<p>選抜方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・書類・面接・小論文 (1/4 大学) ・IB の最終スコアと、志望理由書、課題論文 (EE) の日本語の要約とオリジナルのコピー、TOK・CAS に関する活動レポートを全体的に評価 (1/4 大学) ・理系の学部では筆記試験や口頭試問 (面接) (1/4 大学) ・教育系の学部では筆記試験とプレゼンテーション (1/4 大学) ・筆記試験 (小論文もしくは総合問題) + 面接 (1/4 大学) ・医学部看護学科: 面接 (1/4 大学) ・医学部医学科では、第 1 次選考 (書類審査: IB 資格の成績+英語スコア) + 第 2 次選考 (面接) + 第 3 次選考 (IB 資格の成績と面接の成績の合計点に基づく合格者の決定) (1/4 大学)
<p>定員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・若干名 (4/4 大学) ・医学部のみ 3 名 (1/4 大学) ・医学部のみ 5 名 (1/4 大学)
<p>どこの国、地域の修了生が多いのか?</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中国の他のアジア諸国、オーストラリア、ニュージーランド、北米、中南米、ヨーロッパなど (A 国立大学) ・ドイツ、シンガポール、イギリス、オランダ、ベトナム、中国 (B 私立大学) ・イタリアやシンガポール、イギリス (C 国立大学) ・国内の一条校出身者からの出願が多い (7~8 割程度) (D 公立大学)
<p>選抜方法に係る課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・確定スコアと見込みスコアの比較 (2/4 大学) ・国際バカロレア特別入試の広報 (1/4 大学) ・全ての学部学科において、教員ではなく、アドミッションオフィサーが入試を集約して選考していく体制を構築したい (1/4 大学) ・IB 入試の出願時期と実施時期 (IB の 5 月試験と 11 月試験によって出願までの期間の違いが生じてしまう) (1/4 大学) ・IB スコアにおける「リマーク」の取り扱いが難しい (1/4 大学) ・IB スコアの見込み点で合格し、その後最終試験でディプロマが取得できなかったとしても入学を認めている (1/4 大学)
<p>出願 (入学) 要件 (entry requirement) の設定</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・HL 科目指定 (例: 歴史か地理か哲学、いずれか一つを HL で履修していること) (1/4 大学) ・国際系 36 点以上 (1/4 大学) ・薬学部 32 点以上 (1/4 大学) ・医学系 38 点以上 (2/4 大学) ・日本語 A、もしくは B で一定の基準点 (1/4 大学) ・理系の学部では、必ず数学 HL で 5 点以上 (1/4 大学) ・IB ディプロマ取得済み (または見込み) (2/4 大学)

IB サートیفিকেートの取り扱い	<ul style="list-style-type: none"> ・理工学部の英語コースのみサートیفিকেートも認めている（ただし、SAT のスコアも求める）（1/4 大学） ・IB ディプロマ取得者のみ出願可（3/4 大学）
IB デュアルランゲージプログラムの出願資格としての取り扱い	<ul style="list-style-type: none"> ・英語ディプロマ・プログラム（DP）との区別はしていない（4/4 大学）
出願（入学）要件を設定する上での課題	<ul style="list-style-type: none"> ・通っていた高校で学んでいた範囲は科目によって異なるため、入学前時点での丁寧な支援が必要（1/4 大学） ・最終試験のスコアの正確性に疑問を感じている（1/4 大学） ・デュアルランゲージとフルに英語で DP を受けた生徒であっても、TOEFL などの英語スコアの提出を求めている（1/4 大学）
出願時期	<ul style="list-style-type: none"> ・二期に分けて募集（2/4 大学） ・IB 入試の実施時期が 10 月や 11 月のため、IB の最終試験が 11 月に実施されるような学校の生徒には負担となっている可能性がある（11 月出願の場合）（1/4 大学）
その他、IB 入試に関連する課題	<ul style="list-style-type: none"> ・IB の最終スコアと本人の学力の差の見極め（1/4 大学） ・インターナショナルスクールと一条校での IB 教育の違いがあるのかどうか（1/4 大学） ・教員不足（1/4 大学） ・各大学によって出願の時期や選考方法が異なっていたり、現在でも IB 入試に関する情報収集がしにくい（1/4 大学） ・入学者が増えない中で IB 入試を継続していくモチベーションについて（1/4 大学） ・IB 入試のみ異なる時期に実施することは難しい（1/4 大学） ・IB 科目への単位認定について（1/4 大学）

まず、選抜方法については、IB の最終スコアに加えて、筆記試験、小論文や面接を課している大学が多く、IB の最終スコアのみでの選抜を行なっている大学は、現時点では確認することができなかった。

次に、定員については、いずれの大学においても「若干名」としている一方で、医学部については、明確に何名といった定員枠を設けている大学が多いことが明らかになった。

次に、どの国や地域からの修了生が多いのかについては、特定の国や地域はなく、いずれの大学においても世界各国からの志願者があり、IB を活用した入試を実施することで、国内のみならず、世界各国からの志願者の増加に一定程度の効果が見込まれることが分かった。

次に、選抜方法に係る課題については、確定スコアと見込みスコアの比較やどの程度の違いがあるのかについて課題と感じているといった回答が目立った。一方で、IB 教育自体を評価し、最終的に IB ディプロマを取得できなかったとしても、不合格にはせず、受け入れる大学もあり、IB 教育のアウトプットよりもプロセス（学習内容・学習経験）を重視している大学もあった。また、

出願時期の設定については、5月か11月のIB試験のどちらを受けたかによって、出願期間に差が生じてしまうといった課題があった。これについては、いくつかの大学では、2期に分けて募集を行なう等の工夫が見られた。

出願（入学）要件（entry requirement）の設定については、IBディプロマ取得済み（または見込み）としている大学が4大学中2大学あり、最終試験の結果ではなく、IB教育自体の内容や学習経験を評価していることが分かった。一方で、HL科目指定や特定の分野や科目で一定程度の成績を求める大学が多かった。特に、医学系の学部では、38以上と高い基準を設ける傾向が確認できた。

次に、IBサーティフィケートの取り扱いについては、そのみでの出願を認めている大学は、現時点ではなく、SATの成績を追加で求める大学やそもそもサーティフィケートは認めていない大学が多い状況が確認できた。そのため、日本の大学への進学を希望するIB生については、IBディプロマプログラムを修了することが求められていることが分かった。一方で、IBデュアルランゲージプログラムの出願資格としての取り扱いについては、いずれの大学も、英語のDPとの区別はしておらず、同等の資格として認めていることが明らかになった。

次に、出願（入学）要件を設定する上での課題については、最終スコアと実際の学力との違いや通っていた高校による学力差や学習経験の差等をどのように理解し、埋めていくのかが課題であることが明らかになった。

また、出願時期については、国内、海外からの出願を想定した場合に、2期に分けて募集を行なう大学がある一方で、それを行なっていない大学においても、出願時期による公平性の確保は課題と感じていることが明らかになった。

そして、その他、IB入試に関連する課題については、これまでの回答にも出てきたように、IBの最終スコアと本人の学力の差の見極め、確定スコアと見込みスコアの差をどのように考慮するか、インターナショナルスクールと一条校でのIB教育の違い、教員不足、各大学によって出願の時期や選考方法が異なっていたり、現在でもIB入試に関する情報収集がしにくい等の課題に加え、なかなか国内におけるIBを活用した出願者が増えない点から、広報やIB入試を継続していくモチベーションの維持等、コストベネフィットを課題としてあげている大学もあり、今後国内におけるIBを活用した入試を拡大していく上で、これらの点を検討していくことは、国内の大学に共通する喫緊の課題であるといえる。

4) 今後の見通し

今後の研究の計画については、以下のとおりである。

①国内外の大学でのIBを活用した入試に関する実態調査（先行研究及びデータ収集・整理）

2024年度は、2023年度に引き続き、国内外の大学におけるIBを活用した入試に関する先行研究の検討や情報収集・整理を進める。また、「国際バカロレアを活用した大学入学選抜例一覧」の情報をレビューし、必要に応じてアップデート作業を行う。また、情報収集・整理と並行して、インタビュー調査へ向けた調査項目の準備を進める。また、可能な範囲で予備調査を実施し、それに基づいて調査項目の再検討を行う。

②IB を活用した入学者選抜の形態・方法・要件・出願時期・入試時期・国内・国外別の出願状況に関する調査（国内における IB を活用した入試を実施する大学への訪問調査）

2025 年度は、IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。基本的には訪問調査を実施する予定であるが、適宜オンライン会議システムも活用し、オンラインでのインタビュー調査も実施する。インタビュー項目については今後検討予定であるが、基本的には IB を活用した入試の実施形態、選抜方法、選抜区分、入学要件、出願期間・入試スケジュール、国内外別の出願状況等について聞き取り調査を行う。

2026 年度は、引き続き、IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。また、前年度の調査から明らかになった項目について整理するとともに、今日の日本における IB を活用した入試の現状と課題について、学会・シンポジウムでの報告や論文としての発信を積極的に進める。

③国内外の大学での IB を活用した入試に関する実態調査（国内における IB を活用した入試を実施する大学への訪問調査及び全体総括）

2027 年度は、引き続き、IB を活用した入試を実施している大学へのインタビュー調査を実施する。また、2023 年度から進めてきた調査研究（今日の日本における IB を活用した入試の現状と課題）について、全体総括を行い、学会・シンポジウムでの報告や論文としての発信を積極的に進める。

（花井）

2-4. 基礎調査（学校調査）

1) 調査の概要

本調査の目的は、日本の IB 校（一条校）に対する実態調査を実施し、基礎的データを収集・蓄積することである。調査対象は、ディプロマプログラム（DP）、中等教育プログラム（MYP）、初等教育プログラム（PYP）を実施する一条校とする。

文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事業において、DP 校を対象とした実態調査が 2019 年に実施されており、「デュアルランゲージ・ディプロマ・プログラムに関するアンケート調査結果」として公表されている。この先行調査を参照しつつ、調査項目を精査し、質問紙を開発した。また、これまでは DP 校のみが対象であったが、IB 校の拡大状況を踏まえ、調査対象を MYP 校、PYP 校の一条校に拡大した。

本調査において、全国の IB 校に依頼した質問紙調査の調査票は、巻末資料を参照のこと。なお、DP 校から英語による調査票送付の依頼があり、文部科学省において作成された下訳を確認・調整したものを用いた。

2) 進捗報告

12 月 27 日（火）調査票を国内の IB 校へ郵送

PYP : 16 校／幼稚園 : 7 園、小学校 : 9 校、MYP : 17 校、DP : 42 校

1 月 26 日（金）調査票の回答期限

※最終的な回収数は以下の通り。

PYP : 16 校／幼稚園 : 7 園、小学校 : 9 校、MYP : 17 校、DP : 33 校（未回収 : 9 校）

3) 今後の見通し

本調査を通じて回収した調査票のデータ入力及び集計を進める。また、今後の生徒調査、教員調査、大学調査を進める上で必要となる基礎的分析を行う。2024 年度は、IB 校の調査票への回答の負担軽減に向けて、調査の実施時期、並びに回答方法（オンライン調査への変更）について検討を進める。

2-5. 基礎調査（大学調査）

1) 調査の概要

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために、日本国内において IB を活用した入試を実施している大学に対して、入試区分、募集人員、対象学部、対象者、出願資格や求める IB スコア基準等を含む、基礎情報を収集、整理することである。

本調査では、「(1) 公開情報」と「(2) 非公開情報」の2種類の基礎情報を収集する。(1) 公開情報については、文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに情報を掲載する（国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧／<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/admissions-policy/>）。また、(2) 非公開情報の回答データは、統計的に処理し、大学名や個人を特定できるかたちで公表はせず、今後の大学を対象とした調査実施の際の基礎データとし、報告書及び学会発表・論文等において公表する可能性があるものとして、収集・分析を行なう。

2023年度は、株式会社トモノカイに IB を活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査の実施を依頼した。なお、質問紙調査の項目については、これまで文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムにおいて、同様の調査を進めてきた株式会社アオバインターナショナルエデュケーションシステムズによる調査項目をベースとして、以下の項目を追加した。

◆出願資格：IB 科目修了証明書（サーティフィケート）のみでの出願の可否

諸外国では、IB サर्टIFICATEのみでの出願も認めているケースが多いなかで、日本国内における IB を活用した入試での出願の可否に関する情報が未だ不明であるため。

本調査において、全国の大学に依頼した質問紙調査の調査票は、巻末資料を参照のこと。

2) 進捗報告

1月23日（火）調査票を国内の大学へ送付開始（85大学）

1月30日（火）調査票の送付完了

2月16日（金）調査票の回答期限

※3月29日現在、78大学からの回答を回収済み（未回収：7大学）。

本調査の分析結果については、まだ十分に行っていないものの、現時点では以下の点が明らかになった。これまで IB を活用した入試を実施していた大学で、すでに IB 入試を廃止した大学を1大学確認することができた。今後、こちらの大学がなぜ IB を活用した入試を廃止するに至ったのかについて、大学調査班のインタビュー調査によって明らかにしたいと考えている。

3) 今後の見通し

今後の見通しとしては、まず本調査を通じて回収した調査票の収集、分析を進め、既存の国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧（IB 教育推進コンソーシアムウェブサイト）の更新作業を進める。

また、今回の調査で明らかになった、IB入試を廃止した日本工業大学に対して、大学調査の一環として、なぜ廃止に至ったのか、課題は何だったのか等について、インタビュー調査を通じて明らかにする。それにより、IB入試を継続的に実施していく上で求められるIB入試の実施体制、選抜方法等について一つの示唆を得たいと考えている。

巻末資料

(1) 基礎調査(学校調査) 調査依頼書・調査票

- ①基礎調査(学校調査) 調査依頼書
- ②基礎調査(幼稚園_初等教育プログラム) 調査票
- ③基礎調査(小学校_初等教育プログラム) 調査票
- ④基礎調査(中等教育プログラム) 調査票
- ⑤基礎調査(ディプロマプログラム) 調査票
- ⑥School Survey (Diploma Programme) Questionnaire

(2) 基礎調査(学校調査) 集計表

- ①基礎調査(幼稚園_初等教育プログラム) 集計表
- ②基礎調査(小学校_初等教育プログラム) 集計表
- ③基礎調査(中等教育プログラム) 集計表
- ④基礎調査(ディプロマプログラム) 集計表

(3) 基礎調査(大学調査) 調査依頼書・調査票

- ①基礎調査(大学調査) 調査依頼書
- ②基礎調査(IBを活用した大学入学者選抜) 調査票
- ③国際バカロレア(IB)を活用した入試概要

(4) 生徒調査質問紙

- ①生徒調査質問紙(高校2年生対象)

2023年12月26日

国際バカロレア（IB）認定校
学校長 殿

文部科学省・国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業
国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究
研究代表者 藤田晃之
(筑波大学人間系・教授)

国際バカロレア（IB）の各プログラムの実施状況に関する基礎調査について（依頼）

平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

筑波大学では、文部科学省・国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業の一環として、国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究に取り組んでおります。この度、日本国内の国際バカロレア（IB）認定校の各プログラムの実施状況を把握するための基礎調査を行うこととなりました。

ご多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、下記要領によりご回答いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

記

1. 調査対象

日本国内の国際バカロレア（IB）認定校のうち、学校教育法第一条に定める学校（ディプロマプログラム、中等教育プログラム、初等教育プログラム（小学校及び幼稚園）を含む）。

2. 回答方法

①郵 送：同封の返信用封筒により、ご返送ください。

②F A X：筑波大学人間系・IB教育調査室（029-853-4832）宛にご送信ください。

③メール：下記 URL または QR コードから調査票のデータをダウンロードして回答をご入力いただき、メール添付の上、ibkk@un.tsukuba.ac.jp までご送信ください。

◆URL: <https://x.gd/f0oui> QR コード:



3. 回答期限

2024年1月26日（金）

4. その他

- ・本調査結果は、文部科学省における今後の国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に活用させていただくとともに、報告書及び学会発表・論文等において公表する予定です。
- ・回答いただいたデータは統計的に処理し、学校名や個人を特定できるかたちで公表しません。
- ・収集したメールアドレスは厳重に管理し、本調査の目的以外では使用しません。
- ・本調査についてご質問等ございましたら、事務連絡先までご連絡ください。

以上

<本件担当>

文部科学省大臣官房国際課外国人教育政策推進係 栗田彩可、高野雄太郎
TEL: 03-6734-3675

<事務連絡先>

〒305-8572 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学人間系・IB教育調査室 菊地かおり
TEL: 029-853-6738 FAX: 029-853-4832 E-mail: ibkk@un.tsukuba.ac.jp

国際バカロレア・初等教育プログラム（IBPYP）の 実施状況に関する基礎調査

管理職及び PYP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。ご多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

<回答者プロフィール>

幼稚園名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問 1. 〔IBPYP の指導言語〕 貴園は国際バカロレア・初等教育プログラム（IBPYP）をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

1. すべての園児が全科目日本語で履修（外国語科目を除く）
2. すべての園児が全科目英語で履修（外国語科目を除く）
3. すべての園児が日本語と英語の開講科目を履修
（英語開講科目： _____）
4. その他（具体的に： _____）

問 2. 〔IBPYP の実施形態〕 IBPYP をどの年齢で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。また、実施形態について補足がありましたら、下記の空欄にご記入ください。

1. 3 歳児
2. 4 歳児
3. 5 歳児
4. その他（具体的に： _____）

補足：

--

【幼稚園／初等教育プログラム調査票】

問3. [IBPYP 園児数] 貴園の IBPYP の園児数を教えてください。

※2023 年 12 月 1 日時点での人数を記入してください。

※例を参照の上、年齢を含めて記入をお願いいたします。

学年	例： 3 歳児				
人数	20 名	名	名	名	名

問4. [IBPYP 担当教員] 貴園の IBPYP を担当する教員について教えてください。

※2023 年 12 月 1 日時点での人数を記入してください（非常勤の教員を含む）。

※「IB 教員資格（IBEC）」…高等教育機関における単位修得により取得可能な資格（ワークショップの受講とは異なります）。

(1) 全教員数	[] 名
(2) IBPYP 担当教員数	[] 名
(3) (2) のうち、次の免許や資格等を取得している教員数	a) 日本の教員免許 [] 名 b) 海外の教員免許 [] 名 c) 特別免許状 [] 名
(4) (2) のうち、次の学位を取得している教員数	a) 修士の学位 [] 名 b) 博士の学位 [] 名
(5) (2) のうち、IB 教員資格（IBEC: IB educator certificate）を取得している教員数	[] 名
(6) (2) のうち、教員の主な指導言語	a) 日本語のみ [] 名 b) 英語のみ [] 名 c) 日本語と英語の両方 [] 名

問5. [IBPYP 生の卒園後のプログラム] 貴園の IBPYP 生の卒園後のプログラム選択について教えてください。

※**2022 年度に卒園した園児の状況**をご記入ください。

※初等教育プログラム（PYP）については、系列校や他校であることを問いません。

(1) IBPYP を履修して卒園した園児数	[] 名
(2) (1) のうち、小学校の初等教育プログラム（PYP）へ進んだ園児数	[] 名

問6. 貴園における IBPYP の実施状況について、補足や追加情報があれば教えてください。

問7. 日本における IBPYP の現状や展望に関してご意見等ございましたら、自由にご記入ください。

問8. 今後、IBPYP の教員等を対象とした調査を予定しております。調査へのご協力について、貴校のご意向をお聞かせ願えますと幸いです（なお、基礎調査は毎年実施いたします）。

1. 今後の調査に協力できます
2. 調査内容を確認してから判断します
3. 調査への協力は難しいです
(差し支えなければ理由をお聞かせください：)
4. その他（具体的に：)

質問は以上です。ありがとうございました。

国際バカロレア・初等教育プログラム（IBPYP）の 実施状況に関する基礎調査

管理職及び PYP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。ご多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

<回答者プロフィール>

学校名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問 1. 〔IBPYP の指導言語〕 貴校は国際バカロレア・初等教育プログラム（IBPYP）をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

1. すべての児童が全科目日本語で履修（外国語科目を除く）
2. すべての児童が全科目英語で履修（外国語科目を除く）
3. すべての児童が日本語と英語の開講科目を履修
（英語開講科目： _____）
4. その他（具体的に： _____）

問 2. 〔IBPYP の実施形態〕 IBPYP をどの学年で実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。また、実施形態について補足がありましたら、下記の空欄にご記入ください。

1. 小学1年生から小学5年生まで
2. 小学1年生から小学6年生まで
3. その他（具体的に： _____）

補足：

--

【小学校／初等教育プログラム調査票】

問3. [IBPYP 児童数] 貴校の IBPYP の児童数を教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください。

※例を参照の上、学年を含めて記入をお願いいたします。

学年	例： 1年生						
人数	30名	名	名	名	名	名	名

問4. [IBPYP 担当教員] 貴校の IBPYP を担当する教員について教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください（非常勤の教員を含む）。

※「IB 教員資格 (IBEC)」…高等教育機関における単位修得により取得可能な資格（ワークショップの受講とは異なります）。

(1) 全教員数	[] 名
(2) IBPYP 担当教員数	[] 名
(3) (2) のうち、次の免許や資格等を取得している教員数	a) 日本の教員免許 [] 名 b) 海外の教員免許 [] 名 c) 特別免許状 [] 名
(4) (2) のうち、次の学位を取得している教員数	a) 修士の学位 [] 名 b) 博士の学位 [] 名
(5) (2) のうち、IB 教員資格 (IBEC: IB educator certificate) を取得している教員数	[] 名
(6) (2) のうち、教員の主な指導言語	a) 日本語のみ [] 名 b) 英語のみ [] 名 c) 日本語と英語の両方 [] 名

問5. [IBPYP 生の修了後のプログラム] 貴校の IBPYP 生の修了後のプログラム選択について教えてください。

※**2022年度に卒業した児童の状況**をご記入ください（小学5年生で PYP を修了している場合も、卒業学年の状況をお答えください）。

※中等教育プログラム (MYP) については、系列校や他校であることを問いません。

(1) IBPYP を修了した児童数	[] 名
(2) (1) のうち、中等教育プログラム (MYP) へ進んだ児童数	[] 名

問6. 貴校における IBPYP の実施状況について、補足や追加情報があれば教えてください。

問7. 日本における IBPYP の現状や展望に関してご意見等ございましたら、自由にご記入ください。

問8. 今後、IBPYP の教員等を対象とした調査を予定しております。調査へのご協力について、貴校のご意向をお聞かせ願えますと幸いです（なお、基礎調査は毎年実施いたします）。

1. 今後の調査に協力できます
2. 調査内容を確認してから判断します
3. 調査への協力は難しいです
(差し支えなければ理由をお聞かせください：)
4. その他（具体的に：)

質問は以上です。ありがとうございました。

国際バカロレア・中等教育プログラム（IBMYP）の 実施状況に関する基礎調査

管理職及び MYP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア（IB）推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。ご多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

<回答者プロフィール>

学校名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問 1. [IBMYP の指導言語] 貴校は国際バカロレア・中等教育プログラム（IBMYP）をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

1. すべての生徒が全科目日本語で履修（外国語科目を除く）
2. すべての生徒が全科目英語で履修（外国語科目を除く）
3. すべての生徒が日本語と英語の開講科目を履修
（英語開講科目： _____）
4. その他（具体的に： _____）

問 2. [IBMYP の実施形態] IBMYP をどの学年で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。また、実施形態について補足がありましたら、下記の空欄にご記入ください。

1. 小学6年生
2. 中学1年生
3. 中学2年生
4. 中学3年生
5. 高校1年生

補足：

--

【中等教育プログラム調査票】

問3. [IBMYP 生徒数] 貴校の IBMYP の生徒数を教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください。
 ※例を参照の上、学年を含めて記入をお願いいたします。

学年	例： 中学1年生					
人数	30名	名	名	名	名	名

問4. [IBMYP 担当教員] 貴校の IBMYP を担当する教員について教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください（非常勤の教員を含む）。
 ※「IB 教員資格（IBEC）」…高等教育機関における単位修得により取得可能な資格（ワークショップの受講とは異なります）。

(1) 全教員数	[] 名
(2) IBYPY 担当教員数	[] 名
(3) (2) のうち、次の免許や資格等を取得している教員数	a) 日本の教員免許 [] 名 b) 海外の教員免許 [] 名 c) 特別免許状 [] 名
(4) (2) のうち、次の学位を取得している教員数	a) 修士の学位 [] 名 b) 博士の学位 [] 名
(5) (2) のうち、IB 教員資格（IBEC: IB educator certificate）を取得している教員数	[] 名
(6) (2) のうち、教員の主な指導言語	a) 日本語のみ [] 名 b) 英語のみ [] 名 c) 日本語と英語の両方 [] 名

問5. 【中等教育学校あるいは中高一貫校でディプロマプログラム（DP）の認定を受けている場合のみご回答ください】

[IBMYP 生の修了後のプログラム] 貴校の IBMYP 生の修了後のプログラム選択について教えてください。

※2022年度に高校1年生だった生徒の状況をご記入ください。

(1) IBMYP を修了した生徒数	[] 名
(2) (1) のうち、ディプロマプログラム（DP）へ進んだ生徒数	[] 名

問6. 貴校における IBMYP の実施状況について、補足や追加情報があれば教えてください。

問7. 日本における IBMYP の現状や展望に関してご意見等ございましたら、自由にご記入ください。

問8. 今後、IBMYP の教員等を対象とした調査を予定しております。調査へのご協力について、貴校のご意向をお聞かせ願えますと幸いです（なお、基礎調査は毎年実施いたします）。

1. 今後の調査に協力できます
2. 調査内容を確認してから判断します
3. 調査への協力は難しいです
(差し支えなければ理由をお聞かせください：)
4. その他（具体的に：)

質問は以上です。ありがとうございました。

国際バカロレア・ディプロマプログラム (IBDP) の 実施状況に関する基礎調査

管理職及び DP コーディネーター等の責任者のみなさま

本調査は、今後の日本における国際バカロレア (IB) 推進のための施策立案・改善等に向けた調査の基礎資料とするために実施いたします。ご多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

<回答者プロフィール>

学校名	
回答者役職	
回答者名	
連絡先	電話番号： メールアドレス：

問 1. [IBDP の指導言語と履修形態] 貴校は国際バカロレア・ディプロマプログラム (IBDP) をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

1. すべての生徒が全科目英語 (またはフランス語、スペイン語) で履修 (言語 A または言語 B を除く)
2. すべての生徒が一部科目を日本語で、その他の科目を英語で履修 (日本語 DP)
3. 生徒が「全科目英語」または「一部科目を日本語」を選択して履修
4. その他 (具体的に：)

問 2. [IBDP 開始以前のプログラム] 貴校の高校 1 年生時点でのプログラムの実施状況を教えてください。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

1. 中等教育プログラム (MYP) を実施している
2. DP の準備段階となるカリキュラム (プレ DP) を実施している
(開始月：)
3. IB のプログラムは実施していない

問 3. [IBDP 履修にかかる基準] 貴校の生徒が DP を履修する際の基準や条件はありますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

1. DP 履修にかかる基準や条件はなく、希望者全員が履修できる
2. DP 履修にかかる基準や条件を設けている
(具体的に：)

【ディプロマプログラム調査票】

- | | |
|------------------|-------------|
| ④教員免許・IB 教員資格 | ⑤学校の指導方針の理解 |
| ⑥教科の専門性 | ⑦学校文化への適応 |
| ⑧学級運営・生徒理解 | ⑨IB に関する経験 |
| ⑩その他（具体的に：_____） | |

1 位 []	2 位 []	3 位 []
--------------------	--------------------	--------------------

(9) IBDP 教員を確保する際に、以下の①～⑩の困難をどの程度感じていますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	ほ ぼ な い	あ ま り な い	ど ち ら と も い え な い	や や あ る	よ く あ る
①日本語の運用能力-----	1	2	3	4	5
②英語の運用能力-----	1	2	3	4	5
③日本語・英語バイリンガルでの運用能力---	1	2	3	4	5
④教員免許・IB 教員資格-----	1	2	3	4	5
⑤学校の指導方針の理解-----	1	2	3	4	5
⑥教科の専門性-----	1	2	3	4	5
⑦学校文化への適応-----	1	2	3	4	5
⑧学級運営・生徒理解-----	1	2	3	4	5
⑨IB に関する経験-----	1	2	3	4	5
⑩教員の給与-----	1	2	3	4	5

問 6. [IBDP 開講科目と履修者数] 貴校の IBDP 科目の開講状況と履修者数を教えてください。

※2023 年 12 月 1 日時点での**高校 3 年生の人数**を記入してください (IB 科目履修生数を含む)。

※2023 年度に IBDP コースに高校 3 年生が在籍していない場合、高校 2 年生の履修者数を記入してください。高校 1 年生しか在籍していない場合や IBDP 履修生徒がまだいない場合は、空欄で構いません。

※下記以外の科目を開講している場合は、その他の欄にご回答ください。

(1) グループ 1

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合のみ ○をつけてください	SL (名)	HL (名)
English A: Literature			
日本語 A : 文学			
English A: Language & Literature			
日本語 A : 言語と文学			

【ディプロマプログラム調査票】

その他 ()			
その他 ()			

(2) グループ 2

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合のみ ○をつけてください	SL (名)	HL (名)
English B			
日本語 B			
Language ab initio / 初級外国語 〔言語: 〕			
その他 ()			
その他 ()			

(3) グループ 3

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合のみ ○をつけてください	SL (名)	HL (名)
Economics			
経済			
Geography			
地理			
History			
歴史			
その他 ()			
その他 ()			

(4) グループ 4

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合のみ ○をつけてください	SL (名)	HL (名)
Biology			
生物			
Chemistry			
化学			
Physics			

【ディプロマプログラム調査票】

物理			
その他 ()			
その他 ()			

(5) グループ 5

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合のみ ○をつけてください	SL (名)	HL (名)
Mathematics: Analysis and Approaches			
数学：解析とアプローチ			
Mathematics: Applications and Interpretation			
数学：応用と解釈			
その他 ()			
その他 ()			

(6) グループ 6

科目名 ※日英の科目名は指導言語に対応	開講の有無 ※開講の場合のみ ○をつけてください	SL (名)	HL (名)
Music			
音楽			
Visual Arts			
美術			
その他 ()			
その他 ()			

問 7. [IBDP 生の進路] 貴校の IBDP 修了生の進路について教えてください。

※2022 年度の実績をご記入ください（確定している情報のみで構いません）。

※合格実績ではなく進学実績をご記入ください。

(1) IBDP 修了生数	[] 名
(2) (1) のうち、ディプロマ資格 取得者数	[] 名
(3) (1) のうち、大学進学者の 内訳	a) 国内大学 [] 名 b) 海外大学 [] 名

問 8. 貴校における IBDP の実施状況について、補足や追加情報があれば教えてください。

問 9. 日本における IBDP の現状や展望に関してご意見等ございましたら、自由にご記入ください。

問 10. 今後、IBDP の教員及び生徒を対象とした調査を予定しております。調査へのご協力について、貴校のご意向をお聞かせ願えますと幸いです（なお、基礎調査は毎年実施いたします）。

1. 今後の調査に協力できます
2. 調査内容を確認してから判断します
3. 調査への協力は難しいです
(差し支えなければ理由をお聞かせください：)
4. その他（具体的に：)

質問は以上です。ありがとうございました。

**School Survey on Implementation of
the International Baccalaureate Diploma Programme (IBDP)**

To all managers, DP coordinators and other staff in charge

The purpose of this survey is to collect basic data for future surveys aimed at formulating and improving measures to promote the International Baccalaureate (IB) in Japan. We would very much appreciate your cooperation in answering this survey.

<Profile of Respondent>

Name of school	
Position of respondent	
Name of respondent	
Contact details	Telephone number: Email address:

Question 1. [IBDP language of instruction and curriculum] How does your school teach the International Baccalaureate Diploma Programme (IBDP)? Please circle the number that most applies to you.

1. All students take all subjects in English (or French or Spanish) (excluding Language A or Language B).
2. All students take some subjects in Japanese and other subjects in English (Japanese DP).
3. Students choose to take “all subjects in English” or “some subjects in Japanese”.
4. Others (Specifics: _____)

Question 2. [Programmes before starting the IBDP] How does your school teach the programme for first-year senior high school students? Please circle the number that most applies to you.

1. Teaches the Middle Years Programme (MYP)
2. Teaches a curriculum (pre-DP) that is the preparatory stage for the DP (Starting month: _____)
3. Does not teach an IB programme

Question 3. [Criteria to study the IBDP] Are there any criteria or requirements for students at your school to be able to study the DP? Please circle the number that most applies to you.

1. There are no criteria or requirements to study the DP, and anyone who wishes to study the DP is able to do so.

2. Our school has established criteria or requirements for taking the DP course.
(Specifics: _____)

Question 4. [Number of IBDP students] Please give the number of IBDP students at your school.

* Please enter the number of students as of December 1, 2023.

* If there are no IBDP students, please enter “0 (zero)”. If the number of students, such as first-year senior high school students, has not yet been finalized, please enter the planned number of students or “Undetermined”.

* “Number of students studying IB subjects” ... Please enter the number of students on courses other than IBDP courses (not aiming to obtain the IB Diploma) who are studying IB subjects.

	First year senior high school student (Enrolled in 2023)	Second year senior high school student (Enrolled in 2022)	Third year senior high school student (Enrolled in 2021)
(1) Total number of students in the grade			
(2) Number of IBDP students			
(3) Number of students studying IB subjects			

Question 5. [Teachers in charge of the IBDP] Please tell us about the teachers teaching the IBDP at your school.

* Please enter the number of teachers as of December 1, 2023 (including part-time teachers).

* “Number of teachers teaching the IBDP” ... Please enter the number of teachers teaching each subject in Groups 1 to 6 and Theory of Knowledge (TOK).

* “International Baccalaureate Educator Certificate (IBEC)” ... A qualification that can be obtained by earning credits at an institution of higher education (different from participating in a workshop).

(1) Total number of teachers	[]
(2) Number of teachers teaching the IBDP	[]
(3) Of (2), the number of teachers who also concurrently teach courses other than the IBDP	[]
(4) Of (2), the number of teachers who have obtained the licenses or qualifications, etc. on the right	a) Japanese teaching license []
	b) Overseas teaching license []
	c) Special license []

(3) Group 3

Subject name * Course names in Japanese and English correspond to the language of instruction.	Whether or not classes are being offered * Please tick only if classes are being offered	SL (no.)	HL (no.)
Economics			
経済			
Geography			
地理			
History			
歴史			
Others ()			
Others ()			

(4) Group 4

Subject name * Course names in Japanese and English correspond to the language of instruction.	Whether or not classes are being offered * Please tick only if classes are being offered	SL (no.)	HL (no.)
Biology			
生物			
Chemistry			
化学			
Physics			
物理			
Others ()			
Others ()			

(5) Group 5

Subject name * Course names in Japanese and English correspond to the language of instruction.	Whether or not classes are being offered	SL (no.)	HL (no.)
--	---	----------	----------

【Questionnaire: Diploma Programme】

	* Please tick only if classes are being offered		
Mathematics: Analysis and Approaches			
数学：解析とアプローチ			
Mathematics: Applications and Interpretation			
数学：応用と解釈			
Others ()			
Others ()			

(6) Group 6

Subject name * Course names in Japanese and English correspond to the language of instruction.	Whether or not classes are being offered * Please tick only if classes are being offered	SL (no.)	HL (no.)
Music			
音楽			
Visual Arts			
美術			
Others ()			
Others ()			

Question 7. [Career path for IBDP students] Please tell us about the career path for your school's IBDP graduates.

* Please enter **the results for AY2022** (only verified information).

* Please enter the number of admissions not the number who passed.

(1) Number of IBDP graduates	[]
(2) Of (1), the number of people who obtained the IB Diploma	[]
(3) Of (1), breakdown of those who go on to university	a) Universities in Japan [] b) Overseas universities []

(8) Does your school have an alumni association? Please circle the appropriate number.

- 1. Yes
- 2. No
- 3. Others (Specifics: _____)

Question 8. Please let us know if you have any supplementary or additional information regarding the status of teaching of the IBDP at your school.

Question 9. If you have any opinions regarding the current status or prospects of IBDP in Japan, please feel free to write them down.

Question 10. In the future, we plan to conduct a survey for IBDP teachers and students. We would appreciate it if you could let us know whether your school would be willing to cooperate with the survey. (Note: the school survey will be conducted every year.)

- 1. We will be able to cooperate with future surveys.
- 2. We will decide depending on the content of the survey.
- 3. It would be difficult for us to cooperate with the survey.
(If possible, please give the reason: _____)
- 4. Others (Specifics: _____)

Thank you very much. We greatly appreciate your cooperation.

国際バカロレア・幼稚園／初等教育プログラム (IBPYP) の 実施状況に関する基礎調査

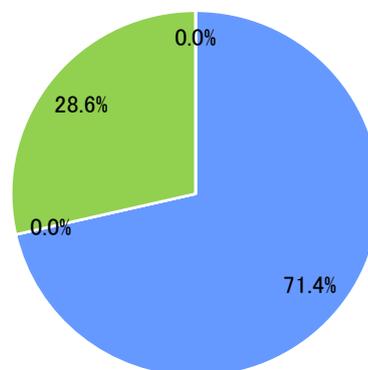
回答数

7

問1. [IBPYPの指導言語]貴園は国際バカロレア・初等教育プログラム (IBPYP) をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

選択肢	件数	割合
1. すべての園児が全科目日本語で履修(外国語科目を除く)	5	71.4%
2. すべての園児が全科目英語で履修(外国語科目を除く)	0	0.0%
3. すべての園児が日本語と英語の開講科目を履修	2	28.6%
4. その他	0	0.0%
合計	7	100.0%

- 1. すべての園児が全科目日本語で履修(外国語科目を除く)
- 2. すべての園児が全科目英語で履修(外国語科目を除く)
- 3. すべての園児が日本語と英語の開講科目を履修
- 4. その他



問2. [IBPYPの実施形態]IBPYPをどの年齢で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。また、実施形態について補足がありましたら、下記の空欄にご記入ください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
1. 3歳児	7	100.0%	100.0%					
2. 4歳児	6	85.7%	85.7%					
3. 5歳児	6	85.7%	85.7%					
4. その他	0	0.0%	0.0%					
回答数	7	-						

問3. [IBPYP園児数]貴園のIBPYPの園児数を教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください。

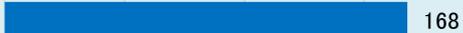
※例を参照の上、年齢を含めて記入をお願いいたします。

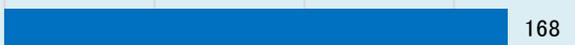
設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)			
			0	200	400	600
3歳児	70	487	487			
4歳児	72	502	502			
5歳児	81	565	565			

問4. [IBPYP担当教員]貴園のIBPYPを担当する教員について教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください(非常勤の教員を含む)。

※「IB教員資格 (IBEC)」…高等教育機関における単位修得により取得可能な資格(ワークショップの受講とは異なります)。

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)					
			0	50	100	150	200	250
(1) 全教員数	34	238						238
(2) IBPYP担当教員数	24	168						168

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)					
			0	50	100	150	200	
(2) IBPYP担当教員数	24	168						168
(3) 免許や資格等を取 得している 教員数	a) 日本の教員免許	24						165
	b) 海外の教員免許	2						8
	c) 特別免許状	0						1
(4) 学位を取 得してい る教員数	a) 修士の学位	2						7
	b) 博士の学位	0						0
(5) IB教員資格 (IBEC: IB educator certificate) を取得している教員数	11	79						79
(6) 教員の 主な指導言 語	a) 日本語のみ	23						136
	b) 英語のみ	4						14
	c) 日本語と英語の両方	2						7

問5. [IBPYP生の卒園後のプログラム]貴園のIBPYP生の卒園後のプログラム選択について教えてください。

※2022年度に卒園した園児の状況をご記入ください。

※初等教育プログラム(PYP)については、系列校や他校であることを問いません。

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)				
			0	200	400	600	800
(1) IBPYPを履修して卒園した園児数	82	572					
(2) 小学校の初等教育プログラム(PYP)へ進んだ園児数	14	96					

国際バカロレア・小学校／初等教育プログラム (IBPYP) の 実施状況に関する基礎調査

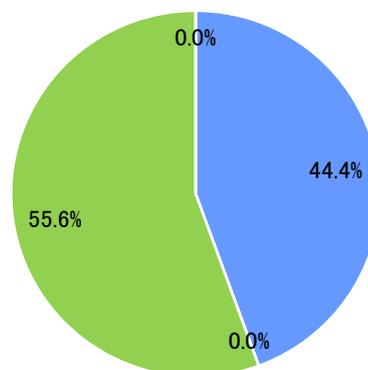
回答数

9

問1. [IBPYPの指導言語] 貴校は国際バカロレア・初等教育プログラム (IBPYP) をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

選択肢	件数	割合
1. すべての児童が全科目日本語で履修(外国語科目を除く)	4	44.4%
2. すべての児童が全科目英語で履修(外国語科目を除く)	0	0.0%
3. すべての児童が日本語と英語の開講科目を履修	5	55.6%
4. その他	0	0.0%
合計	9	100.0%

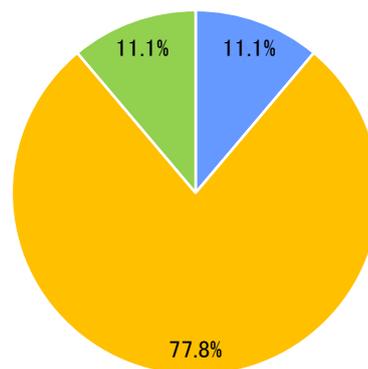
- 1. すべての児童が全科目日本語で履修(外国語科目を除く)
- 2. すべての児童が全科目英語で履修(外国語科目を除く)
- 3. すべての児童が日本語と英語の開講科目を履修
- 4. その他



問2. [IBPYPの実施形態] IBPYPをどの学年で実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。また、実施形態について補足がありましたら、下記の空欄にご記入ください。

選択肢	件数	割合
1. 小学1年生から小学5年生まで	1	11.1%
2. 小学1年生から小学6年生まで	7	77.8%
3. その他	1	11.1%
合計	9	100.0%

- 1. 小学1年生から小学5年生まで
- 2. 小学1年生から小学6年生まで
- 3. その他



問3. [IBPYP児童数]貴校のIBPYPの児童数を教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください。
 ※例を参照の上、学年を含めて記入をお願いいたします。

設問	平均人数	合計人数	0	200	400	合計人数 600	(名) 800	
1年生	62	558						558
2年生	65	582						582
3年生	61	547						547
4年生	60	543						543
5年生	56	451						451
6年生	56	389						389
その他	121	121						121

※その他: 幼稚園年中、幼稚園年長

問4. [IBPYP担当教員]貴校のIBPYPを担当する教員について教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください(非常勤の教員を含む)。
 ※「IB教員資格(IBECE)」…高等教育機関における単位修得により取得可能な資格(ワークショップの受講とは異なります)。

設問	平均人数	合計人数	0	100	200	合計人数 300		
(1) 全教員数	29	258						258
(2) IBPYP担当教員数	22	198						198

設問	平均人数	合計人数	0	50	100	150	合計人数 200	(名) 250		
(2) IBPYP担当教員数	22	198								198
(3) 免許や資格等 取得している 教員数	a) 日本の教員免許	22								194
	b) 海外の教員免許	4								28
	c) 特別免許状	1								6
(4) 学位を 取得している 教員数	a) 修士の学位	6								46
	b) 博士の学位	1								4
(5) IB教員資格(IBECE: IB educator certificate)を取得している教員数	7	65								65
(6) 教員の 主な指導言語	a) 日本語のみ	20								177
	b) 英語のみ	5								29
	c) 日本語と英語の両方	4								31

問5. [IBPYP生の修了後のプログラム]貴校のIBPYP生の修了後のプログラム選択について教えてください。

※2022年度に卒業した児童の状況をご記入ください(小学5年生でPYPを修了している場合も、卒業学年の状況をお答えください)。

※中等教育プログラム(MYP)については、系列校や他校であることを問いません。

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)					
			0	200	400	600	800	
(1) IBPYPを修了した児童数	78	703						703
(2) 中等教育プログラム(MYP)へ進んだ児童数	30	267						267

国際バカロレア・中等教育プログラム (IBMYP) の 実施状況に関する基礎調査

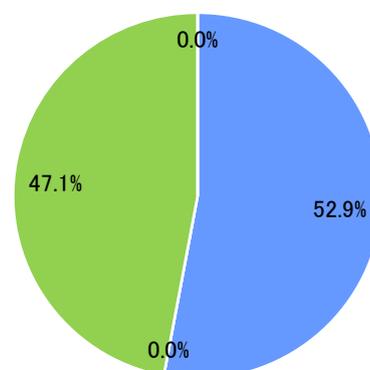
回答数

17

問1. [IBMYPの指導言語] 貴校は国際バカロレア・中等教育プログラム (IBMYP) をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

選択肢	件数	割合
1. すべての生徒が全科目日本語で履修(外国語科目を除く)	9	52.9%
2. すべての生徒が全科目英語で履修(外国語科目を除く)	0	0.0%
3. すべての生徒が日本語と英語の開講科目を履修	8	47.1%
4. その他	0	0.0%
合計	17	100.0%

- 1. すべての生徒が全科目日本語で履修(外国語科目を除く)
- 2. すべての生徒が全科目英語で履修(外国語科目を除く)
- 3. すべての生徒が日本語と英語の開講科目を履修
- 4. その他



問2. [IBMYPの実施形態] IBMYPをどの学年で実施していますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。また、実施形態について補足がありましたら、下記の空欄にご記入ください。

選択肢	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%
1. 小学6年生	3	17.6%	17.6%					
2. 中学1年生	17	100.0%	100.0%					
3. 中学2年生	17	100.0%	100.0%					
4. 中学3年生	16	94.1%	94.1%					
5. 高校1年生	12	70.6%	70.6%					
回答数	17	-						

問3. [IBMYP生徒数]貴校のIBMYPの生徒数を教えてください。

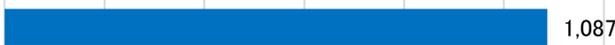
※2023年12月1日時点での人数を記入してください。
 ※例を参照の上、学年を含めて記入をお願いいたします。

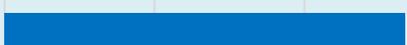
設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)				
			0	500	1,000	1,500	2,000
小学6年生	74	221					
中学1年生	83	1,328					
中学2年生	89	1,507					
中学3年生	75	1,201					
高校1年生	40	363					
その他	194	582					

※その他: 1、4、4年、中等4、N/A

問4. [IBMYP担当教員]貴校のIBMYPを担当する教員について教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください(非常勤の教員を含む)。
 ※「IB教員資格 (IBEC)」…高等教育機関における単位修得により取得可能な資格(ワークショップの受講とは異なります)。

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)					
			0	200	400	600	800	1,000
(1) 全教員数	68	1,087						
(2) IBMYP担当教員数	33	534						

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)			
			0	200	400	600
(2) IBMYP担当教員数	33	534				
(3) 免許や資格等を取 得している 教員数	a) 日本の教員免許	37				
	b) 海外の教員免許	5				
	c) 特別免許状	6				
(4) 学位を 取得してい る教員数	a) 修士の学位	6				
	b) 博士の学位	1				
(5) IB教員資格 (IBEC: IB educator certificate) を取得している教員数	2	27				
(6) 教員の 主な指導言 語	a) 日本語のみ	32				
	b) 英語のみ	8				
	c) 日本語と英語の両方	6				

問5.【中等教育学校あるいは中高一貫校でディプロマプログラム(DP)の認定を受けている場合のみ
ご回答ください】

[IBMYP生の修了後のプログラム]貴校のIBMYP生の修了後のプログラム選択について教えてください。

※2022年度に高校1年生だった生徒の状況をご記入ください。

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)						
			0	200	400	600	800	1,000	
(1) IBMYPを修了した生徒数	72	936							936
(2) ディプロマプログラム(DP)へ進んだ生徒数	20	266							266

国際バカロレア・ディプロマプログラム (IBDP) の実施状況に関する基礎調査

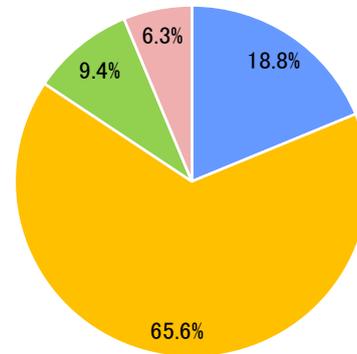
回答数

33

問1. [IBDPの指導言語と履修形態] 貴校は国際バカロレア・ディプロマプログラム (IBDP) をどのように実施していますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

選択肢	件数	割合
1. すべての生徒が全科目英語 (またはフランス語、スペイン語) で履修 (言語Aまたは言語Bを除く)	6	18.8%
2. すべての生徒が一部科目を日本語で、その他の科目を英語で履修 (日本語DP)	21	65.6%
3. 生徒が「全科目英語」または「一部科目を日本語」を選択して履修	3	9.4%
4. その他	2	6.3%
合計	32	100.0%

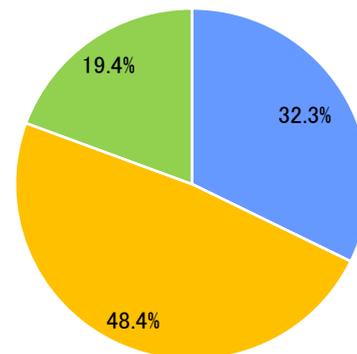
- 1. すべての生徒が全科目英語で履修
- 2. すべての生徒が一部科目を日本語で、その他の科目を英語で履修
- 3. 生徒が「全科目英語」または「一部科目を日本語」を選択して履修
- 4. その他



問2. [IBDP開始以前のプログラム] 貴校の高校1年生時点でのプログラムの実施状況を教えてください。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

選択肢	件数	割合
1. 中等教育プログラム (MYP) を実施している	10	32.3%
2. DPの準備段階となるカリキュラム (プレDP) を実施している	15	48.4%
3. IBのプログラムは実施していない	6	19.4%
合計	31	100.0%

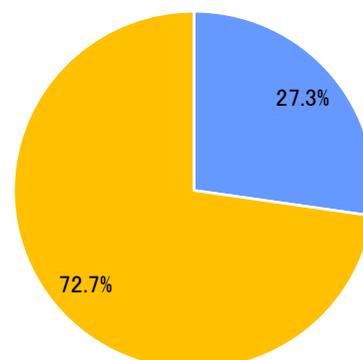
- 1. 中等教育プログラム (MYP) を実施している
- 2. DPの準備段階となるカリキュラム (プレDP) を実施している
- 3. IBのプログラムは実施していない



問3. [IBDP履修にかかる基準] 貴校の生徒がDPを履修する際の基準や条件はありますか。もっともあてはまる番号に○をつけてください。

選択肢	件数	割合
1. DP履修にかかる基準や条件はなく、希望者全員が履修できる	9	27.3%
2. DP履修にかかる基準や条件を設けている	24	72.7%
合計	33	100.0%

- 1. DP履修にかかる基準や条件はなく、希望者全員が履修できる
- 2. DP履修にかかる基準や条件を設けている



問4. [IBDP生徒数]貴校のIBDPの生徒数を教えてください。

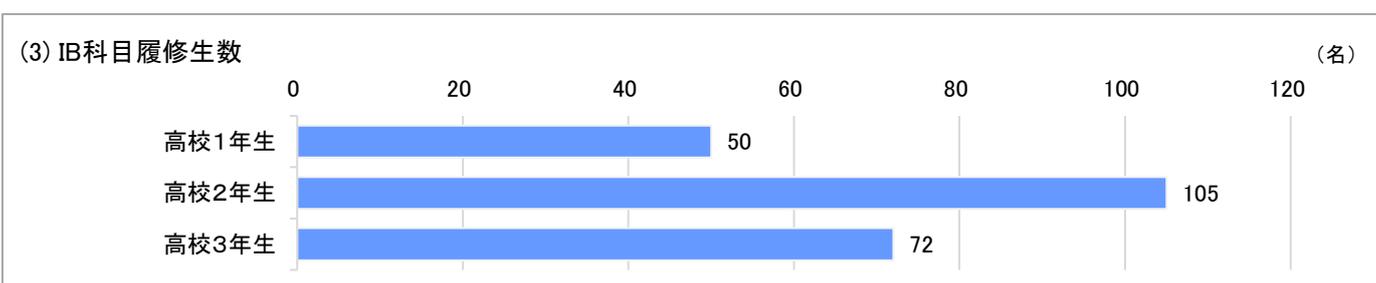
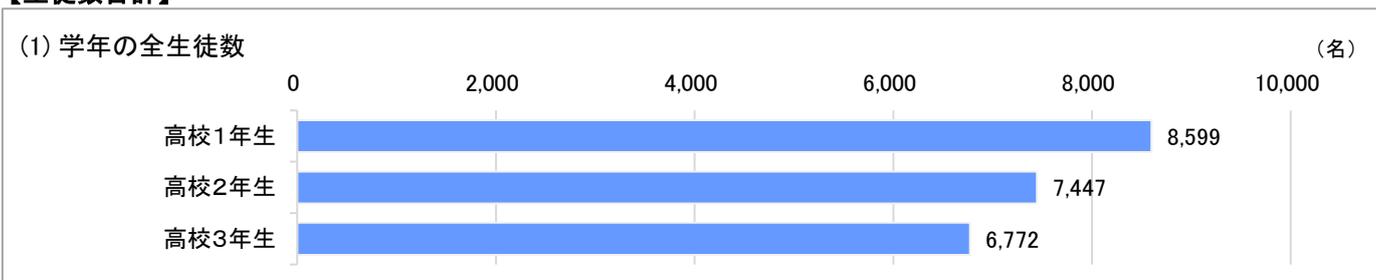
※2023年12月1日時点での人数を記入してください。

※IBDPの履修生がいない場合は「0(ゼロ)」、高校1年生等について履修生数が決まっていない場合は、予定されている定員数または「未定」とご記入ください。

※「IB科目履修生数」…IBDPコース以外に在籍している(ディプロマ資格取得を目指していない)生徒で、IB科目を履修している生徒の人数をご記入ください。

設問	平均人数			合計人数		
	高校1年生	高校2年生	高校3年生	高校1年生	高校2年生	高校3年生
(1) 学年の全生徒数	269	233	218	8,599	7,447	6,772
(2) IBDP生数	16	15	11	467	461	350
(3) IB科目履修生数	2	4	2	50	105	72

【生徒数合計】



問5. [IBDP担当教員]貴校のIBDPを担当する教員について教えてください。

※2023年12月1日時点での人数を記入してください(非常勤の教員を含む)。

※「IBDP担当教員数」…グループ1～6の各科目及び知の理論(TOK)を担当する教員の数をご記入ください。

※「IB教員資格(IBECE)」…高等教育機関における単位修得により取得可能な資格(ワークショップの受講とは異なります)。

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)				
			0	1,000	2,000	3,000	4,000
(1) 全教員数	92	2,936					
(2) IBDP担当教員数	18	552					

設問	平均人数	合計人数	合計人数 (名)				
			0	200	400	600	
(2) IBDP担当教員数	18	552					
(3) IBDP以外のコース等との兼務をしている教員数	15	464					
(4) 免許や資格等を取 得している 教員数	a) 日本の教員免許	14					
	b) 海外の教員免許	4					
	c) 特別免許状	3					
(5) 学位を取 得している 教員数	a) 修士の学位	6					
	b) 博士の学位	1					
(6) IB教員資格(IBECE: IB educator certificate)を取得している教員数	5	145					
(7) 教員の 主な指導言 語	a) 日本語のみ	11					
	b) 英語のみ	6					
	c) 日本語と英語の両方	2					

(8) 貴校においてIBDP教員に求める資質・能力で重視しているポイントを、以下の①～⑩のうち優先順位の高いものから3つ挙げてください。

選択肢	件数				割合				■ 1位 ■ 2位 ■ 3位 0% 25% 50% 75% 100%					
	1位	2位	3位	合計	1位	2位	3位	合計						
①日本語の運用能力	1	0	4	5	3.0%	0.0%	12.1%	15.2%						
②英語の運用能力	0	2	0	2	0.0%	6.1%	0.0%	6.1%						
③日本語・英語バイリンガルでの運用能力	0	1	2	3	0.0%	3.0%	6.1%	9.1%						
④教員免許・IB教員資格	6	4	4	14	18.2%	12.1%	12.1%	42.4%						
⑤学校の指導方針の理解	3	8	5	16	9.1%	24.2%	15.2%	48.5%						
⑥教科の専門性	16	9	4	29	48.5%	27.3%	12.1%	87.9%						
⑦学校文化への適応	5	5	3	13	15.2%	15.2%	9.1%	39.4%						
⑧学級運営・生徒理解	1	1	5	7	3.0%	3.0%	15.2%	21.2%						
⑨IBに関する経験	0	3	4	7	0.0%	9.1%	12.1%	21.2%						
⑩その他	1	0	0	1	3.0%	0.0%	0.0%	3.0%						
回答数	33				-									

(9) IBDP教員を確保する際に、以下の①～⑩の困難をどの程度感じていますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

設問	平均点	（① + ②） 否定回答率	（④ + ⑤） 肯定回答率	選択肢	1 ほぼない	2 あまりない	3 どちらともいえない	4 ややある	5 よくある	合計	割合				
											0%	25%	50%	75%	100%
①日本語の運用能力	2.12	69.7%	21.2%	件数	16	7	3	4	3	33					
				割合	48.5%	21.2%	9.1%	12.1%	9.1%	100.0%					
②英語の運用能力	2.58	48.5%	30.3%	件数	10	6	7	8	2	33					
				割合	30.3%	18.2%	21.2%	24.2%	6.1%	100.0%					
③日本語・英語バイリンガルでの運用能力	2.91	39.4%	42.4%	件数	10	3	6	8	6	33					
				割合	30.3%	9.1%	18.2%	24.2%	18.2%	100.0%					
④教員免許・IB教員資格	2.82	39.4%	33.3%	件数	8	5	9	7	4	33					
				割合	24.2%	15.2%	27.3%	21.2%	12.1%	100.0%					
⑤学校の指導方針の理解	2.94	39.4%	42.4%	件数	6	7	6	11	3	33					
				割合	18.2%	21.2%	18.2%	33.3%	9.1%	100.0%					
⑥教科の専門性	3.58	18.2%	75.8%	件数	2	4	2	23	2	33					
				割合	6.1%	12.1%	6.1%	69.7%	6.1%	100.0%					
⑦学校文化への適応	3.21	27.3%	48.5%	件数	5	4	8	11	5	33					
				割合	15.2%	12.1%	24.2%	33.3%	15.2%	100.0%					
⑧学級運営・生徒理解	2.61	48.5%	21.2%	件数	5	11	10	6	1	33					
				割合	15.2%	33.3%	30.3%	18.2%	3.0%	100.0%					
⑨IBに関する経験	3.24	33.3%	54.5%	件数	6	5	4	11	7	33					
				割合	18.2%	15.2%	12.1%	33.3%	21.2%	100.0%					
⑩教員の給与	3.61	15.2%	60.6%	件数	4	1	8	11	9	33					
				割合	12.1%	3.0%	24.2%	33.3%	27.3%	100.0%					

平均点：「1.ほぼない」を1点、「2.あまりない」を2点、「3.どちらともいえない」を3点、「4.ややある」を4点、「5.よくある」を5点として加重平均

問6. [IBDP開講科目と履修者数]貴校のIBDP科目の開講状況と履修者数を教えてください。

※2023年12月1日時点での高校3年生の人数を記入してください(IB科目履修生数を含む)。

※2023年度にIBDPコースに高校3年生が在籍していない場合、高校2年生の履修者数を記入してください。高校1年生しか在籍していない場合やIBDP履修生数がまだいない場合は、空欄で構いません。

※下記以外の科目を開講している場合は、その他の欄にご回答ください。

(1) グループ1

【開講】

科目名	件数	割合	割合							
			0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	
English A: Literature	0	0.0%	0.0%							
日本語 A: 文学	13	39.4%		39.4%						
English A: Language & Literature	12	36.4%		36.4%						
日本語 A: 言語と文学	17	51.5%		51.5%						
その他	4	12.1%		12.1%						
回答数	33	-								

【履修者数】

科目名	平均人数		履修者数合計		履修者数合計 (名)				
	SL	HL	SL	HL	0	50	100	150	200
English A: Literature	-	-	0	0	0				
日本語 A: 文学	4	16	40	177	40			177	
English A: Language & Literature	5	4	44	48	44		48		
日本語 A: 言語と文学	10	8	92	132	92		132		
その他	1	0	5	0	5				

(2) グループ2

【開講】

科目名	件数	割合	0%	20%	40%	60%	80%	100%	
English B	28	84.8%							84.8%
日本語 B	9	27.3%							27.3%
Language ab initio／初級 外国語	1	3.0%							3.0%
その他	0	0.0%	0.0%						0.0%
回答数	33	-							

【履修者数】

科目名	平均人数		履修者数合計		履修者数合計 (名)				
	SL	HL	SL	HL	0	100	200	300	400
English B	4	13	74	316					
日本語 B	3	3	13	17					
Language ab initio／初級 外国語	3	-	3	0					
その他	-	-	0	0					

(3) グループ3

【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%
Economics	5	15.2%								
経済	1	3.0%								
Geography	3	9.1%								
地理	3	9.1%								
History	7	21.2%								
歴史	21	63.6%								
その他	4	12.1%								
回答数	33	-								

【履修者数】

科目名	平均人数		履修者数合計		履修者数合計 (名)			
	SL	HL	SL	HL	0	50	100	150
Economics	7	12	29	46				
経済	3	-	3	0				
Geography	11	9	33	27				
地理	10	8	29	25				
History	5	17	24	84				
歴史	4	7	41	106				
その他	7	3	27	3				

(4) グループ4

【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
Biology	10	30.3%						
生物	15	45.5%						
Chemistry	11	33.3%						
化学	15	45.5%						
Physics	9	27.3%						
物理	8	24.2%						
その他	4	12.1%						
回答数	33	-						

【履修者数】

科目名	平均人数		履修者数合計		履修者数合計 (名)			
	SL	HL	SL	HL	0	50	100	150
Biology	7	4	41	30				
生物	6	5	63	39				
Chemistry	15	6	103	47				
化学	8	6	92	60				
Physics	5	4	28	24				
物理	1	6	3	41				
その他	12	0	49	0				

(5) グループ5

【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%
Mathematics:Analysis and Approaches	17	51.5%							
数学:解析とアプローチ	11	33.3%							
Mathematics:Applications and Interpretation	14	42.4%							
数学:応用と解釈	1	3.0%							
その他	0	0.0%							
回答数	33	-							

【履修者数】

科目名	平均人数		履修者数合計		履修者数合計 (名)				
	SL	HL	SL	HL	0	50	100	150	200
Mathematics:Analysis and Approaches	11	7	127	99					
数学:解析とアプローチ	5	5	39	24					
Mathematics:Applications and Interpretation	11	5	156	35					
数学:応用と解釈	5	-	5	0					
その他	-	-	0	0					

(6) グループ6

【開講】

科目名	件数	割合	0%	10%	20%	30%	40%	50%
Music	5	15.2%						
音楽	3	9.1%						
Visual Arts	13	39.4%						
美術	3	9.1%						
その他	8	24.2%						
回答数	33	-						

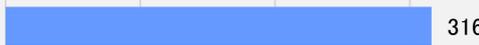
【履修者数】

科目名	平均人数		履修者数合計		履修者数合計 (名)		
	SL	HL	SL	HL	0	50	100
Music	4	3	14	5			
音楽	4	0	13	0			
Visual Arts	7	3	72	26			
美術	9	-	26	0			
その他	13	2	100	8			

問7. [IBDP生の進路]貴校のIBDP修了生の進路について教えてください。

※2022年度の実績をご記入ください(確定している情報のみで構いません)。

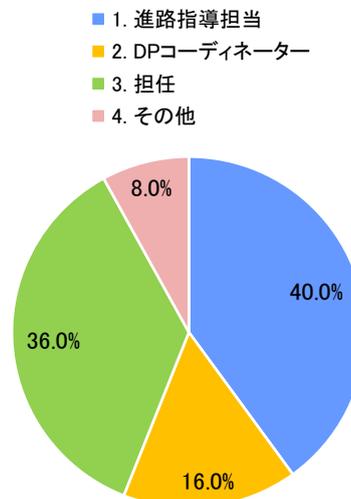
※合格実績ではなく進学実績をご記入ください。

設問		平均人数	合計人数	0	100	200	合計人数 300	(名) 400
(1) IBDP修了生数		11	316					
(2)ディプロマ資格取得者数		10	275					
(3)大学進学者の内訳	a) 国内大学	7	184					
	b) 海外大学	4	94					
(4)次の選抜方法により進路決定した生徒	a) 特別入試 (IB特別入試)	3	53					
	b) 特別入試 (総合型選抜)	4	91					
	c) 特別入試 (学校推薦型選抜)	2	51					
	d) 一般選抜 (大学入学共通テストの一部利用を含む)	1	9					
(5)次に該当する生徒	a) 奨学金 (給付) を得た生徒	2	21					
	b) 奨学金 (貸与) を得た生徒	0	1					
	c) 授業料免除の対象になった生徒	0	1					

(1)のうち

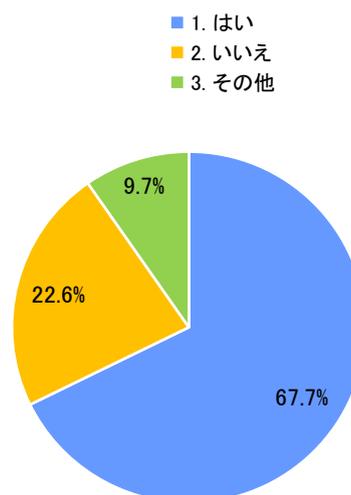
(6) 進路指導を主に担っている担当者

選択肢	件数	割合
1. 進路指導担当	10	40.0%
2. DPコーディネーター	4	16.0%
3. 担任	9	36.0%
4. その他	2	8.0%
合計	25	100.0%



(8) 貴校において卒業生の同窓会組織はありますか。あてはまる番号に○をつけてください。

選択肢	件数	割合
1. はい	21	67.7%
2. いいえ	7	22.6%
3. その他	3	9.7%
合計	31	100.0%



2024年1月22日

大学入試ご担当者様

文部科学省・国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業
国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究
研究代表者 藤田晃之
(筑波大学人間系・教授)

国際バカロレア（IB）を活用した大学入学者選抜の 実施状況に関する基礎調査について（依頼）

平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

筑波大学では、文部科学省・国際バカロレアに関する国内推進体制の整備事業の一環として、国際バカロレアの教育効果等に関する調査研究に取り組んでおります。この度、日本国内の大学における国際バカロレア（IB）を活用した大学入学者選抜の実施状況を把握するための基礎調査を行うこととなりました。

ご多用のところ大変お手数をおかけしまして恐縮ですが、下記要領によりご回答いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

記

1. 調査対象

国際バカロレア（IB）を活用した入学者選抜を実施している国内大学

2. 調査内容

IB認定校等での情報活用を想定し、2部構成となっています。

①国際バカロレア（IB）を活用した大学入学者選抜の実施状況に関する基礎調査

- 公開情報…文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページ（※）の「国際バカロレアを活用した大学入学者選抜例一覧」に掲載します。
- 非公開情報…回答いただいたデータは統計的に処理し、大学名や個人を特定できるかたちで公表しません。今後の大学を対象とした調査実施の際の基礎データとさせていただき、報告書及び学会発表・論文等において公表する可能性があります。

②国際バカロレア（IB）を活用した入試概要

文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページ（※）に大学ごとに掲載します。

※IBを活用した入試制度 (<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/admissions-policy/>)

3. 回答方法及び回答期限

①②のファイルにご記入の上、**2月16日（金）まで**にメール添付にて、本件委託先（株式会社トモノカイ/t-nakahara@tomonokai-corp.com）までご送信ください。本調査についてご質問等ございましたら、事務連絡先または本件委託先までご連絡ください。

以上

<本件担当>

文部科学省大臣官房国際課外国人教育政策推進係

栗田彩可、高野雄太郎（TEL: 03-6734-3675）

<事務連絡先>

筑波大学人間系・IB教育調査室 菊地かおり（E-mail: ibkk@un.tsukuba.ac.jp）

<本件委託先>

株式会社トモノカイ Personal Education 部門（担当：中原・岩本）

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 2-12-24 東建・長井ビル 5階

TEL: 03-5766-2006 E-mail: t-nakahara@tomonokai-corp.com

【記入例】

(1) 公開情報 ※文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムのホームページに掲載します。

国公私	国立／公立／私立	国立
大学名（所在地）	所在地は都道府県で記入	◎◎大学（東京都）
入試名称		全選抜方式（一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜）
試験導入年度		2017 年度
対象学部	①全学部 ②一部の学部	②一部の学部
学部名	②の場合	経営学部、法学部
募集人員		一般選抜：春期 140 名、秋期 70 名 総合型選抜、学校推薦型選抜：若干名
対象者	①IB ディプロマ資格者のみ ②IB ディプロマ資格者以外も含む	②IB ディプロマ資格者以外も含む
出願資格	IB 科目修了証明書（サーティフィケート）のみでの出願の可否	可
求める IB スコア基準	※募集要項等で公表している場合、ご記入ください。	なし
主な出願書類		EE の写し、自己推薦書
関連 URL	募集要項掲載ページ URL	

(2) 非公開情報 ※可能な範囲でご記入ください。

a) IB 生の評価ポイント 選抜にあたり IB 生が優位的に評価される点があれば教えてください。		IB スコアにより加点。 EE、TOK、CAS に関する提出資料の審査により加点。
b) 直近の入試実績	実施年度	2023 年度
	志願者数	18 名
	合格者数	10 名
	入学者数	8 名
c) 今後の方向性について 貴学での国際バカロレア（IB）を活用した入試の今後の方向性について、もっともあてはまる記号を選んでください。		ア 全学部へ拡大する予定 イ 未導入の学部にも拡大する予定 ウ 募集人数を増やす予定 エ 現状を維持する予定 オ 見直し又は削減予定 カ その他（具体的に：)
d) その他 ご意見やご質問がありましたらご記入ください。		

〇〇大学 <国際バカロレア（IB）を活用した入試概要>

※2023 年度中に実施済み、あるいは実施予定の入学者選抜の情報を掲載しています。

※掲載内容はあくまでもポイントをまとめたものになります。出願前には必ず募集要項をご確認ください。

入試名称：		
大学の IB 入試のアピールポイント（入試課記入）：		
	4 月入学	1 0 月入学
学部名		
対象者		
出願資格 ※IB スコア を含む		
募集人数		
選抜方法 及び 出願書類		
出願期間		
選考日程		
合格発表		
備考		
入試要項		
問合せ先		

【記入例】

〇〇大学 <国際バカロレア（IB）を活用した入試概要>

※2023 年度中に実施済み、あるいは実施予定の入学者選抜の情報を掲載しています。

※掲載内容はあくまでもポイントをまとめたものになります。出願前には必ず募集要項をご確認ください。

入試名称：		
大学の IB 入試のアピールポイント（入試課記入）：		
	4 月入学	1 0 月入学
学部名	国際関係学部	国際関係学部
対象者	IB ディプロマ資格者以外も含む	IB ディプロマ資格者のみ
出願資格 ※IB スコア を含む	IB ディプロマ資格を取得見込みの者。 ディプロマ・プログラムの最終試験の成績が〇 点以上の者。	IB ディプロマ資格を取得している者。 ディプロマ・プログラムの最終試験の成績が〇 点以上の者。
募集人数	1～2 名	若干名
選抜方法 及び 出願書類	書類審査及び面接	面接のみ
出願期間	9 月上旬	1 月上旬
選考日程	10 月上旬	2 月上旬
合格発表	11 月上旬	3 月上旬
備考		
入試要項	〇〇大学入学試験要項（募集要項の URL 等記載等）	
問合せ先	〇〇大学学務部入試課 Tel: Fax: E-mail:	

【高校2年生対象】

高校での学習・経験に関する調査

※質問1.(2) 学籍番号(生徒番号)の記入については、先生の指示に従ってください。

※質問文でとくに指定がない場合は、選択肢の中からもっともあてはまる番号に○をつけてください。

質問1. あなた自身のことをうかがいます。

(1) ____年 ____組 ____番

(2) 学籍番号(生徒番号) _____

(※(1)、(2)の欄は今後、追跡調査を行う際に照合するためだけに使用します。)

(3) 性別 ()

(4) あなたは現在、ディプロマプログラム(DP)を履修していますか。

1. 履修している

2. 履修していない

(5) 以下の項目の中で、あなたが経験した学校や教育プログラムはありますか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。

1. インターナショナル・スクール(日本)

2. インターナショナル・スクール(海外)

3. 海外の現地校

4. 海外の日本人学校

5. 国際バカロレア初等教育プログラム(PYP)

6. 国際バカロレア中等教育プログラム(MYP)

7. あてはまるものはない

質問2. あなたは以下の**態度や状況**にどのくらいあてはまると思われますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

まったくあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	とてもあてはまる
-------------	------------	-----------	---------	----------

(1) 知らないことがあると、よく質問をしたり調べたりする ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(2) 自分はどのような人間かを考えることがよくある ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(3) 社会のことをよく勉強している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(4) 自然や環境のことをよく勉強している ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(5) 学校とは関係なく自分から勉強する習慣ができています ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(6) 問題が起きたときにはその理由を理解しようとする ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(7) 問題を解決するために自分ができることを考える ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(8) 課題があれば自分で解決しようとする ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(9) 他の人の気持ちや考えを十分に理解することができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

(10) 自分の気持ちや考えを十分に表現することができる ----- 1 --- 2 --- 3 --- 4 --- 5

	まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえない	やや あて はまる	とても あて はまる
(11) 何かをするときに周囲の人を誘うことがよくある -----	1	2	3	4	5
(12) 他の人たちと協力してチームで行動することができる -----	1	2	3	4	5
(13) チームの中で自分の果たすべき役割を率先して行っている -----	1	2	3	4	5
(14) 自ら目標を設定し、その達成のために行動することができている --	1	2	3	4	5
(15) グループの目的を示し、グループの人たちを 効果的に行動させることができる -----	1	2	3	4	5
(16) 学校や社会の規則を守っている -----	1	2	3	4	5
(17) 自分の良心や従うべきルールを持ち、 それに基づいて行動している -----	1	2	3	4	5
(18) 自分の行動に責任をとることができる -----	1	2	3	4	5
(19) 他の人は自分と違う意見を持っていることを理解している -----	1	2	3	4	5
(20) 世の中には色々な価値観や文化があることを理解している -----	1	2	3	4	5
(21) 困っている人を助けることがよくある -----	1	2	3	4	5
(22) いつも新しいことに挑戦している -----	1	2	3	4	5
(23) いつも何か新しいことを生み出そうとしている -----	1	2	3	4	5
(24) 自分の能力を有効に使うことができている -----	1	2	3	4	5
(25) 健康的な生活に注意している -----	1	2	3	4	5
(26) 体力・身体づくりをしている -----	1	2	3	4	5
(27) 自分で計画を立て、それに従って物事を進めることができている --	1	2	3	4	5
(28) 社会や学校の一員としての義務と権利を認識している -----	1	2	3	4	5
(29) 社会、学校などの周囲をよくするために積極的に関わっている ----	1	2	3	4	5
(30) 自分の周りに変化が起きてもうまく適応できている -----	1	2	3	4	5
(31) ストレスを感じるがあっても リラックスして前向きにとらえることができている -----	1	2	3	4	5
(32) 自分の態度や行動の正しさを確認することがよくある -----	1	2	3	4	5
(33) 自分の態度や行動をよりよいものにしようと努力している -----	1	2	3	4	5

質問3. これまでに受けた高校の授業の中で、あなたは次のような活動をした経験がありますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく ない	あまり ない	ときどき	よく ある	いつも
(1) 先生の話から知識を得る	1	2	3	4	5
(2) 教科書を中心に学ぶ	1	2	3	4	5
(3) 探究したい課題について問いを立てる	1	2	3	4	5
(4) プロジェクト(探究・調査・実験・発表会)の計画を立てる	1	2	3	4	5
(5) 図書室を利用して資料や文献を探す	1	2	3	4	5
(6) 情報を得るとき、情報源の信頼性を確認する	1	2	3	4	5
(7) 英語で書かれた情報を収集する	1	2	3	4	5
(8) 自分と異なる立場や見方をもつ人の意見を聞く	1	2	3	4	5
(9) 本を一冊読む	1	2	3	4	5
(10) グループで協力して活動する	1	2	3	4	5
(11) 海外で起こった出来事や課題について考える	1	2	3	4	5
(12) あるテーマについて論述文(作文・エッセイ)を書く	1	2	3	4	5
(13) 学習の中で多様なメディア(新聞・映像・音楽など)に触れる	1	2	3	4	5
(14) 学習の成果を社会に発信する	1	2	3	4	5
(15) 自分が取り組んだプロジェクト(探究・調査・実験・発表会) のよかった点や課題を整理する	1	2	3	4	5
(16) 一問一答の問題を解く	1	2	3	4	5
(17) 用語や出来事を暗記する	1	2	3	4	5
(18) 作文・エッセイ・発表などへのフィードバックを受ける	1	2	3	4	5

質問4. 高校生活の中で、あなたはどの程度意欲的に次のような活動に参加していますか(参加していましたか)。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

	まったく あてはま らない	あまり あてはま らない	どちら とも いえ ない	やや あて はまる	とても あて はまる
(1) 生徒会・委員会活動への参加	1	2	3	4	5
(2) 部活動・クラブ活動への参加	1	2	3	4	5
(3) 学校行事(体育祭・文化祭等)への参加	1	2	3	4	5
(4) 授業外でのプロジェクト・探究活動への参加	1	2	3	4	5
(5) ボランティア活動への参加	1	2	3	4	5
(6) 海外との交流活動への参加	1	2	3	4	5
(7) 留学(短期・長期・交換等)	1	2	3	4	5

質問 5. 学期中の平日（月曜～金曜）放課後の学習時間（＝1 日あたりの平均）と学習内容を教えてください。

※時間は 10 分や 30 分の単位でおおまかに回答してください。

※時間あるいは分が 0 の場合は、空欄ではなく、例のように（ ）内に 0 を記入してください。

例) 「およそ（ 0 ）時間（ 40 ）分」、「およそ（ 2 ）時間（ 0 ）分」など。

(1) 1 日あたりの放課後の学習時間： およそ（ ）時間（ ）分

(2) 1 日あたりの放課後の学習時間のうち、①～⑤の時間配分を教えてください。

①高校の授業の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
②塾・予備校の予習、復習、課題(問題を解くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
③調べ学習、探究・プロジェクト活動、課題論文	およそ（ ）時間（ ）分
④大学受験の準備(過去問を解く、小論文を書くなど)	およそ（ ）時間（ ）分
⑤資格試験に向けた勉強(英検、TOEIC、漢検など)	およそ（ ）時間（ ）分

質問 6. あなたの高校の成績と英語運用能力に関する資格について教えてください。

(1) あなたの現在の成績は、学年でどのくらいですか。

1. 下のほう

2. まんなか

3. 上のほう

(2) あなたが現在取得している英語運用能力に関する資格を教えてください。あてはまる番号に○をつけ、級やスコア等を記入してください。

1. 英検（実用英語技能検定）（級： ）
2. TOEFL（スコア： ）
3. TOEIC（スコア： ）
4. IELTS アカデミック・モジュール（スコア： ）
5. その他（具体的に： ）（スコア等： ）
6. 資格は取得していない

質問 7. あなたは現時点で、以下のことが、どのくらい身についていると思いますか。各項目について、もっともあてはまる番号に○をつけてください。

身に 　あまり 　どちら 　やや 　身に
ついて 　身につ 　とも 　身につ 　につ
いて 　いて 　いえない 　いて 　いて
いない 　いない 　いない 　いる 　いる

- (1) 興味のある対象について深く学習し、理解する姿勢 ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- (2) 人文・社会・自然科学を横断する幅広い知識 ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- (3) 困難な課題に取り組む力 ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- (4) 他者と意思疎通をはかり人間関係を構築する能力 ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- (5) 自分の良心や社会の規範に沿って行動する力 ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- (6) 人や社会によって違った考えや文化があることへの理解 ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5
- (7) 他者を尊重し、ともに行動する力 ----- 1 — 2 — 3 — 4 — 5

	身に ついて いない	あまり 身につ いてい ない	どちら とも いえ ない	やや 身に ついて いる	身に ついて いる
(8) 予測不可能な事態に直面しても挑戦する姿勢	1	2	3	4	5
(9) 自分の生活と自然や社会とのつながりの理解	1	2	3	4	5
(10) 自分の行動を評価し、次に生かす力	1	2	3	4	5
(11) 問題が起きたときに解決する力	1	2	3	4	5
(12) 自ら率先して行動する力	1	2	3	4	5
(13) 自分自身で計画立て、それに基づいて実行する力	1	2	3	4	5
(14) 情報を処理し、活用する力	1	2	3	4	5
(15) 地域社会の一員としての自覚	1	2	3	4	5
(16) 日本社会の一員としての自覚	1	2	3	4	5
(17) グローバルな社会の一員としての自覚	1	2	3	4	5
(18) チームで協力して行動する力	1	2	3	4	5
(19) リーダーシップの能力	1	2	3	4	5
(20) 「国語(現代文、古典等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(21) 「社会科(歴史、地理、公民等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(22) 「数学」に関する能力	1	2	3	4	5
(23) 「理科(物理、化学、生物、地学等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(24) 「外国語(英語等)」に関する能力	1	2	3	4	5
(25) その他の教科(芸術、体育、専門等)に関する能力	1	2	3	4	5

質問8. あなたは、あなたの現在や将来についてどのように考えていますか。

	まったく そう思 わない	あまり そう思 わない	どちら とも いえ ない	やや そう 思う	とても そう 思う
(1) 学校生活について					
① 学校の授業などを通じた <u>今の自分の学習</u> に満足している	1	2	3	4	5
② これまでの学校での学習やさまざまな経験で得られた <u>今の自分の能力</u> に満足している	1	2	3	4	5
③ <u>高校生活全体</u> に満足している	1	2	3	4	5
(2) 将来について					
① 将来、 <u>学びたい分野</u> について考えている	1	2	3	4	5
② 将来、 <u>行きたい大学</u> について考えている	1	2	3	4	5
③ 将来、 <u>やりたい仕事</u> について考えている	1	2	3	4	5

